

軽音×恋愛の奏者 巻頭に参戦 春屋アロヅ
初恋とともに

Lagado Fukapon 川鶴鶴脇 なぎ

祝1周年 特大ボリュームで贈る合同コピー誌
深夜3時間で印刷/製本できるパートナー募集中

mnfikmyhk/**CREATURE**/**MIXING 3**
Five *Six*

「さようなら、五月病」
彼女はきっと、泣いていた

mnfikmyhk
CREATURE MIXING 3
five

2009年5月31日 初版発行

発行所 まにふいくみやはか
<http://www.projectkaigo.org/>

印刷／製本 project KAIGO

Copyright © 2009 春屋アロヅ, 川鶴鶴助, なぎ, Lagado, Fukapon,
まにふいくみやはか
この本は Creative Commons「表示 2.1 日本」ライセンスに従い頒布されます。
詳細は <http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/> をご覧ください。

僕は単純に、凄いなって思った。

5分待つ勇気もないくせに――

彼女は笑って、待っていた。

難解辛苦 テーマが悪いと思いました

春屋アロヅ

三回目にて初参加です。テーマ見た瞬間に居酒屋でダベってる五人が思い浮かんだので書いてみたら、そのうち二人しか出てきませんでした。……あれ?

<http://third.system.cx/>

Lagado

幼少の頃、百貨店屋上の遊具スペースで開催された「〇〇レンジャーシャー」とかで、5人組の戦隊のうち2~3人しか登場しないことに純真なる疑問を覚えたものだ。あれは時間でも脚本でもなく、予算の問題か。

<http://www.k3.dion.ne.jp/~lagado/>

川鶴鶴助

長かった。楽勝だと思ったのに。第一稿あがったのが締め切り日の朝。誤字脱字その他ミスには是非目をつぶっていただきたく。5ですが7でもあり、なぜか双子祭り、そして全開です。意味なく細かい設定や妙なこだわりがたくさん詰まっていますのでいろいろ推理してみてください。指定キャラ、今回は無理だと思ってたんですが……

なぎ

例によって未完という酷い有様ですが、文章を書くことに少しづつ慣れてきたような気がします。この原稿の残りの部分は夏コミまでに上げるようにします。テーマに絡めるのが面倒だったので五人兄弟という安直な設定になりました、代わりにオプショナルな設定のお姉さんを登場させました。なかなかいいキャラなのでこれからも登場させたいですね。

Fukapon

何を書きたかったのかわからん……。と気付いた時点で書き直しが当然ですが、そんな時間はありません。てここで押し通してみました。今回も年齢高めの構成ですが、紬の口リップさのおかげでいつも通り私らしくなっております。あーゆー子がいたら可愛いなあって思うんですけど、いませんかね。いなきゃ私がなるしかないよね。

<http://www.fukapon.com/>

レイアウト

今回は入稿早かったですねえ。19時には揃っていました。この企画の趣旨を理解していただけているのだろうか。とか己の首を絞めるようなことは言わないことにしています。

印刷・製本

ページ数多すぎ! 嬉しいけど大変! その辺の複合機じゃ製本できないんだもん。

<http://www.projectkaigo.org/>

CONTENTS

初恋とともに	春屋アロヅ	03
伍人死んだらまたおいで	Lagado	11
珠坂の女神	川鶴鶴助	15
東雲家五兄弟記録簿	なぎ	70
こんメイ!	Fukapon	76
難解辛苦		99

CREATURE MIXING
mnfikmyhk/3/five

2009-11-15/TKY will be released

初恋とともに

春屋アロヅ

美紀の手がびたりと止まる。
「食べればわかる」

「……コレ、失敗作か？」

高校に入ってから一人暮らしをしている雅の家に美紀が来るのは珍しいことではない。お互いの家が近いこともあって、宿題を片付けたり、並んで映画を観たり、漫画を読んだり、と、放課後の何もないひとときをここで過ごすことはむしろ多い。

とはいっても、独りで住むには少々広い、家族用のマンションに暮らしている雅にとって、友人が遊びに来るのは嬉しいことだ。特にそれが美紀であれば、それ以上喜ばしいことはない。

「そいやうちの母親が最近多いって文句言つてたな」
年が明けてまだそれほど経っていないある日、夕飯の準備が済んで手を合わせるや、美紀がそんなことを言い出した。

「何がだ？」

「ここで飯食つたり泊めてもらつたりするのが、入り浸つたら迷惑だらうって」

「わざわざそう言って、食べてみせた。そこそこの味だが、雅としては充分合格だ。だが、普段から表情をほとんど変えないせいでも、いくら付き合いが長いといつても、美紀には我慢しているかどうかまではわからないだろう。不安げに、それでも思い切ってスプーンをがばっと口に入れた。

「……なんだ美味いじゃん。変な前置きするなよ！」

「私がそもそも料理下手なのは知ってるだろう。今日のはともかく、また失敗しないとも限らんから、その時は頑張れということだ」

「わかりづれーよ！」

「そりゃもしねないな」

平然と言い放つと、美紀はじろりと雅を睨みつけてから、表情を緩めて食べ始めた。雅もそれを見て、自分も二口目を口にした。

中学生の時、美紀と知り合ったばかりの頃は、まさかこんな関係になるとは思わなかつた。勉強は得意だが無口で感情表現に乏しい雅と、頭よりも体が動くタイプで口は悪いがよく笑う美紀とは、クラスと身長が平均より高いことくらいしか共通点がない。

室でケンカを始めた時に縁が繋がつた。相手は他の男子に任せ、暴れる美紀を強引に引きはがしてそのまま教室の外に連れ出したのだ。それまで一度も口を利いたことのなかつた相手の突然の乱入に、その時の美紀は啞然としていた。

「ああ、それから失敗作を片付ける手伝いもしてほしいな」「大よなあ、なんて言いながら、ほっとした顔でシチューにスープを突っ込む。それを見て付け加えた。

「ああ、それから失敗作を片付ける手伝いもしてほしいな」「くれば十分だ」

次号は半年後
参加者&テーマ募集中

締め切りは前日
(と言いつつ当日まで待つよ!)

m CMX 4
<http://www.projectkaigo.org/>

それ以来、お互い何とはなしに言葉を交わす機会が増え、進級する頃にはお互い親友と言つてはばかりないくらいに親しくなった。その頃の美紀は今よりずっと不安定で、女子の友だちがほとんどいなかった。その時に支えになれたことが、今の関係に繋がっていると思う。

当時は雅の両親もこの家に住んでいたから今のように泊まりに来ることはほとんどなく、代わりに美紀の家で、時には美紀の兄も巻き込んで遊ぶことの方が多いかった。

高校に入る間際に父親の転勤が決まった時、雅は頑として両親についていくことを拒み、三人で住んでいた家に一人残ることになった。一人で暮らしていると少々の不便や煩わしさはあるが、それでも自分の決断は正しかったと思う。こうして美紀と二人で過ごす機会を簡単に得ることができるのだから。

不意に雅の携帯が鳴った。邪魔が入った、という不満は液晶に表示された名前を見たらすぐに消えた。美紀にもそれが伝わったらしい。

「誰？」

「綾乃だ。——もしもし？」

『あ、ミヤちゃん？ 今大丈夫？』

「ああ」

『ああ』

美紀に綾乃の言葉をそのまま伝えると、美紀は自分の携帯を取った。

「明日は……五時半から練習だから、五時くらいまでなら大丈夫だろ」

「もしもし。昼間なら私も美紀も大丈夫だ。夕方からは用事があるんだが」

『うん、よかった。……もしかして、ミキちゃんそこにいるの？』

「ああ。代わろうか？」

『うん、じゃちょっと代わって？』

美紀に携帯を渡すと、美紀は満面の笑みを浮かべて話し始めた。

小柄で華奢な彼女は、物腰が穏やかでいつも笑顔を浮かべているような子だ。彼女と話している時の美紀は頬が緩みっぱなしで、人目もはばからずに撫でたり抱きしめたり、と大騒ぎだ。雅が彼女と仲良くなつたのも、そもそもは美紀が彼女と仲良くなつたからだ。

正直に言つてうらやましいことこの上ないのだが、雅の目から見ても、綾乃は理想的な「かわいい女の子」だ。そばにいて嫌な気分になつたことなんて一度もないし、美紀のメロメロっぶりもよくわかる。だから美紀と引き離そなどと考えたこともない。

『雅、代わるか？』

『いや、もうそのまま切つていいい』

『ん……大丈夫だつてさ。じゃあまた明日な。——うん、お休み』

手元に戻ってきた携帯を置んで食卓の隅に追いやつた。もう誰からもかかってくることはないだろう。

『綾乃がお休み、だつてさ』

『ああ』

愛は「わかつてくれた？」とウインクをして、ベッドサイドの丸椅子に腰掛ける。

視線の外れたこの機に、紬は強すぎた眼光を伏せた。

「幸運だった、と思います」

「そう？」

「はい。光太さんは、その、とても優しくしてくれました……」

「別にお世辞はいいのよ、それとも……？」

「お世辞ではありません。私にチャンスもくれました」

紬の回答に、愛は肩を落とす。

（紬はきっと、自分の失敗しか頭にないのね）

含みを持たせた言葉に気付かなかつたことに、その余裕のなさに、彼女は少し残念と思い。同時に紬の処遇は、もう心に決めていた。

「けれども、失敗した？」

「はい……。やはり、しばらくは戻れません。それに、アイアイの家族だとわかつては……」

「あなたの助けた子、それにあの子の両親は、きっと一生、あなたに感謝するわ」

「……でも」

「私たちの仕事は『運も実力のうち』よ。過程はどうあれ、あなたが人を幸せにしたことは明らかでしよう？」

「ありがとうございます……」

（やつぱり、はじめ過ぎちやうかな）

愛は決心を変えることなく、腰を上げ、言い切る。

「とは言え、諸刃の剣なのが、紬ちゃんのいけないところよねえ」

「……済みません」

幸せの余韻が残った表情で伝えてくれる。それを受け取って、シチューの最後の一囗を飲み込んだ。

「「じちそうさま」」

食器を流しに置きに行こうと立ち上ると、美紀が自分の分の皿を取って言った。

「洗っとくから先に風呂入って来いよ」

「いや、自分でやるからいい」

「いいから。それぐらいオレにも手伝わせる」

返事を聞かずにはいられないと食器を運んでしまった美紀の背中に礼を言って、先に入浴を済ませてしまふことにした。

「おう。食パンあるか？」

「そうだ、鍋はまだ洗うな。まだ少し残ってるから明日食べよう」

「んー……あ、あつあつだった。あと三枚残ってる」

パジャマを持って美紀のそばを通り過ぎる。腕まくりをして流しに向かう彼女の姿に、ふと不埒な想像をしてしまった。

「ん？」

「いや、なんでもない」

きて、片手で脚を引き出して、部屋の真ん中に置いた。そこに紅茶を載せると、美紀もクッキーの皿を隣に置いて、ドアを閉めた。暖房は入れておいたから、寒さは感じない。

美紀は入り浸るようになつてから持ち込んだビーズクッシュョンを定位位置に並べてそこに腰を下ろす。ベッドに背中を預けてうんと伸びをした。その左隣に雅も自分の座布団を置いて腰を下ろす。

「はい」

「明日の話だけど、別にお前まで五時に付き合わなくともいいんだぞ？」

「何、そう言っておけば夕方には用事が済むように動けるだろう。気が向いたら明日その場で綾乃を誘えばいい」

クッキーに手を伸ばす。一口かじつてから、思い出したように付け加えた。

「それに久し振りに挨拶に行くのも悪くないだろう。この間の学祭ライブ以来だから、もう三ヶ月近く会つてないしな」

「冬場は大学の方が忙しいとかでライブしばらくないからな。三月末にどつかでやるっていうたけど」

「大学生は大変だな」

美紀はぱっさり切り捨てた。こうも遠慮がないのは、話題に出た美紀のバンドのリーダーが美紀の兄だからだ。

そのまま先に入って、小さなテーブルを部屋の隅から持つた。そのまま先に入って、寝室のドアを開けてくれた。

「お前そっちのクッキー持って、ドア開けてくれ」

「あいよ」

雅と入れ替わりに浴室に入った美紀は、あつという間に戻ってきた。Tシャツにジャージ姿の彼女は、雅が用意していた紅茶とお茶請けを興味津々でのぞき込んできた。

「お前そっちのクッキー持って、ドア開けてくれ」

「あのねえ、何が悪いかわかつて謝つてるんでしようね？」

「はい、それは、二人の一日を、こんなことに……」

「違うわ。あなたの介入で、響子ちゃんを悲しませるかも知れないってことよ」

にやりと、いつも以上にわかりやすい含み笑いを近づけて、紬の頭を優しく撫でた。

「えつ？」

「それ以上は、自分で考えなさい。さつきも言つたけど、しばらく一緒に暮らしていくから」

「それって……？」

「紬ちゃんは小さいうちから仕事ばかりだったから、ね。この辺で恋でも、経験したら？」

「こ、恋って、そんな、紬がご主人様にいつ？」

紬が真っ赤に染まったときには、もう、愛は廊下の方へと歩き出していた。

「あらあら、光太ったら、そーゆーのが好きなの？ 変態さん、隠れてないで出てきなさい」

「……気付いてたのかあ」

廊下からひょこっと顔を出した光太と響子を、同じように撫でる。

「当然。じゃあ私は仕事に戻るから。響子ちゃん、がんばってね」

「あ、はいっ！」

誰よりも悪戯っぽい笑顔で、去つていった。

彼女の言葉を、少なくとも響子だけは、よく理解していた。だから早速。

「さてと、つて、こらそこおつ！ なんで手を繋いでるのよつ」

務め、美紀はベースを担当している。他にギターとドラムを加えた四人編成で、美紀を除く全員が大学一年生だ。コピーやロック・アレンジがメインで、時々ライブハウスで演奏している。

雅はライブには毎回のように顔を出しているし、そもそも浩太とは中学生の頃からの知り合いだから、二人としゃべっているうちに他の二人とも仲良くなつた。

「三月末か。四人の演奏を聴くのは少し先になるな」

雅は何気なくそう言つたのだが、不意に美紀が顔を曇らせた。

「……どうした」

つい今し方までの表情との落差に、雅は戸惑つた。雅の視線に、美紀は少し逡巡してから説明した。

「いや、兄貴がさ。カルマ式のメンバー増やすとか言い出して」「ほう」

意外な言葉に、雅は目を丸くした。これまで二年近く聴いているが、いろいろな曲をギター一本とドラム以外の三人のボーカルとで演奏してきた。音楽は素人の雅には、これ以上のメンバーが必要だとは思えなかつた。だが、浩太は五人目を入れると言う。

「ボーカルを入れるのか？」

「いや、キーボード。別のバンドでも弾いてる人で、実際すげー巧いんだけどさ」

「納得いかないのか」

美紀は小さく頷いた。

美紀がカルマ式というバンドを大切に思つてることは、バンドに入る前から美紀と一緒にいた雅にはよくわかっている。美紀と話ををしていて、バンドの話が出ないことはほとんどない。ベー^スは楽だと思つて、とかあんなの弾けるか、とか愚痴も多いが、

もう限界だから。
トンとベッドを滑り降りて、病室を出て行こうとしたとき。

「なんだ、元気そうじゃない？」

光太とともに入ってきたのは、長身の女性。

よく知つた声に、二人とも、驚きながらも会釈した。

しかしその光景を目の当たりにした、光太の方は驚かざるを得なかつた。

「え？ 母さん、紺……じやなくて、風間先生のこと知つてるの……？」

それを聞いて、光太と同様に響子も驚き。

「紺と幸子おばさんって知り合ひなの？」

「……ふええっ？『母さん』つてえ、えつ？ アイアイ、ご主

人様のお母さん？」

「あ、そ、それはこっちの話……」

ついつい出てしまつた昨日からの口癖を言い訳しながらも、目はまん丸のまま。三人の中でも特に、紺は泡を吹いたようだつた。

そんなことをお構いなく、むしろ、そうなることを予見していたかのよう平然と、突然の訪問者は話を続けている。

「あとで聞かせてもらうからね。あ、そうそう、相沢は旧姓。今は松田愛なの。あだ名はアイアイのまま残つちやつたけどね」

「……二人つて、どういう関係なんですか？」

「今は秘密」

本気で嫌がつているように見えたことはない。

自分の兄がリーダーで、自分以外全員が年上、という構成であれば、そもそも入ることもためらいそういうものだが、美紀は自分が三歳年上のメンバーと仲良く、また対等にやってきた。

「確かに巧いし、コピーとかアレンジとかしやすくなるけどさ。

いなくても何とかなつたし、何とかするだろ」

拗ねた口調で言つた。唇を尖らせたその様子はいつもの男っぽい言動とはまったく違つて、まるで子供だ。雅は思わず抱きしめたい衝動に駆られ、ぐつと我慢した。代わりに右手で柔らかく頭を撫でてやる。

「もう会つたのか？」

「会つたっつーか、その人のバンドのライブ聴きに行つたんだよ、先週。終わつてから兄貴とか金やんとしゃべつてたけど、まあフツーにいい人っぽかった」

雅の手を振り払おうとはせず、そのままの口調で答えた。

「他の二人はなんて？」

「金やは賛成、寛美さんは保留」

寛美さんがすぐに賛成しなかつたのか。てっきり逆だと思つてたが」

雅は理由を想像してみた。

ギタリストの寛美は浩太の恋人で、うらやましいを通り越して少々呆れるくらい仲がいい。特に理由もなく反対するようなことはなさそうだ。あるいは寛美はギタリストだから、自分一人でいのに、と思ってのことかもしれない。ただ、それと言うなら寛美や美紀が歌う時は浩太もギターを弾くのだから、その代わりだと思えばそれほど反対しなさそうに思える。

尤もそれは三人にとつて意外でもなんでもなく、彼女らしいと言える行動だつた。

「悪いんだけど二人とも、少し席を外してくれる？」

「ああ……」

「はい……」

母親、あるいは現恋人元友達の母親、お願いを断ることはそう

そうない。いつも通りだ。

けれども。

「いい子いい子。そうそう、昨日のことは幸子から聞いてるから。しばらく、一緒に暮らしたらいいわ」

「楽しいでしょ？ そういうのも。さ、今はお外行つてなさい」

突飛な提案に対しても、どうしたつて。

二人ともあつつけにとられ、病室を出て行つた。

その後ろ姿に、愛は満足げに微笑み。ベッドの上の紺は、逆に表情をこわばらせた。

「ここまで、ご存じだつたのですか？」

「そうねえ。何一つ知らなかつた、かな」

線が細いながらも凜とした声に対し、安穏と、あつけらかんとした声が返される。

「本當ですか？」

「本當。ねえ、ちょっと耳貸して。——私の裏稼業、光太は知らないから。下手に干渉なんてできつこないわ」

「それじゃあ……」

「そう、たまたま。もしくは、あなたがよほどの幸運か、もしくは不運か」

すると案の定、光太は落ち着いて、冷たい言葉を返してきた。

「……冗談も過ぎると可愛くないぞ」

「ふふつ、いいよ？ 今日ぐらいは貸してあげる」

目を瞑っているけれども、ベッドサイドの様子は手に取るようになる。

響子の言葉に、光太は慌てて言い返すだろう。

「おい響子、何だよそれ」

「メイドは大切にしないとねえ？」

「知るかっ。ちょっと出てくる」

彼の足音が遠ざかつていくのを確認しながら、紬は目を開けた。

「ふふーん、照れちやって。行つてらっしゃーい」

足早に病室を出て行く彼を見送り、響子が再び、ベッドの方を向く。

視線を合わせた紬が、言う。

「……響子ちゃんって、呼んでいいかな？」

能う限り、けれども自然な範囲で、彼女は明るく振る舞つた。

紬の表情が、それを求めていたから。

「……響子、ごめんね」

「なんで謝るんですか？」

感覚が告げた通りに暗い話題になりそうだったけれども、紬はまだ、穏やかな笑顔だ。

「だつて、大切なデート、台無しにしちやつたから……」

「そんなことありませんよ」

「ううん、いいの。失敗は、失敗だから……」

「……課題、つてヤツですか？」

「……気付いてたんだ」

「はい、何となく。光太は気付いてなかつたみたいだけど。あ、

でもだからって、話に乗つたわけじやありませんよ。観覧車でキ

スするのは憧れでしたし、できましたし。全然、台無しなんてことなかつたです」

どこまでわかつて慰めてくれるんだろうと、涙を止めるのが精一杯の紬に対し。

響子は踏み込むたびに、無意識の笑顔を増していく。

「でも、本当なら、今頃……」

「そうですね」

「……ごめん」

涙が混じる彼女の声に、上機嫌な声が被さる。

「今頃、一緒にご飯食べて、今日は紬と、お風呂入ろうかなつて、思つてました」

「えつ……？」

ポフッとベッドの端に腰掛けた響子は、足をパタパタさせて、虚空を見つめて。

「まだ、時間かかると思ひます。今まで長かつたんです。光太も私も、案外ロマンチック重視ですから。それとも臆病、なのかな」

「……ありがと…………」

「何泣いてるんですか。やりたい盛りにお預けつてひどいですよね、ぐらり言つておけば、気が楽になります？」

「うん……。ありがとうね……」

あまり嬉しそうに紬が泣くものだから、響子までもらい泣きしそうになる。

顔がわざかに上向いているから、まだ、涙はこぼれない。でも

一方の金やん、ドラマの金田はラグビーでもやっていそうながつちりした体格の男だが、見た目に似合わず素直で人当たりがいい。その上、気配りのできる人だから、美紀が嫌そうな顔をしているのに気付いて止めそうな気がするのだ。

「金やはんは反対しねーよ。そもそも那人、金やはんの彼女だし」「なるほど。それなら反対しないだろうな。……というか、その人は女性なのか」

「あー、うん。もうじき三十一だって」

「三十一？ ……ずいぶんとまた年の離れたカップルだな」

金田は今二十歳だから、ちょうど十歳差がある。それで付き合っているのもすごいが、そもそもよくそんな出会いがあったものだ。

「近所に住んでて子供の頃から面倒見てもらつたりなんだりで付き合いがあつたんだてさ。金やはんずっと実家暮らしだから」

「なるほど。近所のお姉さんだつた訳か」

「しかも初恋の相手なんだと」

雅は思わず手を止めて、感嘆の声を上げた。

「レアだな。そんなに長い間想い続けられるものか」

「そこはちつと金やはん尊敬した。けどそれとこれとは違う話だろ」

クッキーをつまんで一口で食べて、紅茶を飲む。雅もクッキーを取つた。かじりながら考える。美紀はどうしたいのか。どうすればいいのか。

ふと思いついたのは、自分たちのことだ。美紀が綾乃と仲良くなつすぐの頃、雅も含めた三人でずっと一緒にいる時期があつた。その三人の中に後から入ってきたのが、明日選ぶプレゼントを贈る相手、佳奈だ。その時は佳奈と多少でも話したことがある

のが綾乃だけだったのだが、美紀も雅も、フレンドリーでおしゃべりな彼女とすぐに仲良くなつた。

元々の三人で何かを作つていたわけではないが、佳奈が輪に加わる前と後とで空気が変わつたのは間違ひない。それでも美紀は大した抵抗もせずにその変化を受け入れられた。

少なくとも音楽のことが絡まなければ、同じことははずだ。

「お前はその人自体ダメなのか」

「いや、その人だからつづけじゃないんだけど」

「バンド云々がなくてただ金田さんの彼女というだけなら、仲良くなできそうか」

「たぶんな」

断定はしないが、ほとんど考えずに頷いたことを考へると、少し話した限りではその人には好感を持っているのだろう。単にバンドのメンバー構成が変わつて、音なり空氣なりが変わるのがなのだ。

「それなら、バンドの中でもうまくやれるんじゃないのか？」

「……お前は本当にかわいいな」

思わず本音が口をついて出た。美紀は雅をじろっと睨みつけた。

「女々しいって言いたいのかよ」

また手を動かし始める、視線は多少緩んだ。短い髪を梳きな

がら、少し言葉を選んで口にした。

「音楽的にどうなるかはもう浩太さんが考へてるだろ。最初は試運転だろうし」

「それなら、その人が入って音が変わるのは、浩太さんの狙いどころだろう。私にわかることじゃないかもしないが、お前にはわかるんじゃないかな？」

今度は返事がなかった。頷きたくないだけだ。雅はなんとなくそう思った。

「お前がその人と人間的に合わないならまた別だが、そうじゃなければ、まずは受け入れてみたらいいんじゃないかな？」それでやっぱりダメだと思ったんなら、そう言えばいい」

「んー」

美紀はやはりすぐに頷かなかつた。雅の手のひらの感触を味わうように目を閉じた。

「それしかないよなあ」

そう呟いたのは、しばらく経つてからだ。

「とりあえず五人でやってみて、やりづらかったら兄貴に文句言う」

そう宣言して顔を上げると、すっかり冷めてしまった紅茶を一息に飲み干した。ふう、と息を吐いた美紀は、幾分すっきりした顔をしていた。

「ありがとな、雅」

「どういたしまして」

雅も紅茶を飲み干して、お代わりを入れるために、ポットを手に立ち上がった。

時計の針がこちこちと音を立てる。ベッドのすぐ下に敷いた布団からは、美紀の寝息が聞こえてくる。その他にはほとんど音がない。そんな静けさの中でずっと目を閉じているのだが、いつ乗り込んだ。

「光太、手出して」
「あ、ああ」
息を切らしながら追いついてきた光太が引っ張り上げられた直後。
「済みません、私たち、その子の家族なんです。乗せてください」「わかりました。どうぞ」制服姿の男性に許可を取ると、響子は身軽に、救急車の中へと乗り込んだ。

「おい、その子の家族だつてよ、通してやれ」「ありがとうございます。通してください」
「あー待つて、一緒に乗せてあげてー」
集まる人をかき分け、通り道を作つてもらい、ついには紬の元に到達すると。

「済みません、私たち、その子の家族なんです。乗せてください」「わかりました。どうぞ」

制服姿の男性に許可を取ると、響子は身軽に、救急車の中へと乗り込んだ。

「光太、手出して」
「あ、ああ」
息を切らしながら追いついてきた光太が引っ張り上げられた直後。

「バタン

後部ハッチは閉じられ、「シートベルトしてください」という救急隊員の声とともに、サイレンを鳴らして車は走り出した。

「あの、済みません……」

同乗したはいいものの、状況のわかつていない響子たちが恐る恐る隊員に声をかけたとき。

「あ……きょう……い……の……？」

「大丈夫ですよ。ご家族の方が来てくださつてます」

か細いながらも聞こえた紬の声に、とにかく、無事なんだなど一人は胸を撫で押した。

「もう、心配したよ……」

「はあ、よかつた……」

もより遅くまで起きていたのに、眠気が来ない。時折寝返りを打ちながら、美紀の寝息を聞いていた。

ふと美紀の寝息が止まり、むくりと起き上がった気配がした。

そのまま部屋を出て行く。面倒なのか音が出ないように気遣つて、ドアは閉めないまま。遠くからドアの閉まる音がして、雅はほっと息を吐いた。思わず息を詰めていた自分に苦笑して、時計を見る。午前三時を過ぎたところだ。

しばらくしてトイレの水を流す音がして、美紀が部屋に戻ってきた。雅は気付かれないと、また目を閉じた。起こしたと思われてはいけない。

美紀は布団のそばに歩いてくると、やや間があつて、ベッドに手をついて、そのまま腰を下ろしたようだつた。おそらくは、雅の寝顔をのぞき込むような姿勢。

そのまま時間が過ぎる。布団に戻るでもなく、ベッドにそのまま寝転がるでもなく。目を閉じていては状況がまるでわからぬ。なかなか難しいとは思うが、もし手をついて座つたまま寝てしまつたのならちゃんと寝かせてやらないと、起きる頃には体の節々が痛いに違いない。

自分にそう言い訳をして、雅はそつと目を開けた。

翌朝。雅は美紀が起きるよりも早く目を覚ますと、顔を洗つて朝食の準備を始めた。と言つてもシチューの残りがあるから、鍋を火にかけてトーストの準備をするだけだ。ついでに、昨日美紀に買わせたバナナを切つて、ヨーグルトを入れた深皿に半分ずつ入れた。美紀は真夏だろうが真冬だろうが朝は冷たい飲み物を口にする。雅は特に決めているわけではないから、美紀と同じもの

4 彼女だつて女の子

「ドジなメイドでごめんね」少し長かつた検査も終わり、紬は今、二人の目の前に笑顔でいる。

「びっくりしたよお、どこも悪くないって?」

「うん、大丈夫だらうつて。でも、今日一日は安静だけどね」

特に症状はなくとも、頭を打つたのだ。医者にはベッドの上でおとなしくしていろと言われている。

「子どもを、助けたんだつて?」

「そうなの。二人を乗せたあと、乗り場から落ちる子どもを見つけてやつて。つい受け止めに走つちやつた。この身体じや無理なのがね」

自嘲気味の笑いには、安堵が混じつていて。

「少しは自分を大切にしろよ」

彼女はきつと、子どもが助かつてよかつたとだけ思つてゐるのにな

だらう。それは決して悪いことではないが、彼女を心配する理由でもあつた。

「そうだね。ずぶ濡れで私を助けてくれた人も、風邪引かないよう気に付けてよ?」

「はいはい。冗談言えるんなら、もう大丈夫だな」

「そりやもう。でも私は怪我人だからあ、王子様のキスとか、必要かなあ?」

紬は頬を小さく上げる。

彼の胸にむにゅっと、慣れないけどわかりやすい感覚が生ずる。

「つ、それ、は、さ……」

「あのー。なんかエッチなこと考えてるみたいだけど。そうじやなくて、紬だよ?」

あまりに予想通りの反応に笑うのを堪えながら、彼女はひょいと問合ひを取つた。

「あ、ああ、紬な。……どうするんだ? 聞いてみないことには……」

「いいよ、泊めてあげて」

「でも……」

「気にしないで。紬、帰れないんでしょ? なら、泊めてあげなよ」

「いいのか?」

重ねて聞く彼は、驚いたような、申し訳ないような。

響子をそうさせるに十分な表情だつた。

「何を今更……。あつ、隣でエッチなことしちゃうつてのもいいかも?」

彼女はついに、思いつきり抱きついて。

「うあつ、何してんだよ?」

「えー、光太は私と、したくないの?」

「まあ、その……」

「なんてね。いいよ、別に。急がなくつて。……男の子は、そ

もいかないのかな?」

「そ、そうだな……」

「なんてね。いいよ、別に。急がなくつて。……男の子は、そ

もいかないのかな?」

「ちゅ

「なあつ!」

「素直な子にはご褒美! ……大丈夫、嫌とか怖いとかじやない

た。いい。オレンジジュースがあつたから、一人分コップに空けた。食卓の上は片付いたので、新聞を取ってきて食卓に放り投げてから美紀の様子を見に行く。美紀は目を薄く開いて、ベッドに寝転がつたままぼーっとしていた。ドアの音に気付いて、入ってきました雅に視線を向ける。

「おはよう」

「おはよ……あふ。あれ、オレなんでベッドの上にいるんだ?」

眠そうに身を起こして、ようやく気付いたようだった。当惑顔の美紀を見ていた雅は、ふとした衝動の指し示すとおりに美紀の隣に腰を下ろして、彼女をふわりと抱きしめた。美紀はあっさりと雅の腕の中に收まり、自分も雅の背中に腕を回した。

「……どうしたよ、急に」

「お前、昨日のことは覚えてないんだな」

「昨日のことって?」

「なんべでベッドで寝てるのか、だ」

「いや、全然……」

狐につままれたような顔の美紀の頬に自分の頬を当た。抱きしめるくらいならまだしも、雅がこんなにあからさまに甘やかな仕草をしたことは、美紀の記憶にはない。美紀はいよいよ困惑した。

「何があったんだ?」

「ん?」

「昨日の晩。オレ覚えてないんだけど、お前は覚えてるんだろ?」

「もちろんだ」

「教えろ」

「自分で思い出せ」

から。ただ、今は、他に大切なことがあるだけ。そうでしょ? 「……こうもうまく恩を売られちや、追い出せないしな」

「だよねえ。お子様の皮を被つた何とやら、だよ。さ、降りよ」

「ああ、迎えに行くか」

ゴンドラのドアが開く。

二人は繋いだ手をそのままに、紬を捲しに歩き出した。

「どこ行ったんだ?」

「すぐ見つかるかと思つたんだけど。電話してみるね」

しばらくしても響子は携帯電話を耳に当てたまま、ふるふると首を振つている。

「どうやら、電話に出ないらしい。」

「つたく、迷子じやないだろ?」

光太は軽口を叩きながらも、響子の挙動を見張つているではない。あろう事か、ストレッチャーに乗せられ運ばれているではない。の向こうに、見慣れぬ状況があつた。

「響子、あれ……」

「ん? 何?」

電話機をそのままに、光太が指差した方を見ると。

人混みの中にできだ人集り、その向こうに見える紬らしき存在。

あろう事か、ストレッチャーに乗せられ運ばれているではない。か。

「何ばさつとしてんのよつ、行くわよつ」

「あ、ああ、そうだな」

響子は一目散に走り出す。

光太はワンテンポ遅れながら彼女の後を追つた。

「すみませーん、どいてください。その子の家族ですー」

「無茶言うなよ」

「私から言わせるな、そんなこと」

「いや、言えって」

美紀の頬から顔を離すと、美紀は真っ赤な顔でこちらを睨みつけている。かわいい。心の底からそう思つて、もう一度ぎゅっと抱きしめた。

「だつ……だーかーらー」

「朝食の支度はもうできてる。顔を洗つてこい」

耳元でそうささやいて、ぱつと身を離した。そのまま立ち去ろうとした雅の腰に、美紀の腕が巻き付いていた。動きが止まつたときには、ぱつとベッドから起き上がって首にも腕が巻き付く。抱きついているのではなく捕まえにかかっているのは、入つていねた。

「どうした」

「どうしたもこうしたも……」

「覚えてないのなら気にすることはないだろう」

「お前の態度が気になるんだよ。なんでそんなに……」

「そんなに?」

「……そんなに……その」

言いよどむ姿もかわいらしい。雅は美紀のそんな姿も好きなのだ。教室で見せるがさつで開けっぴろげな表情も、時折見せる真剣そのものの横顔も、ステージ上で見せる上気した笑顔も、雅に甘えたりからかわれたりする時のふくれつ面も。

「私がお前に甘えるのは不自然か?」

「嫌じゃねーけど、急にどうしたんだろ? って思うだろ」

「ふふふ」

「だからなんだその意味ありげな笑いはっ！」

「だから意味はないと言つてるだろう？ 単にお前の反応が面白いだけだ」

「くあーっ！」

こんなに頬が緩むのは久し振りだ。結局美紀は雅に半ば引きず

られるようにして洗面所に連れて行かれた。不承不承顔を洗って歯を磨く間に、トースターのスイッチを入れてシチューをよそつた。トーストが焼ける前に現れた不満げな美紀を椅子に座らせて、雅は後ろから耳元にささやいた。

「昨日はお前が寝ぼけてベッドに入ってきたんだ。自分の部屋と勘違いしたんじゃないかな？」

「……そんだけか？」

「一晩中しがみついておいてそれだけはないだろう。おかげで寝不足だ」

「あー……それは悪かったよ」

「ついては食べてから少し寝るから、出かける時間になつたら起こしてくれ。十一時だったよな？」

雅はそう言つて身を離すと、二人分のトーストを取りに行つた。

「ああ。それくらいは構わねーけど……」

トーストとシチュー皿を並べて置いて、隣の椅子に雅も腰を下ろした。

「なーんか隠されてる気がする」

「だとしても寝ている間のことだ。そもそも私しかいないんだし」「だからそういうことをだな——」

突然のことにキヨトンとしている響子を背にして、小さく手を振りながら。

紬は観覧車乗り場へと続く階段を、一人、降りていった。

「お幸せに。なんて、言い訳っぽいかな？」

独りごちて見上げたイルミネーションが、わずかに滲んで見えた。

「なんか紬に悪いことしちゃつたよね……」

「二人きりなんて、今更なんだけどな」

(……これだから私が苦労するのよ)

内心溜息をついた響子だが、そんな後ろ向きなことは言つてられない。

紬が気を遣つてくれていることは気付いていた。だからと言ふわけではないが、彼女の気遣いを理由に勢いが付くなら、それでもいい。

「ねえ、隣座つてもいい？」
「ああ、好きにしろ」
「ありがと。……つと」

ゴンドラの中で席を移ると、響子はくてつと、身体を右に倒した。
「一度聞きたかったんだけどさ」「何？」
頭上の声に、響子は答える。
「こういうの、好きなの？」
「そういうのって？ 観覧車のこと？」
「それもあるけど……」

「そんなに気になるなら、私が寝ている間に仕返しの一つもすればいい」

雅がにやりと笑つてそう提案すると、美紀はびたりと口を閉ざした。

光太は左肩の重さを気にして、車窓の外に投げ出した視線を動かせないでいる。

「……こうやって、くつたりすること？」

照れていることなどとつくるお見通し。わざとらしく問い合わせながら、両手で彼に触れた。

「ああ。……こういうの、嫌いなのかと思ってた」

「好きだよ。年中べたべたしたいとは思わないけどさ、手を繋いだり、肩を寄せたり、……キスしたり、したいって思う」

「そつか。なら、これからはそうするから」

「うん。……変に優しいんだよね、光太は。でも好きだよ、そーゆーの」

——ちゅ

「うわー、な、何をつ」

「ふふーん、やつとこつち向いたーつ」

左頬を押さえながら響子に向けた笑顔は、夕日よりも真つ赤な色。

大慌ての光太から見える笑顔は、案外しれつとしていたりする。

「…………」

「そういう問題かよ……」

顔こそ向いたものの、目なんか当然合わせられず。

響子がどんな顔をしているのか、彼には見る余裕もなければ、考える余裕もないだろう。

「そういう問題。ところでさ、今夜はどうするの？」

光太の慌てぶりをいいことに、思いきつて胸を押し当てる。



頬を膨らませる彼女の瞳には、悪戯心が戻っている。
それが悪戯で済まされるのか、考えてはいなかつたが。
「……ふうん、いつの間に見たのかしらねえ?」
「ち、違うつ、誤解だつ、あれはたまたま。
「たまたま見たのね? ……まあ、いいけど」
うろたえる光太をあつさりと許した響子を見ながら、紬はやつぱり笑顔。

(ふふうん、今日は素敵な一日になりそう)
笑顔の先にも、笑顔があつた。
(特別扱い、嬉しかつたし……ね)

長く伸びた影を背に、紬は今も、光太の腕を抱いている。
「遊園地、みんなで来た方が楽しいね」
響子はとうに怒る気をなくしており、今や楽しげに彼女の隣を歩いていた。

「紬、よく来るの?」「うん、よく来るよ」
光太を引っ張る彼女に、二人とも何となく違和感を感じていたが、これで納得。

「へえ、意外のような、想像通りのような」「あー、それって子どもっぽいとか言いたいんでしょお?」「あたり」

「うー」

まだまだ多くの人がいる園内で、紬はどこかを目指している。
最初のうちは「どこ行くの?」って聞いていたが、あまりに迷いなく引っ張っていくものだから、すぐにお任せ状態になつてい

た。

「普通助けるところだろ。紬、痛い、痛いって」
今日は一日中、こんな関係だった。
「遊園地にいるとみんな楽しそうで、見ても楽しんだよ?」「んー、私は一人って寂しい?」とか思つちやう
「そこは考え方一つ、かな。ま、響子様にはご主人様がいるしね」「……そうだといいんですけど」
「そうするのが、ここからのイベントだよ?」「夕日の差す観覧車の中で……憧れのシチュエーションだもんね? 私にはなかつたけど」
紬は光太の腕を解放し、トンと、響子に押して渡した。
「えつ? 紬つ」「いいのいいの、私は下で待ってるから」

「先に言つちやうけど、いつもは一人で来てるの」「言わなくてもいいのに……」
察した響子は若干曇つたが、紬は相変わらずだ。
「心配すぎだよお。紬の趣味だから、一人でも来たいの」「ああ、なるほど。一人で旅行みたいなもんだもんね」
「そそう」

響子と紬はまるで姉妹みたいだ。仲睦まじく腕を組んでいるはずの光太は、連れて歩かれている犬のよう。
「どうか? 僕には单なる寂しいおばさんとしか」「……ご主人様は、少し、素直すぎます、ねつ!」「痛つ、ちょ、腕つねるなあつ」「光太が悪い。反省なさい」
「普通助けるところだろ。紬、痛い、痛いって」
今日は一日中、こんな関係だった。
「遊園地にいるとみんな楽しそうで、見ても楽しんだよ?」「んー、私は一人って寂しい?」とか思つちやう
「そこは考え方一つ、かな。ま、響子様にはご主人様がいるしね」「……そうだといいんですけど」
「そうするのが、ここからのイベントだよ?」「夕日の差す観覧車の中で……憧れのシチュエーションだもんね? 私にはなかつたけど」
紬は光太の腕を解放し、トンと、響子に押して渡した。
「えつ? 紬つ」「いいのいいの、私は下で待ってるから」

りた。
足下には先ほどまで光太が寝ていた布団。もし彼がいたら、命は危なかつたかも知れない。

「だ、だつて、今日、土曜ですよ？」

「だからだよ。これから遊園地行くんだからあ」

「はあ……」

くるつと振り向き今日の予定を訴える紬。一方、ベッドに取り残された響子は、理解も取り残され気味だったが。一拍置いて気付く。

「つてまさか、それ、光太とじやないですよね？」

「そだよ？　ご主人様と、響子様と、行くの！」

「なんで先生が光太と……え？」

まさかという疑いから、予期せぬ驚きに変わる響子の前で、紬はネグリジェの裾をひらひらさせて笑っている。

「そうよですよ。ふつぶーん、遊園地デート、憧れでしょ？」

「うつ……、それは否定しませんけど……」

響子はベッドの上にぺたんと座ったまま、言いにくいことを隠せぬ表情で反応していた。

「観覧車でキスして、夜は初めての……なんて、ねえ？」

「ななな何を言つてるんですか。別にそんなこと考えてなんか」

「今時キスも、その先もまだ、なんてねえ。子どもじやないんだしねえ？」

「キスは昨日しましたよつ！　だいたい、先生だって初めてって言つてたじやないですか！」

「私はいいんだもん」

悪戯っぽさ満点で転がり続けていた紬の声。

しかし突然、変調を來した。

「ご主人様を幸せにするのが、メイドの仕事だから……」

隙あらば言い返してやろうと思つていた響子が心配するほど、わかりやすい変化だつたはずだが。

「……先生？」

「ん？　あ、気にしないで。それに『先生』じゃなくて『紬』だよつ」

次の一言では、もうすっかり元通り。

（確かに今、おかしかつたよね……）

——コンコン

響子が不思議に思つていると、思考を打ち切るように部屋の方を向くと。

彼はすぐさま視線を外した。

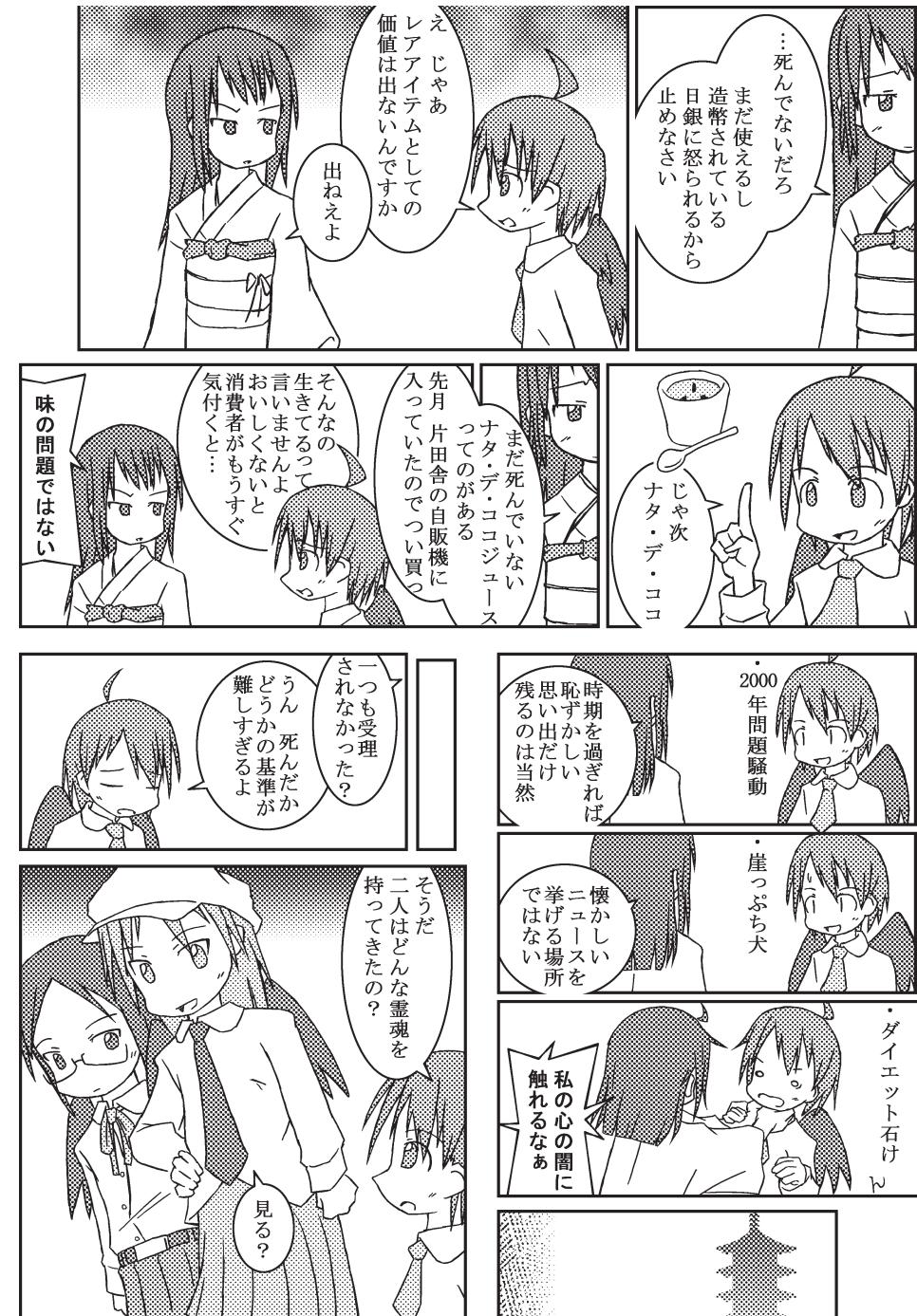
「……響子、ボタン」

「えつ？　あつ、こめんつ——」

彼の言葉の意味を、響子はすぐに理解した。

派手に外れた、パジャマのボタン。曝された素肌。慌てて前を合わせてなお、視線を外して頬を赤らめる二人。

「えー。ご主人様、紬のときと反応が違いますー。特別扱いよくないですかー」





「どうだったの？ 女の子二人と寝る、ピンク色の経験は？」
敵軍には幸子も加勢し、完敗。
「どうもこうもあるかよ」

「欲望を制するというのは、大変なことよねえ」
「あのなあ……」

結局、三人は狭いからと同衾にならなかつたのは幸いだつたが。彼の一晩は、最悪の血色に現れていた。
「ところで、あの二人は？」

「……よく寝てる」

「へえ。響子ちゃんはともかく、紬さんも大したものね」
感心した風な口調だが、箸を全く止めないと見るに、想定通りなのかも知れない。

しかし光太はそこまで察せず、ありがちな「もしも」を口にする。
「俺が変な気起こしたらどうするつもりだつたんだよ？」

「響子ちゃんはそれを望むでしよう？」 紬さんも案外、ねえ？
(はあ。姉さん、頭の中がちょっとおかしいからな)
聞くだけ無駄だつたなど光太は心の中で溜息をつき、辟易とした。

「ごちそうさま。二人を起こしてきてちょうどいい。せつかくのお休みだもの、有意義に使わないとね」
幸子は箸を置くと、キラッと瞳を輝かせた。

「そう、だな……。はああ……」

企みを隠し切れていない笑顔に、光太は一段と深く、溜息をついた。

「あれ？」 ほかにも食品ジャンルで五体集めてたよな

「ふ？」

「ええ集めましたよ
・十倍カレー
・すぎのこ村
(きのこの山・たけのこの里)
・パンナコッタ
・毒ギョーザ
・フ」

「ああ？」

「笑うなつ
言う方も屈辱
なんだ」

「フルリレロ」

「だーかーらー、その手、離してくださいよー」
「んー？ あ、ごめん……。ふみやう、今、何時い？」

「九時十分ですよ」

それでもまだ目覚めきらない眼で問う紬に、響子はどうとと言うこともなく答えると。
「……えーっ！」

いきなりアクセル全開の鋭い声が飛んできた。
「なつ、ちょよと、いきなり大きい声で何ですか？」

「なんで早く起こしてくれなかつたの！」

どうやら予定外に寝坊したらしい。
彼女は驚く響子など氣にもせず、ひょいとベッドから飛び降

一方、お寝坊さんの一人も目を覚まし始めた。
「ふあ～あ、あ、もうこんな時間……」

枕元の携帯をひつたくり、響子は時間を確認した。もう九時を過ぎている。

「もう起きなくちや……ん？」

ゆっくり上体を起こそうとするも、なぜか、持ち上がりない。

視線を横に向けると――

「うあつ。ちょと、せんせ、なんで抱きついてるんですか？」

「ふやあう、もう少し寝かせてですよお～」

それはもうしつかりと、紬が響子に、横からしがみついていた。

「はあ。もう、寝ぼけないでくださいつ」

「んあ？ あ……、林さん、おはよ……」

彼女は目を半分開くと、声のする方を見て眠たい反応をする。

そしてまた目を閉じて、可愛い寝息を……という状況にもう一喝。

「だーかーらー、その手、離してくださいよー」

「んー？ あ、ごめん……。ふみやう、今、何時い？」

「九時十分ですよ」

それでもまだ目覚めきらない眼で問う紬に、響子はどうと言ふこともなく答えると。

「……えーっ！」

いきなりアクセル全開の鋭い声が飛んできた。

「なつ、ちょよと、いきなり大きい声で何ですか？」

「なんで早く起こしてくれなかつたの！」

どうやら予定外に寝坊したらしい。

彼女は驚く響子など氣にもせず、ひょいとベッドから飛び降

「だつて、先生も暮らすんでしょう？」
 「『紬』ですかーっ。ご主人様の恋人なのですから、響子様も呼び捨てにしてください」
 彼の聞き返した意味を、頭痛を、彼女も理解していないうらしいが。
 「あ、そうですね。紬も、この部屋で暮らすんでしょう？」
 「……いつの間に決まった？ 誰が決めた？」
 「幸子姉」
 「だよな……。逆らえないよな……」
 「うんつ」
 「はいっ」
 事は光太にとつて重大で、頭痛を催すに十分だった。
 冷静になって考えれば好転するわけでもなかろうが、今はとにかく、この、よくわからない場から逃げ出すことを選んだ。
 「……俺、ちょっと出てくる。とゆか、今は一人になりたい」
 「うんつ」
 「はいっ」
 明るく元気な二人の返事。届託や表裏がない故か、それとも、隠すためだろうか。

彼とて返事の具合に違和感を感じたが、深く考える余裕もなく、今夜からの同居人を残して部屋を出た。
 ベッドに並んで座り、自分の膝小僧に問うかのように、紬は小さく言つた。

直後、違和感の正体が、彼のいない部屋で露呈した。

「ごめんなさい。怒ります、よね……？」
 「…………」
 光太がダイニングに降りると、幸子が朝食中だった。
 目前の目玉焼きに醤油をかけながら、にやりと、向かいに座つた弟の顔を伺つてゐる。
 「ひつどい顔を見るに、眠れなかつたのね？」
 「誰のせいだと思ってんだよ……」
 昨晩、案の定、響子と幸子が揃つて「同じベッドで寝る」などと言つてゐたので、光太はむろん猛反対したが。



現実に対応しきれなかった。

しかし彼女は一枚上手で、そんな彼を予想していたのかも知れない。冷やかに言い返すようなこともなく、あっさりと先導した。

「ええ。さつきのことだつて事故だつたんでしょう?」

「あ、ああ、事故、事故だつた」

「事故を責めるほど、子どもじゃないわ。でも、二つ、条件がある。聞いてくれる?」

「わかった。条件つて何だ?」

彼女の敷いたレールにも気付かず、光太はスポット戻にかかつた。

にやり。そんな音が聞こえてきそうな不敵な笑みで、響子は言い放つ。

「一つは、今ここで、私にキスなさい」

「きよ、響子、お前何を……。先生見てるんだぞ?」

落ち着いた口調だったが、少なくとも光太にとつて、とんでもない話だった。当然の驚きを見せたつもりの光太だったが、この場ではまるで異端のよう。

「だからどうかしたの?」

響子は努めて、無事を装つていてのだろうか。

(そんなはずない……)

「そうだよ。私は先生じゃなくて、メイドなんだからあ。あ、これからは『紳』って呼び捨てにしてよねつ」

紳は努めて、脳天気を装つているのだろうか。

(いくら何でも、先生もわかつてるだろ……)

二人とも、心中は穏やかでも、晴れやかでもない。そのはずな

珠坂の女神 川鶴鶴肋

4／4 火曜日

動け、動け。

動け! 動け! 動け!

勢いをつけて辺りを見渡す。

案内板の類はない。

交番もない。

人通りもいかにも少ない。人の出入りの少ない珠坂市の中心は駅前ではないのだ。

そしてこの場所にして携帯闇外。場所がダメかキャリアがダメか。

まいった。

かつて知ったる土地というのにこの不安感。

どこを見ても知らない人々。

やっぱ。また沈む。

あー、ここなら二・三年は停滞とかいうやつ出来ちゃいそうな気もする。

「ナナちゃん?」

「うわ!」

背後からの声に反射的に振り向き、当然のようにバランスを崩した。

ここは結構急角度の階段。しかもデザイン優先で滑りやすい御影石製。段差も大きく、どうなつてのバリアフリー。いやむしろバリアブル状態。

お父さんお母さん先立つ不幸を以下略。

「よつ」

のびてきた手に腕をつかまれたおかげで、爪先との絶妙な三点で、気分は浮かび上がらない。

でも立ち止まつてれば、それこそぶづぶと沈み込む一方。動かなければ動けなくなる。

のに、現実は淡々と続いた。

「とにかく、私は、今、キスして欲しいの」

「いや、でも、はじ——」

「いいから。何も言わずに、キスしなさい」

切り札とも言うべき制止は振り切られ、光太にはあとがなくなつた。

(俺だつて、別に、嫌なわけじゃないけど……)

欣然としない思いを抱いたまま、彼は、一步二歩と歩み寄り、わずかに身を屈める。

——つ……

顔を離し。目を開け、笑顔を認める前に。

彼女の声が、聞こえる。

「んー、なんか気持ちが入つてないけど、ま、いつか。変に気持ち入れられても、らしくないしね」

キスのあと、彼を前に照れている。そんな状況であれば光太の科白も変わつたろうが、幸か不幸か、今はそんな状況はない。

「ひどい言われようだな……」

光太が肩を落とす中、響子は待つことなく次の条件を提示した。

「さて、もう一つだけど。私もここで暮らすから」

刹那、光太はまた、頭を抱える羽目になる。

「……はあ? 何だつて?」

彼の聞き返した意味を、頭痛を、彼女は理解していないらしいが。

「聞こえなかつたの? 今日から私も、ここで暮らすつて言つてるの」

「い、いや、そこもそただけど。私『も』つて……?」

バランスで静止。

「ナナちゃんでしよう？」

（つくり元凶でもある）は、お日様のような満面の笑みを浮かべ、そう言つた。

たすけてくれた栗色ロングヘアのえらい綺麗なお嬢さん（思い半ばヤケでまくし立てる。

「そうです七夏です五ヶ瀬七夏ですその通りです認めます」

何が何だかわからんが、救いの手を握る事に成功した途端、顔まで漬かっていた沼地から一気に空中へと引き抜かれたような気分。

「やっぱりナナちゃんなんだね。面影あるもん。すぐに分かったよ」

しかし、状況の理解が進むにつれ、とびっきりの美少女に微笑まれているにもかかわらず背筋が凍るような恐怖心が沸き上がってくる。

「どうか明らかに物理的な危険を感じていますよ。

「認めます、認めますから。どなたか存じませんが早く降ろしてください。いやむしろ怖いですこれ。せめて半端な怪我は勘弁。ダメならダメでいっそひと思いにお願いします」

ガテン系のごついオッサンならここまで怖くないんだろうけど。いかにも華奢なお嬢さんに命を預けるのはちょっと。

「大丈夫、まかせて。私、結構力強いんだから」

この不安定な状況で会話を続けるんだから実にマイペースな人である。

たっぷり一分はバランス状態を保った後、ようやく解放された。

涙多めでキラキラした瞳が彼を捉える。

「別にそんなことは……」

つい逸らしてしまう彼の目は、どこを見るともなく泳いでいる。

「でね、その課題のために、メイドになろうって思つたの」

「なら、がんばれよ」

照れている自分自身に耐えられず、光太は再び、ベッドに倒れ込んだ。

「うん、でも、失敗しちゃったね」

紬はまだ、光太の顔があつた位置を見つめ、話し続けている。けれども見られなくなれば、知らず知らずに表情の影が濃くなってしまう。

「ううん。それもそうだけど、さつきの、その、キス、松田くんに幸せになつてもらおうって、お嬢さんに教えてもらつたのに……。私なんかの、嫌だつたよね……」

「……響子のことなら、気にしなくていいから。俺の問題だし」「ううん。それもそうだけど、さつきの、その、キス、松田くんに幸せになつてもらおうって、お嬢さんに教えてもらつたのになな？」

紬の科白に、光太は慌てて上体を起こし、勢いそのままに問う。紬としては予想外だったのだろう、目を見開きながら答えた。

「え？ あ、うん。優しく教えてくれたよつ！」
再確認の間に、予想通りの答えが返ってきた。
（はあ、姉さんか……。何考えてんだよ……）

ついつい顔を顰めながら、溜息を吐くことが止められない。
始めた。
(えと、あの……。紬、いけないこと言つちやつた?)

「覚えてない？」遠野結香です。さおりさんの代理の篤史ちゃんのさら代理で来たんだけど」

ちょい待ち。

整理しよう。

サオリさんってのは、海外の学校に通つていたが珠坂で就職した、新川分家のさおり姉さんだろう。アツシちゃんってのは新川本家の篤史兄さんか。

その使いを名乗るという事は、この結香さんという人も関係者なのだろう。

とすれば、この人とも会つても良さそうなもの。

綺麗な人だがいやに親しみやすい、いわゆる癒し系。多分に天然ボケが入つていてる氣もあり。こんな人物はとんと記憶にない。

しかし、さすがに十年も経てば容姿も変わる。現に彼女は七夏の事を知つていたのだし。

あの頃の七夏はほんの子供だった。全てを覚えているとは限らない。

でもアレだけは忘れられない。いや、忘れてはいけない。

「ナナちゃん？ どしたの？ 行くよー」

「あ、ええ。ちょっと考え事してました」

人の声があると、戻つてこられるのまでが早い。

でも、だからといって考えなくていいわけじゃない。それは七夏が背負つていかなければならないこと。その重みに耐えかねて底なし沼へと引き込まれようとも。

「うう……。ごめんなさいです。でもでもお……」

響子の冷え切った上から目線に、ここまでケロッとしていた紺が突然萎縮気味。発言からも、彼女らしい勢いが失われている。

「ほら、行くのが響子という少女らしい。」

「だいたいなんですか、その格好。コスプレで教え子を誘惑ですか？」

淫乱教師とでも罵らんばかりに嫌味たっぷりのトーンで、響子は責める手を緩めない。

しかし、格好を責めたのは、誤りだったのかも知れない。紺も一生懸命に反論を始めた。

「ち、違うもんっ！ これは、メイド服です！ 紺はメイドなのです！」

「はあ？ 何それ。ご主人様とメイドって、イメクラかつての。変態っ！」

「うーつ、変態じゃないもん！ イメクラじゃ……イメクラって何？」

「え、えと、イメクラ、イメクラね。えーっと……」

喧嘩を始めるかと思えば、紺の疑問で勢いはボッキリ。

その上、吹っかけた響子の方が狼狽している。

（俺が悪いんだけど……、これで収まつてくれれば……）

微妙な立場故どちらの味方もできない光太にも、案外早く事態の収束が見えてきた。

「あらあら、響子ちゃんたら蒲魚ぶつちやつて。仕方ありませんねえ、お姉さんが代わりに説明してあげましょう」

そのときだ。

「あらあら、響子ちゃんたら蒲魚ぶつちやつて。仕方ありませんねえ、お姉さんが代わりに説明してあげましょう」

結香と名乗る少女は、フローライト・コードなるけつたいたな名前のついた小綺麗なアパート（別に透明ではない）へと七夏を案内してくれた。

そのまま連れてこられた三号室のダイニングでは、

「悪かったなナナ。今日はどうしても手が離せない用事があつたな」

引き締まった長身・筋肉質の少年が、見覚えのある柄の家庭用ゲームチーン店の袋を手にからから笑った。

全然変わらない。この脳天気な態度は篤史兄さんだ。

「篤史ちゃんに身体は一つしか無いから。そのためには私がいるの」と、お茶を入れてくれる結香さんの健気な発言。きつとカノジョなんだだろう。

「ども」

天然っぽいけど、明るくて優しくていい人だな。

上手いこと使われる感がアリアリだけど。

「ナナは五号室使ってくれ。俺はこれから忙しいけど、荷物の搬入とかはきっとこいつら手伝うから」

女の子に力仕事か。

で、篤史兄さんはゲームやるんだろうな、きっと。

「いや、昔住んでた家に戻る予定なんすけど。引っ越し屋が別便で荷物を……」

「あー、さおり姉の指図だから逆らうだけ無駄。あとたぶん御両親も周知」

あのお姉さんって、今は斗流宗家代理なんだっけ。

ここだと学校から近くなるのは都合いいんだけど、一人でやつていいける自信はないなあ。

バーンと登場したのは事態の根源、幸子だった。

「響子ちゃん、ちょっと来てちょうだい」引つかき回しに来たのかと思われた幸子だが、事情を説明したからと響子を連れて出て行ってしまった。

「いいよ、別に。過ぎたことだし」となると、部屋に残されたのは。

「……ごめんね、キスは、よくなかつたよね」ベッドの上で仰向けになる光太と。

響子が出て行ってから、緊張だけじゃなく、いろんな糸が緩んでしまい、二人は力なく話している。

「あのね、松田くんにね、聞いて欲しいことがあるの」

「……何？」

「追い出されたつて言つたじやない？ ……戻るには、ある『課題』をクリアしないといけないの」

「……課題、つて？」

「それはね、言えないと……」

「そつか。できそうなのか？」

変化した声音に光太は身体を起こしたが、彼女の表情は見えない。

けれども、次の瞬間に上げられた顔は、憂いを含みながらも笑顔だつた。

「心配してくれるんだ？」

「まあ、な。すげー泣いてたし」

「ありがと。優しいね、松田くんは」

「家事のことなら心配するな。ゆつかの飯は美味いぞ。このアパートのお袋さんだつて、さおり姉もお墨付きだ」

つまり篤史兄さんもさおりさんも家事しないで結香さんに頼りつきり、と。

「ゆつか？ ゆつか、ユッカ……」

聞き覚えのある音節に、古い記憶が刺激された。

日焼けした顔、ばさばさの髪の毛、半ズボンと剥き出しの足。ユッカと呼ばれていた年上の子が、確かに……

「!?」

「あー、気づいてなかつたか。無理もないよな。俺も小学校入るまで男だとばっかり思つてたぐらいだし」

たっぷり三十秒は経つてから、ようやく一言絞り出せた。

「……詐欺だ」

僕の知ってる人物と、共通するパーソンが全く無いような気もするんですけど。もっと大雑把だったよな。

「いやまったくもつとも」

篤史兄さんの衝撃発言はさらにつづく。

「ちなみに、一号室はさおり姉と詩紀^{しの}、二号室はさおり姉の荷物置き場、六号室は陸奥十悟兄、七号室は七瀬姉妹、九号室は宮藤姉妹だ」

「どくん。

耳から飛び込んできた単語をきつかけに、あの光景がフラッシュバックする。

「なな、せ？」

そんなことはあり得ない。

七瀬の双子がこんな所にいるはずがない。
「とっても可愛くなつたよ。撫菜ちゃんと鈴菜ちゃん」

あり得ないはずだ。

あの光景を見た者ならそう思つて当然だろう。

「誰か一緒に住んでるんですか？」

「いや、二人っきりだよ」

そんな。どうやつて？

「さおり姉や俺たちと共同生活に近いけど。ここは事実上の学園寮だしな」

「うそだっ！」

強い口調に驚いたか、篤史兄さんが苦笑する。

「おいおいどこの竜宮さんだ。ナナに嘘ついて俺に何の得があるよ」

「いや、そういう意味じゃないけど、でも」

本当なら、どんなに嬉しくていいとか。

そんな夢を何度も見た事か。何度も目覚めてから泣いたことか。

そしてきつとまた。

「でも、そんな」

乱暴にドアを開く音が、空転する思考を遮った。

「たつだいまあ！」

続いて、自己の存在を宣言するかのようなソプラノが高らかに響き渡つた。

何かに突き動かされるように玄関へと急ぐ。

買い物袋をさげた二人の姿。

（いつ）

彼は大慌てで目を見開き、彼女を制止しようとするも、遅かつた。

（まちゅつ）

瞬間、世界は静止した。

彼にとつて目を開いたことは、不幸だったのかも知れない。

（俺、今、キスしてる、んだよな……）

瞳を閉じた、見慣れた顔が、ゼロ距離に存在していた。

顔を振り払えば、両腕で押し戻せば、状況を終わらせることができる。

しかし、それは許されなかつた。

カノジョが先に、状況を終わらせたから――

「やほー、光太あー、遊びに来たよー、お？」

第三者の登場に、二人は静かに、視線だけを声のする方へと向ける。

「……光太、それ、今、何やつてるのかな？」

（いや、何も、やつてないよ）

光太の言い訳は、声にもならない。

今この部屋で、カノジョの許可なくできることは、ただ一つしかないだろう。

（俺、なんであのとき……）

後悔だけである。

しかし今なお、囚われずに自由な発言をするものが一名。

「あ、林さんだー。あのね、紬、今日から松田くんのメイドさんになつたのー」

「ただいま」

その片割れの口から、いかにもローテンションな声で先程と同じ台詞が紡ぎ出された。

一目で分かった。

でも直に見たところで信じられる光景じゃない。

記憶と現実との不整合に折り合いをつけるためにはある程度の時間が必要だつた。

具体的にはただただ放心。

「おーい、ナナ？」

篤史兄さんと結香さんの二人がかりで肩を揺すられ、ようやく

我にかかることができた。

後から聞いたところによると、復活まで三分かかったそうな。

なぜなら七夏の中では二人の時間はあの光景のまま止まつていたから。

だからきつと、夢の二人はいつも小さな少女のままだつた。

でも目の前に立つ少女達は、小さく華奢な方とはいえ中学三年という年齢相応の姿。

頭の両側でくくつた、色素の薄いふわふわの猫っ毛。

砂糖菓子のような、フランス人形のような、甘やかさと纖細さと愛らしさ。

子供では持ち合わせぬ華やかさを身につけた二人の姿は、七夏の貧弱な想像力などはるかに超えた現実感をもつて、これが真実であると訴えかけていた。

「おー！　すぐくナナちゃんっぽい！　ナナちゃんでしょう？」

紬がケロリと吐いた言葉に、部屋の空気は和ら……はずもな

く。カノジョの圧政を強める結果となるだけだつた。

「光太っ！　ちよつとそこに座りなさい。先生も！」

そしてカノジョの前に、二人はおとなしく正座せざるを得なかつた。

（ヤバいなあ、あー、俺何やつてんだろ）

光太は絶望の淵にあるような、生氣の失われた顔をして。

「はーい」

紬はおそらく事態を理解できていないのだろう、相変わらずの笑顔で。

カノジョが話し出すのを待つ。

そしてキッとした視線を光太に送りつつ、カノジョは切り出し

た。その話は、意外な、二人どちらにとつても意外な話だつた。

「モテない光太のことだから、迫られたら拒まないだろうとは思つたわ。浮気つてほどでもなさそうだし、今回は特別、許した

げる」

（助かつたあ。俺、もう絶対こんなことしないって誓う）

声にこそ出さぬが、表情どころか、身体全体の緊張が解け、光

太は明らかに安堵していた。

しかしその隣は、逆に身体に力が入り、膝をついたまま身を乗り出すほどだ。

「ええっ？　ねえ、ひょつとして、林さんつて松田くんの彼女？」

「そうですよ。私、林響子は、そこの松田光太の彼女、恋人です。

人の恋人に手を出さいでください。と言うか、その歳で高校生に手を出すって犯罪じやないんですか？」

ご主人様にされた光太はベッドに座り、目の前のメイドもどきを疎ましげにも眺めていた。

「そ、そんなことないもんつ。紬、実は凄いんだから！」

「確かに、晩飯の食いつぶりは凄かつたな」紬の「メイドになります」宣言に対し、やはりと言ふべき肯定を示したのは幸子だった。

破天荒な幸子にとって、「メイドになります」宣言は大変に意味だ。その上さらにもう一歩とあっては、断る理由など全て排除。紬

に一発許可を出し、急速夕食をともにしていった。

「ふー、松田くんの意地悪」

『ご主人様』じゃなかつたのか？

「ちょっと間違えちゃつただけだよつ。紬のご主人様は包容力が足りないなー！」

(はあ、姉さんのメイド教育つて何やつたんだよ……)

紬以上にノリノリだった幸子は、紬の願いを叶えてやるという大義名分でみつちり一時間のメイド教育を施していた。しかし、戻つてきた紬は、この有様だ。

「でもね、つむぎはそんなごしゅじんさまがだいすきなの。だから、がんばりますね」

「いや、がんばるな。棒読みが凄く嫌な予感……」

光太は溜息も保留して、紬を凝視。一挙手一投足見逃さぬ意気で警戒態勢に入る。

「つむぎははじめてですけど、ごしゅじんさまのことをおもつて、うまくいくようどうりよくします」

彼の警戒域にもお構いなしに、一步、また一步と、紬は近づいていく。

「待て、何をやるつもりか言つてからにしろ」迎え撃つ光太は、座った状態のままながら、わずかに上半身を前傾させ身構えている。

端から見たら、何を子ども相手にと言いたくなるような状況だが、相手は半端ではない。

(姉さん直伝だ、絶対とんでもないことするぞ)

「ご主人様っ」

油断した。紬の抑揚が戻つた科白に、彼はつい、油断した。

「えいっ！」

接触まであと一歩という厳戒態勢の中、彼女は彼の首をめがけて、思いつきりジャンプ。

「ちょ、うあっ」

——ぱふつ

狙い通り命中した勢い余つて、紬はそのまま、光太をベッドに押し倒した。

「何やつて——」

突然の強行を問いただそうとする彼の口を、紬の人差し指が塞いだ。

氣付けば組み敷くように、紬は四つん這いで光太の上位にいる。

「はいはい、もう、何でも好きなことしてくれ……」

「たっくさん、ご奉仕しますからねっ」

彼女の強い眼光を見て、彼は諦めるしかないと思つたのだろう。もはや警戒することもばからしく、溜息混じりに瞼を閉じる。

(メイドねえ。……ん？ 姉さんの言うメイドつて、まさか、お

「なるほど」

瓜二つ。だが間違いようのない二人。

ペンギン柄の可愛らしい眼帯をつけてる無愛想な方が撫菜だとすれば。きらきら明るく笑つている方が鈴菜って事になる。

こんな事があるんだ。

目の前で起こつたあの事故からすれば、奇跡としか思えない光景。

医学的にどうだつたのかまでは知るよしもなかつたけど。虫や

小動物の命をいくつか見送つてきた子供のわざかな経験からは、あの時点で二人は終わっていたはずだった。

それきり彼女たちと会うことは出来なかつたが。悪ければあのまま命を落とし、よくとも一生涯嚴重介護下は間違いないと信じていた。

しかし今、鈴菜は立つて歩いているし、撫菜はちゃんと僕の目を見て会話をしている。

「わ」「きや」

双子に歩み寄り、一度に抱きしめる。

買い物袋が落ちた。

撫菜と鈴菜の、身体を、実体を感じる。幻覚でも幽靈でもない。

二人をすぐくった現代の医学に。いや、神でも悪魔でも。僕から送れる最高の感謝を。

「泣いてる」

「そんなにも私たちに会いたかったんか。うむうむ、愛い奴め

どちらの反応も七夏の予想外。つまりは現実だ。

「ごめん、ごめん、ごめん」

「うわ、泣き虫だね、ナナちゃんは」

「ごめん、撫菜。ごめん、鈴菜」

「あいたた。イタ、痛い！ 痛いってば！」

「あうち、あうち」

「あ、ごめん」

意外なぐらい強い力で、僕の両腕はぶりほどかれた。

「ナナさん、あだたら抱き潰す気ですかい？」

鈴菜は両腕を腰に当ててぶんむくれる。

「ナ・り・す・ぎ！」

「ごめん」

「なぜナナはそんなに謝るの？」

ハイテンションな鈴菜とは対照的に平靜に尋ねてくる撫菜。そ

の眼帯はどうしても目に入つてしまふ。

あの事故が幻ではなく、現実の出来事であつたという、今となつてはただ一つの確かな証拠。

「……君らを苦しめたのは僕だし」

「ナナに謝られる筋合いないから」

謝られてもくれないっていうのか。

「ご、ごめ……ごめ……くつ」

「こりや、ベンベン」

鈴菜は姉のおでこをぺちん。とはたいた。

「あうち」

「泣くなナナ。おねいさんは言葉足らずだ。気に病むなつて言つての」

撫菜の言葉に応えるように、撫菜は無表情で僕の頭を撫でた。

「でも」

「そんなにも私たちに会いたかったんか。うむうむ、愛い奴め

どちらの反応も七夏の予想外。つまりは現実だ。

「ごめん、ごめん、ごめん」

「うわ、泣き虫だね、ナナちゃんは」

女の子の顔に一生モノの傷。あの右目もきっと。

例え二人が許してくれても、僕は自分を許せない。

「……もう一度と無いと思っていたはずのチャンスが得られたんだから……少しでも借りを返させてよ」

「期待しないで待ってるナリよ」

「はどう？」

「ありがとう！」

「あうち」

「痛いっつーの！」

「あうち」

「ありがとう！」

「あうち」

「痛いっつーの！」

こんメイ！

「んじゃモノはナナの部屋に運んどいてくれ」

「おつけーっす」

「(こ)くこく」 by 撫菜

双子は篤史兄さんの投げた鍵を受け取ると、買い物袋を拾って二号室を出ていった。

「はあ」

自然にため息が出た。

「ぐったりしてんな。気が抜けたか?」

「ええ」

感情の振れ幅が大きくて、今になってどつと疲れが出てきた気分。

そう、疲れると言えば。

「あの子達やたら荷物持つてましたけど、何買いに行つてたんですか?」

「時計とかタオルとか歯ブラシとかだな。あとブリーフ派だつて」

「聞いてるけど、それで良かつたろ?」

「ぎやーす!」

「ナナの生活用品」

「は?」

三十分ばかり後に三号室を訪れた新たな二人は、並んで深々と腰を折った。

「宮藤初、遅参いたしました」

「同じく宮藤終、ここに」

よほど急いできたものと見え二人とも肩で息をしているが、あ

(おいおい、どういうことだよ……)

まさかの事態に再び頭を抱えるも、紬も幸子も全く気にしていないようだ。好き勝手に話を続けている。

「うんうん、可愛いですよ、紬さん。さつすがは私の義妹!」

「えと、あのー、その、義妹とゆーことはー」

「光太の彼女ですもの。『義理の妹』はまだ早いかも知れませんけど、妹みたいに可愛がっちゃうわ!」

「きやは、やっぱりそう見えます? 見えます?」

(先生も喜んでるのか……。ああ、この人は、そういう人かもな……)

紬が恋人扱いされているのは不本意なことに違ひなからうが、彼にとって、それはまだ取るに足らない問題だ。

しかし本当に取るに足らないと言い切れるのか、風向きは変わりつつあった。

「見えますよお。恋人でもなきや、下着を預けたりなんてできませんよねえ?」

「はい。それに、初めて、その、裸を見せた男の人なの……」

「あらまつ、そうですの? 光太、大切にしなさいよ?」

消え入りそうな声を出して俯く紬の肩を抱き、厳しい視線を送る幸子。

その視線の先の彼も、俯きがちである。と言うより、項垂れがちである。

「……お芝居はその辺にしてくれ。先生はとりあえず、メイド服脱いで、自分の服着て。はい、これ服」

「きやつ、『脱いで』なんて。お義姉様の前で……」

「誤解するな」

演技とは思えないレベルで頬を赤らめる彼女も一蹴。

「誤解はあなたでしょ? 光太。紬さんが着ているのはメイド服じやないわ。エプロンドレスよ」

「それ、同じだろ……」

引き続き結託している幸子も一蹴。したつもりであつたが、やれやれと溜息をつきながら、幸子が蹴り返していくではないか。

「何を言つてるの! メイド服はメイドさんの着るものよ? 恋人をメイド呼ぶわりするなんて素敵だわあ。光太もようやつと、コスプレに目覚めたのね。姉さん嬉しいっ」

「……ん? メイド服? メイドさん? そつか」

紬は何かをひらめいたように、小さくパンと両手を合わせた。

(はあ、またくともないこと言うつもりだな)

光太は次の一言を予感して、しばらく放つておく方が得策だったかと後悔し始めた。

しかし放たれた一言は、彼の予感など周回遡れにしてしまった。

「紬、メイドになります! 紬は今日から、松田くんのメイドです!」

「メイドと言つても、やることないなあ」

光太の部屋でうろうろとするのは、紬色のワンピースに白のエプロン、まさにメイドの制服を着込んだ紬である。

「やることがないんじやなくて、できることがないんだろ?」

2 彼女は邪魔者?

察するに容易なだけに、彼は早くも溜息をつきそうな表情。イペースだった。

「ん、そだねー」

そんな背中越しの表情など知るよしもなく、紬は相変わらずマ

ン。やつぱりどーでもいーかなー」「年齢で言つたら、去年十の位も変わつちやつたおばさんだも

ん。本当にどうでもよさげに、隠そともせざ着替えを続けていた。

ショーツをはき終えると、今度はブラウスに袖を通して。無防

備とはこのことかという絵だ。

「はあ……。先生はまだ全然若いですし、可愛いですから。少し

は自覚してください」

「あ、今、可愛いって言つた？」あららー、松田くんつてば先生

のこと好きになっちゃう？」

自分ではお子様だおばさんだと卑下しながらも、やつぱり可愛いと言われると嬉しいのだろう。彼女は素直に頬を染め、きやつ

きやと喜んでいる。

喜び方がまた子どもっぽいから、彼としては全く動じる余地がない。振り返ればそこに、着替え中の女の子が、自分に心を開いて存在しているのに。全く、心は揺れない。

それどころか、これ以上付き合うのも面倒だと思え、適当にあしらつてこの場を離れた。

「……はいはい。じやあ着替えたら、あつちのリビングに来てくださいね」

「ふふーん、照れちゃつて可愛いつ」

(照れてるんじやなくて、呆れてるんだつての……)

くまでもボーカルフェイスを崩さない。

こちらも見るからに双子。とは言つても、まだまだ子供っぽい

七瀬姉妹とは雰囲気は全く違う。

紫城高の制服である焦げ茶一色のブレザーはいかにも地味で時にチャバネ呼ばわりされたりもするが、すらりとした長身で出るところが出ている二人が着ればシンプルで格好良く見えるから不思議なのだ。

二人ともストレートのロングヘアをサイドポニーで、まとめているのだが、初さんは右側で終さんは左側。しかも片手にだけ嵌めた革手袋が初さんは左手で終さんは右手というのが面白い(昔聞いた話だと火傷の痕とかがあるらしいけど、でもきつかりオシャレに見える)。まさに鏡写し。見事なまでのシンメトリー。

いかにも瓜二つな一卵性双生児というのに、まず間違えようがないという点では七瀬姉妹と同じだ。

「申し訳ございません、篤史様」「お待ちになりましたでしょ」

「ううん、私も今きたところだから」

「いいからほら、入れ入れ」と、篤史兄さん。ここ篤史さんの自宅なんだけどね。ていうか、それむしろ女の子の台詞。

「いいからほら、入れ入れ」

「それには及びません。すぐに準備いたしますので。わざかとはいえ主筋をお待たせするなど許されません」

「この埋め合せはいつか必ず」とことん眞面目にできていたのだろう。お姉さん達はギャグとはとらえなかつたようだ。

光太がコインランドリーから戻ると、玄関には濡れた靴が増えていた。(姉さん、帰ってきたのか)だからどうと言うこともなく状況を認識しながら、紬を待たせていたりビングに入り、「ただいま。乾きましたよーつてえつ、姉さんつ、何やつてんだよつ！」

「んあー? あ、お帰り」

「お帰りじやねえだろつ、それは何だ、それは」ソファに座つてゐるはずの紬を見て、光太は驚かざるを、そして頭を痛めざるを得なかつた。

なぜなら、彼女の隣には光太の姉、幸子がいたから。もつと言えば。

「エプロンドレスよ? 知つてるでしょ?」

幸子が紬に、それを着させていたからである。

もはや幸子に何を言つても無駄であろうと、光太は彼女をパスし、エプロンを結んでもらつてゐる紬に直接言い開く。

「ごめん、先生。姉さん、この手の趣味が行き過ぎて……」

すっかり勢いを失つた声を紬に送ると、あつさりと返事が返ってきた。

「ううん、全然いいよ。だつて、これ、可愛いもんつ」

幸子の手を離れた紬はくるりと顔を向けて、キラキラの笑顔。

そう、実に、あつさりと。

「ううん、全然いいよ。だつて、これ、可愛いもんつ」

終さんも目を細めて微笑むが……そこは、立派になつて、と言つて欲しかつたところで。どうせ女顔ですよ。青白いですよ。筋肉ありませんよ。とも言えない。

「あはははは」

曖昧に笑つてごまかす。我ながら弱い。自覚はあるけど弱氣だけはどうしようもないのだ。

わずか三分後。再び三号室に戻つてきた宮藤の双子は、同じワ

インレッドの、肩の出た膝上丈ワンピースを身にまとつていた。

このお姉さん達は昔から大人っぽかつた。ただでさえ制服着て

ないといつ高校生にはまず見えないつてのに、それがこんな格好すればそりやもう色っぽいのなんの。

それが並んで二人。目の毒です。はい。

「おいおい、たかがカラオケ、普段着で十分だろ?」

篤史兄さんの即座ツッコミ。ごもつとも。

さすがに薄手のワンピースだとまだ肌寒いと思うのだが。「正式の宴だと聞き及んでおりましたので、相応しい装いをと思

いまして
「正式?」

「はい。陸奥先生は、カラオケの盛装はミニスカートと決まって
いる」と

「言つてた言つてた」

「(ノ)くくく」

七瀬の双子もお揃いの出で立ち。白のブラウスにチェックの吊
りスカート。

当然のようにミニ丈だが、この子達ならカワイイですむ。

「……また十悟さんの仕業かよ」

篤史兄さんはでっかいため息一発。

「授業中以外の陸奥先生の発言は一切信じちやダメですよ」

結香さんも優しい顔して結構きついな。

ちなみに結香さんは同じく白のブラウスに、胸当てのついた黒
のスカート（サロペットスカートとかいうやつ）。に、同色のベ
レー帽。一見フェミニンだが足下がスニーカーだったりして微妙

に活動的。

しかし、陸奥のジュウ兄さんは紫城の先生になつてたんだ。

ジュウ兄さんは歳の離れた遊び仲間の一人で、あの頃はひょろ
つと背の高い、本ばかり読んでいる飄々とした感じの少年だった。

そのイメージと、皆の会話から想像される陸奥先生像とがいま
一つ結びつかない。

まあ、遅くとも明日には会えるんだろうけど。

（ふふうん、袖つてば大切にされてるう）

彼の配慮にご満悦で、お顔もすっかり湯上がり美人。
ひよこひよこと身体をあらかた拭いて、胸のところでバスタオ
ルを巻くと、光太に向けてドアをノックした。

「お洋服ちようだい」

「あ、はい」

彼は力ちやりとドアハンドルを下げ、脱衣所で予想通りに上機
嫌の紬に、着替えを渡した。

「うち乾燥機ないんで、今、外で乾かしてきます。それまで、ブ
ラウスとスカート、あと気にならなければパンツまでは使えそう

のが見つかったんで。着てもらえませんか」

綺麗にたたまれた洋服を受け取ると、一番の上のショーツに、
まだタグが付いていることに気付いた。

「これ新品だよ？……もしかして、変な趣味とかある？　あ、
使用済みの方が怪しいか」

「ないない。それ、姉さんの。タグ切る鍼は……つとこです、
はい」

彼女らしい恩も気にせぬ素直な質問に、慣れつこの光太はあつ
さりと答えた。

慣れつこと言うより、別の心配が頭の大半を占めていたが故か
こんメイ！

とりあえずの面子が揃つたとのことなので、篤史兄さん主導で
商店街のカラオケボックスへと移動の運びとなつた。
そう広くもない町でいい感じの快晴もあり、学生らしく健全
に徒步となつたのだが。

あまり敏感な方じやない事を自認する僕でさえ、そこら中から
の視線を感じて落ち着かないことこの上ない。

それは無理もない事なのだが。

個性薄めだがえらく綺麗な由香さんは言うに及ばず。

可愛らしいのが一組と色っぽいのが一組で、双子の美少女が都

合二組。

そして先頭では、長身イケメン筋肉質の篤史兄さんが周囲を圧
倒するような存在感を示している（半袖Tシャツに綿パンという
無茶苦茶ラフな格好が寒々しく見えるせいもあるだろうが）。
一団の最後尾を、目立たないようこそそと追いかける。そ
れでもたじろぐほどの視線を浴びているというのに、篤史さんや
お嬢さん連は平然としたものだ。注目されることに慣れているの
か、それとも神経の構造が違うのか。

「すげー、女の子あんなに引き連れてるぜ」

聞こえてる聞こえてる。

「俺、最後尾の子が好みだな」

「恥ずかしそうにしてて可愛いじゃん」

どうせそんなことだらうと。

「ナナ、そのカッコむしろ逆効果だ。ボーグッシュな女子にし
か見えないぞ」

篤史兄さんは大爆笑。

も知れないが。
(んー、あのブラウス、微妙なんだけどなあ。まあ、何とかなる
だろ)

渡した洋服に思いを巡らせ彼が突つ立つてゐる中、彼女は早速
行動開始。

手にしていた着替えを無頓着に落として、綺麗な折り目を台無
しにすると、ショーツだけ引き上げてタグを切る。

「ん、鍼ありがと」

「どういたしまして」

光太に鍼を返した右手を引き戻すと、流れるように胸元で止め
たバスタオルを外す。

——ぱさつ

当然の音を立てて、バスタオルが落ちる。

落ちた。

「ちょ、あの、せんせつ」

光太は唖然、後ろを向くことをすら忘れ。
しかし紬は然もありなんという顔でいた。

「なーに？」

前屈みでショーツに左足を通しながら、こつちを向く紬。

「普通、男の前で裸にならないだろ……」

彼はようやつと思考を取り戻し一八〇度回転して、背中越しに
言つた。

「そうだねー。でも、お子様の裸じゃ、どーだつていいでしょ」

「それ、本氣で言つてる？」

(え、えと、あの、先生、何を――)

ここまで疾しい気持ちは一切なかつた彼だが、状況と合わせて心境も一変、鼓動は唐突に早まつた。

とは言え、そんな素振りを見せるなど格好悪い。無意識に取り繕い、身体が勝手に平静を装う。

「いや、俺は、あとでいいですか」

「ううん、一緒に入る、ね?」

くいっくいっく腕を引っ張り誘う彼女に、早くも理性が負けそうのは、健全な男子高校生としてやむを得ないところだろう。(ちょ、ちょと、これつて、うあ、考えてみれば今ここつて「人さり? 付いてきたのつてそゆこと? 据え膳つてヤツなのか? そなのか?」)

思考の大半は、おかしくなりつつあつた。

それでももう一步とどまるのが、男、松田光太である。

「いや、ホント。先生、早く入らないと風邪引いちやいますよ?」

日頃のやる気なさげな態度も、こんなときには落ち着いて見えるものだ。

とは言え、体内を駆け上がるリビドーに働きかけるのは、容易なことだつた。

「うん、でも、それは松田くんもだよ? 風邪引いたら大変だから、一緒にシャワー浴びよう?」

……むしろ容易に、治まつた。

(そうだよなー。夢みたいなこと起ころわけないよなー。だいたいお子様先生だしなー)

毎日顔を合わせている相手。言葉通りが真意と、酌めないわけがない。

「……そうだな。でも、心配いらぬから。それにまずいだろ? 男女で一緒に」
彼は多少肩を落としながら、もはや気にすることなく断る理由を告げた。

しかし、彼女はまだ諦めていないらしい。新設もいつの間に押し売りだ。

「どーセ紳はお子様でしょ? いいじやない、一緒に」

「うあ、先生するつ! そこでそれ言うか?」

「ふふーん、大人をバカにするからだよつ。でもホントに、一緒にでもいいんだよ? 紳、気にしないし」

「お子様相手に欲情したとあつちや、俺が気にする」

「うー、ならいいもん。風邪引いちやえーつ」

紳はぶいっと後ろを向き、ブラウスのボタンを外し出した。

それを見て光太は、小さく笑顔を作つて脱衣所を出了た。

(もう機嫌が直るとか、ホント、子どもっぽいよなあ)

公園での紳を思い出しながら、扉の向こうの様子を窺う。

——バタン

浴室の扉が閉じた音を確認すると、再び脱衣所に入り、衣服を拾い上げた。

(やつぱりなあ。女の子なら普通、たたむだろ?)

——シャー——

(見ちやまずかつたかな、これ。パッド厚いなあ)

磨りガラス調の扉一枚隔てシャワーの音を聞きながら、光太は淡々洗濯を始めるも。はたと氣付いた。

(あ。うち、乾燥機ないな。とりあえず、替えの服探すか……)

普通の、あつたかなあ……)

「なんで!?」

「パーカーにジーンズなんですが。

「身体を鍛えなくっちゃな」

結局それか……分かつちやいるんだけど。

連れてこられたのは、城をモチーフにした立派な建物のカラオケボックスだった。

建物の周りには空に向かつてライトが多数備えられている。夜はさぞかし派手にライトアップするのだろうが、どうにも締まらない。

昼のカラオケボックスってやつにはどうも違和感というか場末感を感じてしまうが、中に入ってしまうとそうでもないのが不思議だ。

11号室でお連れがお待ちです

アルバイトっぽい店員のお兄ちゃんは冷静を装つていたが、頬の紅潮は隠せない。

そのときは結香さん&ツインズズの威力だとばかり思つていたが。

「おー、場所取りご苦労」

11号室の先客は、たつた一人で僕ら全員分ぐらいの強烈なインパクトを放つていた。

精緻な彫刻を思わせる、一分の隙もない硬質の美貌。

超ロングお姫様カットのド銀髪はボックスの薄暗がりの中ではおキラキラと自己主張し、深い紫の瞳・同色のワンピースと強烈

なコントラストを放つてゐる。

こうなると面影がうんぬんいうレベルではない。こんなあり得ない色合いの人物といえ巴記憶の中でただ一人。

「やつほーしのりん」「(ベコリ)」

「こんちは、詩紀様」「本日はよろしくお願ひいたします」

その人物は双子二組に会釈を返しておいて、

「場所取り? 部屋を借りるのには必要ないでしょ?」

と真顔で言つた。

新川詩紀嬢。僕と同い年の、篤史兄さんの妹。

性别や年齢、目や髪の色が少々(?)違つてたところで、家族には大抵どこか似た雰囲気があるものだが、「飲み物も注文せずにただ座つてたんじゃ場所取りと同じだろ」

「外界から遮断された静かな環境を堪能していたの。余計なことを考えずに居られる場所は希少だから」

二人は兄妹といつても血の繋がりがないばかりか、離れて暮らしてた期間も長いとかで、見た目にも行動パターンにも共通点らしい共通点がない。

それでも。

優れているとか劣っているとかではなく、方向性が異なる強い個性を持つて並び立つてゐるという点で、二人は確かに兄妹であった。

たとえば二人とも人目を強く惹き付ける優れた容姿の持ち主であるが、篤史兄さんはいわば「プロンズ像」、詩紀嬢は「氷の結晶」、獣に例えるなら「獅子」と「鮫」。刃物に例えるなら「鉈」と「剃

刀。

それらを似ていると言つていいのなら、詩紀嬢は篤史兄さんとも結香さんと同じぐらい似ているとも言える。

この言い方で結香さんを例えて言うと「ドライフラワー」「パンダ」「独逸製高級ハサミ」ってところかな。自分で言つてわけわからないが、そういう印象を受けるんだから仕方がない。

ともあれ、詩紀嬢の愛想不足&ちょっとズレた感性はある頃と変わつてないようだつた。

「歌つていればよかつたのに」
「言わざもがなの事をいう結香さん。

「一人で？」
「一人で♥」

案の定というか、詩紀嬢は、はあ、と聞こえよがしにため息をついてみせた。

「この期に及んで何て迂闊な」
「ああ、その辺は自覚してる。俺ら鈍いし」

「だから難しいことはのりちゃんにお任せなんだよ」
「……お二人の息がピッタリで嬉しいです」

皮肉。そしてまため息。

「ソロあるいはデュエットまで。合唱禁止。私は決して歌わない。以上の条件で手を打ちましょう」

「なに、しのりんて音痴？ねえねえ」
「そういう詩紀の歌、聞いたことないぞ」

皮肉。そしてまため息。

「去年一度聴いたかな。そうそう、あのときはいきなり窓ガラスが割れちゃって、びっくりしたよ」

そして端的に語る結香さん。
誹謗のつもりは、無いんだろうな。きっと。

「うお、まじジャイアンかつ？ジャイアンのかつ！」
鈴菜の命知らずっぷりも立派なもの。僕にはとても無理では無い。

「確かオザキ唄つてたよね」
それでガラスか。

確かに詩紀嬢は昔からそういう偶然を呼ぶタイプだったが、それを理由に歌いたくないとまで言い出すとはちょっと驚いた。

まあ、ごらんの通り態度は偉そなうだが、見た目相応に纖細などもあるってことだ。

それでもオザキねえ。実は意外と荒んでるんだろうか。
それでもオザキねえ。実は意外と荒んでるんだろうか。

と、ついつい笑ってしまったところで、詩紀嬢と目が合う。

背筋を冷感が走りぬける。

やっぱ。

彼女の視線にこもった迫力は肉食生物同然。しかも獣ではなく魚類や昆虫のようなハンティングマシーンじみたそれ。

「や、やあ」

相手を知らなければ殺氣と勘違いしかねない圧迫感だが、彼女に害意はない……と思う。

思いたい。

思うしかないのだ。

彼女が何考えてるのか全然まるつきり分からぬ。昔から基本的には落ち着いた少女だったが、表面的な感情の振幅がさらに一層小さくなってしまった感がある。明るさとかわかりやすさとかいう成分が、彼女のの中から綺麗さっぱり欠落してしまつたようだ。

「ただいまー。姉さんいるー？」
玄関から家の中に向かって、彼、松田光太は叫んだ。が、全く応答はない。

「珍しいなあ。この時間にいないなんて……」
光太が首を傾げていても、彼と、隣の風間紬からは、ピチヤピチヤポタポタと雨のしづくが落ち続いている。
「えーっと、とりあえず、シャワー浴びましょーか。こっちです」
靴を脱ぎ廊下に上ると、彼は手を差し出した。
「ありがと。優しいね」
「ずぶ濡れのお子様相手に冷たくできないでしょー？」
「うー、お子様って言うなあ」
手を取つた指先は冷え切つており、早くシャワーにと思うも。彼女は片足を上げようとして、再び、パンプスの中に戻した。
「どうしたんですか？」
「床、濡れちゃうよ？」
足下の水たまりを見て、自分の状況に気付いたらしく。

「この期に及んで何て迂闊な」
「ああ、その辺は自覚してる。俺ら鈍いし」

「だから難しいことはのりちゃんにお任せなんだよ」
「……お二人の息がピッタリで嬉しいです」

皮肉。そしてまため息。

「ソロあるいはデュエットまで。合唱禁止。私は決して歌わない。以上の条件で手を打ちましょう」

「なに、しのりんて音痴？ねえねえ」
「そういう詩紀の歌、聞いたことないぞ」

皮肉。そしてまため息。

「去年一度聴いたかな。そうそう、あのときはいきなり窓ガラスが割れちゃって、びっくりしたよ」

濡れた瞳で、上目遣いで……。

尤も、ずぶ濡れで、とても低い身長で、その容姿は自然なものでしかないのだが。

小首を傾げ心中を表すと、腕を引っ張る彼女は答えた。

「一緒に入る」

それはつまり、一緒にシャワーを浴びようという女の子からの提案。

濡れた瞳で、上目遣いで……。

「うお、まじジャイアンかつ？ジャイアンのかつ！」

こんメイ！ Fukapon

1 転落した彼女

「あー、もうっ、なんで雨降るんだよっ」

夕刻になり降り出した雨は、強まるばかり。

「こんなことなら適当な傘を拌借してくるんだったな」

走る彼の制服はすでにずぶ濡れで、走ることにはもう意味がない状況だ。

「ん？ 何してるんだ？」

しかし彼が歩みを緩めたのは、自身の状況に気付いたからではない。

「おい、そんなところにいたら風邪引くぞ」

帰り道にある小さな公園。

そのブランコに、少女がちよこんと座つていた。

「聞こえたのか？ 傘もなしに何やってるんだ？」

「うるさい。何してたつていいでしょ」

心配を口にした彼を、少女は一蹴した。

(うつわー、可愛くねえな)

白いブラウス越しに透ける肩のストラップを見るに、体躯は幼いが、中学生か高校生と言つたところだろうか。

「そりやそうだけど。風邪は引きたくないだろ？ 帰つた方がいいぞ」

「あんたこそ帰りなさいよっ。——えつ!?」

「せ、せんせつ!?」

撫菜とかも確かにわかりにくいけど、猫の気持ちが仕草にあらわれるように、何となく通じ合うモノはあるんだよね。

「お帰りなさい、ナナ」

「……ただいま」

詩紀の口から意味のある言葉が紡ぎ出された瞬間、彼女の表情もわずかにほころんだように見えた。感じていた圧迫感が霧散する。

あるいは七夏の錯覚なのかもしれないが……他愛ない会話の中、大人びた冷たさを帯びた詩紀が年齢相応な隙、子供らしさや人間らしさを見せる瞬間がある。それは子供時代も今も変わらないようで、どこかホッとさせられた。

彼女は本来とても優しく繊細なのだ（と信じたい）が、表だつて示そうとしないゆえそれはひどくわかりにくい。

だからこそ一目置かれ、崇拜される事はあっても友人としてつきあおうとする者は多くなかつたし、現在も同様であろう事は想像に難くない。何しろ、失われた愛想と磨きの掛かった美貌がさらに近付きかたさを増幅しているのだから。

ここに集まつた幼なじみ達はその辺については十分理解しているから、彼女と距離を置いたりはしない。

歌うつもりもないつてのに歓迎カラオケパーティーに来てくれたってのは、この集団にそれなりの親近感、あるいは居心地の良さを感じてくれるのかな。と、希望混じりに考えてみたりもするわけだ。

「盛り上がっているところ申し訳ありませんが、何を注文いたしましたか？」

顔を上げた少女も、対峙した彼も、あからさまに驚いていた。濡れた黒髪が顔やら首やらにまとわりついた少女を。すっかり重たくなつたブレザーを纏う彼を。二人は知つていた。

「ま、松田くんっ、何をやつてるんですか？」

「何って、それは俺の科白だから。何やつてるんですか？」

再び俯いた少女は、雨音にかき消されそうな声で答えた。

「……家出」

「はあ？」

「聞こえなかったの？ 家出、家出よおつ！」

足下の泥水をびちゃびちゃと蹴上げながら、あらん限りの声で答える少女。

しかし少女は、本当の少女ではない。

「いや、聞こえてますけど。家出つて、子どもじやないんですから」

彼の担任であり、十分立派な大人である。

「うー、正確には追い出されたんだよう……」

それでも彼女は見事な膨れつ面で、明後日の方を向き呟いた。

「はいはい、何があつたのか知りませんけど、早く帰つてくださいね」

「やだ。帰らない」

「ホントに風邪引きますよ？」

「いいもん、私なんかいなくつたつてみんな困んないし」

教え子たる彼は呆れ果て、土砂降りの中にいることも忘れそうだ。

「子どもじやないんですから……」

「子ども子ども言うなー。紬は大人だもんっ！」

会話の途切れるタイミングを見計らつて、内線電話を手にした初さんが、絶妙のタイミングで軽食のメニューを差し出してきた。

対する終さんはとすると、バッグからおもむろにウェットティッシュを取り出すと、テーブルやマイク・リモコン類の清掃作業に入つていて。

てきぱきという擬音が聞こえてきそうな手際の良さ。

この人達、気が利くといふか、利き過ぎといふか。

大人っぽい雰囲気もあいまつて、同じ高校生というよりも僕らの秘書といった雰囲気だ。

年上の何でもできる人たちが僕らより一步も二歩もひいた立場に甘んじているというのはどうにも不思議だが、思い出してもみれば子供の頃から僕らに対しても遠慮がちだった気がする。

僕にとっては正直どうでもいいけど、うちの親戚達みたいに何百年も前の家の力関係とか格とかいうのを引っ張つてゐるんだろうな。外様側からは尚更なのかもしれない。

「俺の歌を聴けえ！」

「かしこまりました」

「拝聴させていただきます」

カラオケのトップバッターは篤史兄さん。

宮藤姉妹の反応はある意味真っ当なものだが、微妙に盛り下がつた氣がする。

「……ほんじゃ、歌うわ」

意外にもと言つてはなんだが、渋い低音からよく通る高音までぱちり、歌唱力は相当のもの。

マイクを手に斜に構え、足でリズムをとる立ち姿もアイドル頬負けに決まっている。

歌つてるのが古い特撮でなければの話だけど。

ちなみに古いといつても僕らの子供時代ってわけじゃなく、映像の雰囲気からはおおかた数十年は経ってるだろう。

大鉄人とか小さな超人とか、全然しらないのもあれば、見覚えがある蜘蛛男だと思つたらなんか古くさかったり。

僕的にはあきれるしかないのだが。結香さんは完璧についている様子。さすがは篤史兄さんのカノジョ。

鈴菜は曲にあわせてエンドレスで踊りまくつてる。体力あるなあ。

撫菜は最初は部屋のあちこちを子細に観察していたが、一通り調べ終わつてからは曲カタログを一ページ目から順番に読んでいる。一見退屈そうだが、密かに靴を鳴らしているところを見ると、少なくとも音楽を楽しんではいるのだろう。

邪魔にならず、かつ、歌をちゃんと聴いていることをアピールするような絶妙な手拍子と合いの手は宮藤姉妹によるものだ。微笑みながらも彼女たちの目は真剣で、楽しみつつもどこか仕事をこなしているような印象がある。こういうところ、つくづく生真面目というか裏方志向のお姉さん達だと思う。

詩紀姉はといえば。

ソフトに言うなら、目を閉じてじっと瞑想にふけっている。歯に衣着せざ言えまあまるで息をするマネキンといった具合。意識して周囲との関わり合いを断ち、感情を抱くことさえ拒んでいるようさえ感じられる。

そうは見えても少しごらいは楽しんでくれているはず。僕は信

れている。そんな宮村先生が「冬服眼鏡つ娘党」になんの用があるのだろうか。そのお願いが五人兄弟たちに関係があるなんてとうてい想像できなかつた。

じる事にしていたのだが。

しかし見てしまった。見えてしまった。

視線を感じたのか搔き上げた髪の間からのぞいた可愛らしい耳には、黄色い耳栓。

……やっぱり義理で参加してゐるだけかな。

「よーし、アレだ、ベンベン」

鈴菜が動いた。

「ん」

カルタ取りもかくやという早業でリモコンをゲットするや、マシンガンじみた目にもとまらぬ指捌きで曲番を打ち込む。続いて

撫菜からマイクを受け取り、一瞬でデュエットの体勢に。

思考パターンはいかにも違うのに、さすがは双子といったところか。ちゃんと通じ合つてゐるようで意思統一が早い。

流れ始めたのは映画のサウンドトラックを彷彿とさせるぶ厚いオケのイントロ。

しかしモニターに映る絵面はおもいつきりアニメだつたり。

みんな同じじやなくていい。だけど通じ合いたいから

みつけよう さがしだそう みんなの心を閉ざすもの

フタがあつたらはずしたい 鍵があつたらこわしたい

ハートの檻を解き放て Open Their Mind!

チカリカ!

七瀬の双子も上手いなあ。

非対称のややこしい振りと同時に、メインとサブが複雑に入れ替わる複雑な掛け合いを完璧にこなしてゐる。

てあり、長年の活動による無数の資料が木の年輪の様に積み重なっている。

部室の奥を見ると埃だらけの部室にぽつかりと穴が開いたよう

に塵一つない空間があつて、そこにはトルソーに欠けられて大事

そうにセーラー服が置いてある。それも冬服のセーラー服であ

る。これは我が冬服眼鏡つ娘党のご神体である。このご神体は冬

服眼鏡つ娘党の誕生には欠かせないものである。

時は十年ほど前、当時の生徒会長だった、寛の兄誠が突然「女

子の制服をセーラー服、それも冬服に限定する。同時に眼鏡の装

着を義務化する」と言い出したことに始まる。男子でありながら、女子の制服を着こなすという奇特性な生徒であった誠には男女

を問わず信奉者が多く、謀極まりないアイデアにも関わらず生

徒達の支持を集めていった。しかし、生徒達の支持にもかかわらず、教職員やPTAの役員達には当然聞き入れられず全く無視され

た。誠はこの事態にも全くひるまず、新たなアイデアでこの製

作を実現することにした。生徒たちの圧倒的な支持の元で誠は学

校内に宗教法人を設立し、生徒たちの願いの力によつて、政策を

実現することにしたのが「冬服眼鏡つ娘党」の始まりである。

生徒会長は「冬服眼鏡つ娘党」に集まつた、願いの力によつて

「冬服眼鏡つ娘」の制服化に成功した。その後、願いの力によつてかなつたとはいゝ、事態を良く思つていなかつた教職員達が制服をブレザーに変更するまではその効力は維持された。

というわけで、今では完全に形骸化している宗教団体であるが一度認定された宗教法人やご神体をむげにするわけにもいかず、

学内に宗教団体があることによつて、生徒の願いを集め困つた生

徒がいれば助けるという互助会的な使い方も出来ることがあつて、明確な支持者がないにも関わらず今でも宗教法人「冬服眼鏡つ娘党」は維持されていた。

宗教法人と言つても、高校にある以上普通の文化系の部活と活動にそなへりはない。むしろルーティン的な作業が多いのでバイトみたいなものである。毎日のご神体の清掃(?)神体は当時の生徒会長つまり誠が着ていたセーラー服である)、願い事の確認を行い、かなえた方が良いと思われる願いの調査、生徒会からの要望の確認などである。

つまりは完全に雑用なので、好きこのんで活動に参加する人は会務である。寛も入学したての春に担任に兄が作った団代なんだから責任を持つ守れなどと説得されなければ、党に入ることはなかつただろう。修も担任に説得されて入つたと寛は聞いていた。後輩の一、二年生もいることはいるが当番と定例の打ち合わせがなければ部室に来ることもない。今日は寛と修の当番なので、寛と修の他には来ない。

ルーティンの作業を追えて、応接セットのソファでだらけていると、部室のガラスが突然叩かれた。

「おい、東雲いるか？」

教師と思われる声に驚きながら、寛は重いガラス戸を開けた。

「あ、宮村先生。どうしたんですか。こんな所まで」

「実は東雲、というより冬服眼鏡つ娘党にお願いがあつてな」

「お願いですが? 中でうかがいますのでおかげください」

寛はソファを勧めながら考えていた。宮村先生は寛のクラスの

担任で、三十代前半若めの先生の中ではわりと熱い先生だと言わ

きっと相当歌い込んでいるんだろう。

しかし、これは……

もとめよう 広げよう みんなの心は一統き
生け垣なんて丸坊主 高い堀でも大爆破

ハートの境取り払え Open Their Heart! チカリカ!

ノリノリだけど凄い歌詞。

モニター上では二人のツインテール少女がモンスターの群れを蹴散らしている。

一人の得物は巨大な釘抜き、もう一人はばかでかい電動ドリル。

次々にシルエットとなつて爆発、滅びしていくモンスター達(察するに露骨に描写するに忍びなかつたんだろう)。

ひっぱがせ 破りとれ みんなの心は丸裸

重い鎖もひきちぎり 鋼の壁も叩き割り

ハートを開ける風穴を Open Their Brain! チカリカ!

「凄いですね、これ。いろんな意味で」「だろ?」

なんで篤史兄さんが威張るのだろう。偉そうな似合つてるのは否定しないけど。

「子供向けのアニメなんですよね??」

「大きなお友達にも大人気だぞ。子供向ければ複雑すぎる話とか、分かる人にはわかる古典を下敷きにした高度なネタも多いし

」

「そうは思えない要素がずいぶん多い気が。」

「篤史兄さんも大人気だぞ。子供向ければ複雑すぎる話とか、分かる人にはわかる古典を下敷きにした高度なネタも多いし

」

「炭酸とポテチだね」

篤史兄さんの宣言に、結香さんは相変わらずのツーカーぶりだ

「うちにボックスがあるぞ。続編『チカリカ5』のブルーレイも4巻まで入手済みだし、録画も欠かしてない。明日はマラソン上映会決定だな」

その後七瀬姉妹はアニソンを乱発、宮藤姉妹は女性デュオの有名曲を一通り押さえた（選曲も含め、上手いが、むしろ危なげなさの方が強く感じられたのがいかにも彼女たちらしい）。

僕も何曲か披露させられ、

「七夏は言葉に情感をこめるのだけは上手い」（篤史兄さん）

とか
「光景が目に浮かびます」（初さん）

とか

肯定的だか否定的だかわからないコメントをもらつた。

そして詩紀嬢はといえば、宣言通りついに最後までマイクを手にすることはなかつた。

さて、これは十悟兄さんから後に聞かされた話だが。
僕らがカラオケに盛り上がり（一部を除く）いた頃、市庁舎の一室で別の集まりがもたれていたのだそうだ。

とはいっても、人数もずっと多く、出席者の年齢もずっと高い。なぜか中でも最も年若い人物が一番上座の椅子に掛けており、

またその脇に立っていた。ボブカットにオシャレメガネ・パンツルックの女性が新川さおり、脇に控えるひょろりとした長身に丸めがねのヌーボーとした若者が陸奥十悟。すなわち、篤史兄さんや詩紀嬢の姉であるさおり姉さん、そして僕らの幼なじみである十悟兄さんだつた。

五ヶ瀬分家男A「その七夏君の姿が見えないようだが」
十悟「ああ、彼なら歓迎会つすよ。年の近い幼なじみ達が企画し

取り繕うように真由美はいうが、だまされないぞ、返せ、俺の願いと秘蔵のお宝と尊厳。

昨日、祈りはかなうものと信じられている。人の願いを現実世界に投影するリアライザーの発明というか発見により人々の神々への信仰、願いといった力のある想いが物理世界に還元されるようになつた。原理は解明されつつあるというが、僕にはよくわかっていない。説明されても理解できるものではないという事は理解できるが。リアライザーの発見当初、発見者に関連する宗教法人による、地方都市の占拠事件などもあり、リアライザーのもちろん、発見当初は宗教法人ではなく、行政機関や一般企業での応用も検討されたが、想いを集めるという部分に置いてはある種の、信仰・信奉といった宗教的な願いでなければ実現できないといふことが判明した。

政府は登録された宗教法人にリアライザーの使用を許可するとともに、願いの一定割合を行政目的に使用させる「宗教法人による現実化装置運用に関する法律」を制定し、その運用を開始した。様々な願いがかなえられ、現在解明されている物理法則に超えた様々な現象が観測される様になつた。

寛は校舎から文化部部室棟に向かつて歩いていた。

遙か昔、十五年前に工業高校から普通高校に変わった工業高校の時には活気に満ちていただろう、木工や鉄工、機械と言つた技術を教えていた建物は今も残っていて部活動の部室として利用されている。広くて大きな作業部屋は運動部の道具置き場として、手狭な準備室は文化部の部室としてあてがわれている。そん

たんだそうで

五ヶ瀬分家男A「はあ？ 七家会議をさしあいてまでの用かね？」

古老・重鎮達が居並ぶ中、十悟は若輩としては無礼とさえ言える態度を続けつつ、それを咎めようとする空気をすいすいと受け流している。

十悟「十家会議つすよ、今は八家でも」

二百年をおいても新参扱いされ続いている宮藤の当主が、予想外の援護射撃に頭を下げた。

陸奥分家男「遠野もすでに滅びた。やはり七家でよからうよ、本家の坊」

陸奥分家筋の男が苦々しげに言つた。
十家の末席であった遠野家の最後の一人はこの場に呼ばれない。

陸奥分家男「何だと？」

そのとき、沈黙を守つていたさおりがようやく口を開いた。陸奥家内での小競り合いを完全に無視して、強引に話題を戻した形だ。

十悟は意識して口調を崩し、露骨に挑発する態度をとる。

陸奥分家男「何だと？」

男は嫌悪感をこらえきれぬ様子で、ふん、と鼻を鳴らす。

陸奥分家男「人ですらないあんなモノを十家とは認められんよ」

十悟「俺もさおりも似たようなもんだ。『血が出なかつた』あんたは只人かもしけないけどな」

さおり「七夏君を珠坂に呼んだのは『両親が長期出張中の彼に一人暮らしをさせておくのは忍びなかつたから』でしたわね、確か。

ご両親の意志に反して未成年に五ヶ瀬家の看板を背負わせるわけだ。

な文化部部室棟の中の一つ、最近建てられた新校舎によつて、日陰になつてしまつた部分に我が冬服眼鏡つ娘党の部室がある。

鋼製のドアを力を込めて開けると、部屋の中から蒸し暑い蒸が流れてくる。元々遮熱などは考えていない上に長年の劣化で通気性の良くなつた部室だが、春から初夏に変わりつつある季節の日差しは部屋を天然のサウナにしてしまつたのには十分なようだつた。

広くない部室を見渡すと、以前校長室で使つていたと言われる古い応接セットのソファにぐつたりと腰をかけて、シャツの裾を持ち上げて下敷きであおぐ男子がいた。眼鏡つ娘党の二人しかいない部員の一人、山本修だつた。

「遅えよ。暑くて死ぬかと思つたぞ」

顔をこっちに向けるのもだるいという様子で、下敷きをあおぎつづけながら言つた。

「いつ来るなんて決めてないだろ。それに暑いなら窓を開ければいいじゃないか」

寛は長年の埃がサッシに詰まつてしまつて車輪が欠けているのか重くてなかなか動かないサッシをふんぬと力を入れて開ける。いくら力を入れても手の平ぐらいしか開かないサッシだつたが、締め切つているよりはマシで、外の涼しい空気が吹き込んできた。

「その窓を開けるのはお前の仕事だしな。それにそろそろ来るんじゃないかと思つてたんだ」

外からの涼しい風を感じるために、修はぐつたりとした姿勢から体を起こした。

応接セツト周りには金属製の書類キヤビネットが所狭しと置い

食事が始まるとき突然、左手にお茶碗を持ったまま真由美が立ち上がった、唐突な上にマナーのなっていない姉である。

「大発表がありまーす」

いつもながら胸天気そうなである。

「私、今日からまたこの家に戻ります。またよろしくね」

「え?」

普段は意見の合わない双子だが、こんな時は恐ろしいほどにタイミングが一致する。

「大発表過ぎるだろ。今日からだなんて」

「だいたい部屋はどうするの。また寛と同じ部屋なんて私嫌だからね」

心底嫌そうな顔で麻美が言つた。そんなに嫌そうな顔をされると困るが、寛も高校生にもなつて双子とはいえ男女が同じ部屋になるのは困ると感じた。

「心配いらないわ。部屋を増やしたから」「どこにそんな金あるんだよ」

そもそもこんなボロ家、改築したら壊れるかもしれないじやないか。

「ん、増やした?」

ふと、寛は疑問に思った。

「うん、家守様にお願いしての部屋の隣に部屋を増築してもらつたのよ」

家守様はうちの守り神であり、普段から家族が室内安全や健康を祈つてゐる。母が家守様の名前を挙げたと言うことは、家守様に祈つてゐる力を使つたということだろう。確かに兄弟が大きくなつてきたことで、家守様の力を使うことは少なくなつてきていい

にもいかないでしょう」

裏から手を回してその長期出張を仕組んだのもこゝにいる誰かなのだろうが。

五ヶ瀬分家男B 「とは言つてもなあ。彼は」

十悟「何も知らないうちに珠坂を離れたんだ。彼にとつてここは、ただの懐かしい故郷でしかないんすよ」

五ヶ瀬分家男A 「ではなおさらだ。多大な犠牲と引き替えに、血の出る」榮誉に与りながら、何も知らずにのうのうと過ごすなどというのは、我ら斗流全体に対する裏切り行為とは言えなか。何なら儂があの小僧に自分の立場というものを……」

本音を口に出しかけた古老の一人が、さおりの一瞥で口をつぐまされる。

第一位新川家の当主という立場や家の格からくる発言力だけで黙らせたのではない。

新川家は前々当主時代に序列二位の仁藤家からその地位を譲りされており、八葉・宮藤・遠野と比べてもさらに新参の家だ。表向きの序列はともかく、このような場では旧家の重鎮達には軽んじられてもおかしくない立場と言えるし、前々当主引退後の前当主（篤史の父親）の時代には実際そうであった。

しかし、現在さおりが斗流宗家代行をつとめているのは純粹に実力によるものだ。

かつて米国留学時代に『ハートの女王』の異名をとつた彼女がその気になれば、屋敷の広間に詰める五十人弱を一人で斬り伏せられるだろう。『血が出なかつた』故に健在で勢力争いにうつぶを抜かしていられるような彼らでは、『血の出た』本物の斗流継承者にかなうべくもない。

た。寛はそれを見越して、いづれ自分のために力を使えるのではないかと考えたのだが、家を改築したとなれば、家守様の力はかなり使われてしまつただろう。

「ただ、そのまま、部屋を増やすと一階よりも二階が広くなつちやうから、あんたたちの部屋も少しずつ狭くしてもらつたわ」

寛ががつかりしながらうなだれないと母が更に衝撃的な事実を伝えた。部屋を狭くだと、勝手に部屋を狭くしたということは、空間は有限だから、狭くするときに、ちょっと家具を動かしたわよ。真由美と二人で。おもかつたわー」

「安心してね。寛のコレクションはちゃんとまとめて置いたから」

真由美が寛の一番気にしていた事を言つた。寛は普通の高校生であるから、性についての興味も普通の高校生並にある。ただ、そのコレクションを親兄弟の目に付く所に置くことは出来ないので、机の引き出しの奥やベッドの収納の奥など出来るだけ探しにくい所においていたのだ。それを母親と真由美に見つけられてしまつたのである。高校生にとって一番センシティブな話題を出してくるとは許せない。麻美は不潔なものを見目で見てくるし散々わよ。真由美と二人で。おもかつたわー」

思ひ返せば、帰つてくるときに自宅を見たときに感じた違和感。真由美姉が帰つてきたことを違和感として感じたのだと思つていたが、自宅が広くなつていて事が違和感だつたのだろう。部屋が増えるというありえない事態が、あまりに自然に発生したので、それに気がつかず、違和感という形で感じていたのかもしれない。

「なにはともかく、よろこれからよろしくね」

しかも斗流に与えられた『ライセンス』は内部の肃正についても機能するものであるから、要するに生殺与奪は彼女の気分次第なわけである。

たちまちすくみ上がる老人達を見て、十悟は肩をすくめてみせる。実際には彼女ほど理性的な人間もそうはないので、無闇に恐れても仕方ないのだが……さおりの化け物つぶりを理解しつつ、しつかり疎まれるような眞似をするような連中の感性は理解できない。

七瀬家古老「まあまあ、五ヶ瀬さんのお気持ちはありがたいが、抑えてくだされ」

ややあって、別の方向から取りなしが入つた。柔和な顔の老人である。

七瀬家古老「あれは誰を責めることもできん不幸な事故だつた。幸いうちの曾孫達は命はとりとめてくれたし、不幸中の幸いか、血も出てくれた。」

さおりは一見落ち着いた表情を崩さないが、幼なじみの目が笑つていい事に気づいた十悟は思わず心震いする。他の誰も気づいていないが、さおりは猛烈に機嫌を損ねてゐるようだつた。

七瀬家古老「時に、七夏くんもそろそろいい歳じゃないかね?」

さおり「とおっしゃいますと?」

七瀬家女A 「いやですねえ、結婚ですよ、結婚」

七夏は当年とつて十七才である。

さおり「……いかに我々でも学校に通つてしまつてゐる人間の年齢まではごまかせませんが、関係者全員消すにもちょっと数が多くすぎませんか」

発言内容が洒落になつていない。これはやはり相当怒つてゐる。

七瀬家古老「いや何もすぐにとは。はれ、篤史くんと同じですわい」
あわてずあわてず、と老人は両掌をあげた。

七瀬家古老「七夏くんからしてみれば、言葉は悪いがうちの曾孫達を傷物にして、両親まで奪ってしまった事になるわけだし、きっと責任を感じておるじやろう。どちらか一人引き受けいていただけという約束だけでもできれば、彼の気も少しでも晴れるかも

しれんし、このじじいも安心してお迎えを待てるのじやが」
言葉は柔らかいが脅迫意外の何者でもない。

五ヶ瀬家一同がざわつく。

……このじいさん絶対百才まで生き残るタイプだ。この場でさおりに首刎ねられなければ。

十悟は落雷を恐れるかのように長身を縮こまらせ、おそろおそろさおりの表情をうかがった。

しかし、さおりはむしろ上機嫌そうに笑っていたし、その返答は意外なものだった。

さおり「篤史ちゃんは責任のために彼女と一緒にいる訳じやありませんし、ベンベンやリンリンにもいつかそういう相手が見つかりますよ」

七瀬家古老「じじいの目から見ると、あれらも七夏くんを憎からず思っていると思いますがのう」

十悟は落雷を恐れるかのように長身を縮こまらせ、おそろおそろさおり「そういった好感なら私も十分抱いていますよ。ただ、結婚相手となると七夏くんは詩紀ちゃんの予約済みらしいですか

ら」

ファッショングラスの奥の目が、子供のような悪戯っぽい笑みを見せる。

宗家の資格を持つ詩紀（現在はさおりが代行）の婚約に関する

「いいじやん、寛になんて気を遣う必要ないし」

今度はしつかりとせんべいを離していた。

「帰つてたんだ」

「うん、ちょっと前に着いた」

真由美と寛は十二も歳が離れた兄弟である。そのため、真由美と寛が同じ家に住んでいたのは寛が小学校に上がるまでで、真由美は大学に入つてからは長期の休み意外は実家に帰らなかつたので寛は真由美の事は姉と言うよりもちよつとした親戚くらいに感じている。そんな姉が自分の家でくつろいでいることに、やっぱりこの人も兄弟なんだなと考えていた。

子供の頃から年上の女子の代表だと思つていた姉は久しぶりに見てもやっぱり大人で、つやのあるダークブラウンに染まつた髪は肩の上あたりでそろえてあり、振り返つた顔にかかる髪が色つぽかつた。時間に負けるものかと装備されたファンデーションは完全武装されつゝも横顔に若干の無防備な部分を残しており、白から薄黄色へのグラデーションに若干の哀愁を感じた。セルフレームのコンタクトお休み用の眼鏡から覗く瞳にはマスクカラとアイシャドウが施されていて、口にくわえたせんべいと身にまとうゆるゆるのジャージとの待避で逆に魅力が増しているように感じた。

「なにじつと見てるのよ。はずかしいじやない」

目をきつと細めて怪訝そうな顔をして真由美が言つた。

「別に」

自分の妄想を見透かされたような言葉に動搖を感じながら寛はそう答えた。

「いつまでいるの」

突然の発表である。自分で振つたのだから責任を果したのみとはいえ、当然のように大混乱となつた会議を一喝でおさめてのけたのは、流石さおりというところであった。

つきあいの長い十悟とはいえ、さおりの真意を量りかねることも多い。考えるだけ無駄なのだから大抵は聞き流すのだが、さすがにこれは捨て置けず、会議がハケてから個人的に質問してみた。さおり「推理よ推理。七夏くんが告つてる可能性、八割はくだらないと思うし、詩紀ちゃんが断る可能性はほとんど無いから」

十悟の目から見ても幼い頃の七夏が詩紀をお気に入りだったのは確かだし、詩紀は自分自身にも他人にもとんと興味を示さないが、七夏相手の時だけは比較的愛想があつた（よう見えた）。

十悟「つて言つて、お前。公式の場でぶっぱなしして、後で違つてたら冗談ですまないだろうに」

さおり「あの頃とは違う。選択はなされるわ。ちゃんと成長してるし、善惡の基準も好惡の感情も学んでる。あとはヒトとしての自分との折り合いの付け方だけ」

十悟「はあ？」

さおりは眉をひそめた。意外につぶらな瞳にはあきれたような色がある。

さおり「あきれた。鈍い鈍いとは思つてたけど。この期に及んでまだ氣づいてなかつたの？」

十悟「何のことだよ」

この女、核心の周りをくるくる回るような説明しかせずに相手の困惑を楽しむようなところがある。十悟がむつとしたのも無理

「まだ、ひみつー」

真由美姉は昔から寛に對して秘密を作りたがつた。姉の秘密はいつも結果としては悪い結果になることはなかつたので、寛は真由美それ以上聞くことはしなかつた。

「おう、おかえり」と麻美に声をかける。

「ただいま」

仏頂面のまま、麻美はぼそと応じた。
自室に入つて、一小時間くらい復習をしたり、横になつて本を読んでいると、階下からから呼ばれた。夕食のようだ。

リビングに入ると食卓には、真由美の他にいつのまにか帰ってきたのか、双子の妹である麻美が座つていた。

「おう、おかげ」と麻美に声をかける。

「ただいま」

双子の兄妹として育つた寛と麻美は、兄妹である以上に同い年のライバルだった。小さい頃から競い合つてきたり、高校生になり別々の高校に通うようになつてからは、寛は理系、麻美は文系であることもあつて競い合うこともなくなつてきている。最近の麻美的素っ気ない態度に寂しさを覚えつつも、兄妹つてはそんなものだらうと考えていた。

食卓には母、真由美、麻美、寛の四人が着いている。いつもバイトため帰りの遅い姉の美紀と父は除いての夕食になるようだ。

東雲家は食卓にそろつた三人の兄弟に加えて、美紀と家を出て働いている兄である誠を加えた五人兄弟である。長女の真由美と寛と麻美的双子年の差は十二歳もあることもあり、全員がそろるのは年末年始くらいである。

普段見慣れているものほど、変化に早く気付くことが出来ると思っている人は多いだろう、しかし、実際には自分が見慣れているものほど先入観にとらわれて変化を認識することができない。全体が見えないものであればなおさらである。

学校の正規の時間割を終わらせてからの退屈な自己学習の時間が終わるときすっかり夕方だった。寛は新緑の暖かさと、始まっていく夜を迎えるキンとした涼しさを感じながら自転車を走らせていた。ふと自宅のある方に首を向けると遠目に自宅が見えた。少し前までは見えないくらいに真っ暗だった気がするから相当に明るくなつたのだろう。その変化に口元がにやつとしながら自宅を見続けるとザラッとした感触を脳に感じた。何かが違う気がする。違う家かとよく見てみるが、やはり自宅である。自宅に相違ないハズなのに感じる違和感を気にしつつも、家に帰ればわかるだろうと夕闇に吸い込まれるように緩慢になる足を進ませた。

自宅に着いてみると先ほど感じたような違和感はなくなつていた。周りの家から比べると完全に取り残されたような古い我が家、黒ずんだベージュの壁と塗装の剥がれ書けたトタンの屋根。台所から漏れる光が薄闇から手をさしのべている。

いつもより丁寧に納屋に自転車を止めつつ、見上げてみてもいつも通りの我が家だった。

なかろう。

さおり「望みは現実となるのよ。きまぐれな女神のお眼鏡にさえかなえれば」

そう言って、さおりは意味ありげに笑つた。

さおり「だつてここは珠坂なんだから」

4／5 水曜日

三号室の洋間の一つはシアター化していた。

壁の一面はびっしりとDVDが埋め尽くしている。

僕と篤史兄さん・結香さんは、六畳一間で大型テレビと大型スピーカー六本に囲まれ、アニメ鑑賞会の真っ最中であつた。

朝食をお呼ばれしたらそのままとつかまつてしまい、昨日の篤史兄さんの宣言通りこの部屋に引っ張り込まれたのだ。

「正確には『指定侵入少女チカリカ』。医師の資格を持つ新進気鋭の天才亀丸監督が弱小アニメスタジオ『A M I G』を率いて生み出した奇跡のオリジナル作品、テレビアニメ界に打ち立てた金字塔だ。作画のクオリティーは当然として、動画枚数の割に緩急のある動きや、芸術のレベルに達した塗りや背景、異常なまでの音声の作り込みと、尋常でないこだわりの塊だ。完全プレスコつて事も含めると、スタッフの手間という観点においては劇場版並みの努力が払われていると考えていいだろう。すなわち、これは制作に関わった者すべての魂の結晶。心して鑑賞するように」

「は、はあ」「俺たちこっち寄るから、ナナはしっかりセンターに座れよ。そ

今時少なくなってきた、引き戸の玄関をカラカラという音とともに開けると、また違和感を感じた。普段は感じない臭い、香水の香りだろうか。三和土を見るとき見慣れない女物の靴があつた。来客が違和感の正体だったのだろうか。そうなると遠くから家を見たときに感じた違和感を感じるのはおかしい事になるが、答えたことで瞬間で考えを払い、そろりと玄関の床に足を下ろした。

「ただいまー」

寛は家の奥の台所に聞こえるように少し声を張つて言つた。自転車の数から言つても、家には母と見慣れない靴の持ち主しかいないはずだった。

「おかげり」

ほぼ同時に返事が返つてくる。一つは母のもので間違いないだろうが、もう一つの返事おかげりというよりもどちらかというと「ほおかいり」と聞こえた声の主は誰だろうか。普段こんな時間で来客がいることは珍しいのでなれない感覚で廊下を進む。

玄関と居間を仕切るふすまをを開いたときにその答えが出た。居間のテレビの前には座布団を引き、よく言えば堂々と、悪く言えばだらしなく寝ている女性がいた。姉の真由美である。体をテレビに向けたまま、首だけでふすまの開く音が下方に向、つまりは僕の方を振り返っていた。口の中にはせんべいが収まつていて口から頬にかけてうにょんといつた感じで伸びて完全に間抜け顔である。

「あ、寛ほおかいりー」

口にせんべいを加えたまま、まー姉はもう一度言つた。

「口に、もの入れたまま話すなよな」

の方が音像がおちつくだろ

落ち着けと言われましても。

結香さんは篤史兄さんの足の間に移動して体育座り。小さな子供が父親の膝に抱かれるような具合だ。

「ふふふー」「ご機嫌だな、ゆっか」

座る場所が足りないのは確かだし、二人にとつては特別なことではないんだろうけど。ねえ。年頃の男女が人目もばかからず密着されちゃこつちがいたたまれない

と思いつや。

「えへへー」

長い長いロゴラッシュの間、音楽に合わせてゆらゆらと揺れる結香さんの頭を、篤史兄さんがぐりぐりと撫で続けている。

二人の様子はむづみ合う恋人同士というよりは、まるで小さな少女が大好きな兄にじやれついているかのよう。色っぽい雰囲気なんてまるで無い。僕が七瀬姉妹に飛びつかれるのと同じようなもの。

なにしろ結香さんの態度や仕草は見た目よりはるかに子供っぽいし、篤史兄さんと一緒に極端だ。彼女の中身は記憶の中にある男の子じみた少女と大差ないのかもしれない。

ああ、この雰囲気はゆっかと篤史兄さんだ。と納得できてしまつた。

こうなると、子供時代とは大きく変わった人間関係にどこか身構えていた自分に気づいてしまい、ばかばかしくなつてくる。

「ほら見ろ。いきなりチカリカの変身・戦闘シーンから始まるつてのには度肝抜かれた。説明とか後回しで全開バリバリだ」

篤史兄さんもこういうところ変わらないな。

千佳穂『皆の願いをこの身に受け、人の手助け當てにせず』
理佳穂『頼れる者がないのなら、自分でやるが少女の意氣地』
二人『[Let's do it ourselves!]』

指を鳴らす彼女たちに応え、虚空を割つて出現する巨大な工具箱二つ。

招き入れるように開く工具箱の中へと飛び込む二人。

少女達を取り込んだ工具箱はそのまま宙に舞い上がる、怪物達のただ中へと落下、アスファルトに突き立つ。

【指定進入少女ちかぼー参上】

【同じくりかぼー、参ります】

開いた工具箱から現れた二人は、すでに改造制服じみたコスチュームに身を固めている。

『マジカル☆クローバー!』

ちかぼーがセーラー服の胸元の四つ葉型のペンドントをつかみ、何かを抜きはなった。

『マジカル★ボールバンク、トゥーワンチドリルソー!』

りかぼーがブレザーの胸ポケットから抜いたボールペンはたちまち両手持ちの大型電動ドリルに形を変える。

「ちかぼーの『マジカル☆クローバー』は抜きはなつただけの未確定形態では不可視だが、状況に応じて数々の手持ち工具へと実体化する魔法の万能ツールだ。そのものずばりの大バール形態の使用頻度が高いし、チカリカのシンボルとも言える。りかぼーが常に多数のツールを持ち歩いては細かく使い分けているのは対照的だな』

よ
少年はさらに、宇宙人達を追放した者達との今後の接触を予想した。
五人は悪意の存在を知るものとして、地球を守るべく力を合わせることを誓い合つた。
そしてそれぞれの道を進んだ彼らが、何年か後に一流の人物となつて再会したところで話は終わつていて。

僕と篤史兄さんは後番組紹介が流れている前で膝つき合わせていた。

【ハッピーエンド、ですよね】

【ハッピー、なんじやないか】

問題は別のところにあつた。

【それより、ナナつぽいよな、あいつ】

【肯定したくありませんが、否定はしません】

【なんとなく、どこかで聞いたような話だよな】

【無茶苦茶女の子っぽく描写されている。】

【ええ。細かい話は全然違いますが、ニュアンス的に】

【説得シーンとか特にな】

【それより、ナナつぽいよな、あいつ】

【これつくつてたの、先週の事件より後つてことはないですよね?】

【どんなに遅れてたとしても、少なくともシナリオに関してはありえんだろ】

【あははは】

篤史兄さんの乾いた笑い。僕もきっと同じような顔をしている

文字通り『バールのようなもの』ってわけか。確かに一振りで大バールに変化している。

でもってその後は虐殺モード。

なまじつか愛玩動物の形を残していく見た目可愛らしいモンスター達を殺して殺して殺しまくる。それはもうものすごい勢いで。殴つてえぐつて貫いて引き裂いてたき割る。画像はシリエットでも、ぐしゃりべちゃりという音声が妙に生々しい。

【しつかし、えげつない武器ですよね】

【ファンの前で武器とか言ったら殺されるぞ。ツールだ、ツール。それより良く見るよ】

時折描写される二人の表情は戦いに望む戦士らしい真剣なものであるが、同時に苦渋の色も宿している。

怪物の一打ちを加えるごとに、ちかぼーは露骨に泣きそうな表情を浮かべ、一見無表情なりかぼーの眉が小さく歪む。彼女らの気合いの声もまた、戸惑いと震えを帶びている（さらっと演技してしまう声優さんも上手い）。

そしていくつかのかすり傷と引き替えにすべての怪物を倒し尽くした二人は、巨大な除草バーナーで淡々と死体を焼き払つてから工具箱の中に消えていった。

その夜、二人きりで傷を治療し合い、それから抱き合つて泣くシーンで、最初のパートが終わっていた。

そこで一端、ボーズ。

【感想、いいですか？】

【おう】

【これ、痛すぎるんですけど、いろんな意味で】

【だよなあ】

事だろう。
「さおりさんにだけは、絶対逆らうのやめときます」
「そうしる。俺もそうする」

4 / 18 月曜日

不発弾の爆発による損害の復旧は着々と進んでいた。今はまだ遠回りしなきやならないが、来月にはもとの通学路に戻れるだろう。でも僕にとつてはむしろ遠回りの方がよかつた。

【ふう。結構きついね】

【情けないわね、ナナ。こんな坂で息が上がるなんて】

詩紀ちゃんが腕組みして言うと、容姿もあいまつて結構迫力がある。

【ほら、仕方ないから手を引いてあげるわよ】

【つたく、公道で恥ずかしげもなく】

【篤史さん達には人のこと言えませんよ】

【なんと、ご機嫌な香さんを肩車してたり。】

【おまえらと違つてやましい気持ちはこれっぽっちもない】

【私にもありませんからっ！】

この神がかつたような完璧で冷静沈着な、でも時々迂闊で意地張りで恥ずかしがり屋の少女と少しでも長く並んで歩ける事を喜び。

そのチャンスをつくつてくれた鬼、樞にも、少しだけ感謝を捧げたのであった。

「グレイト」

不明瞭な発音でもごもごと英単語を発しているが、きっとなにかのネタなんだろう。無視しておく。

「篤史兄さんとしてもさおりさんにとって、よくそんなに落ち着いてられますね。詩紀ちゃんみたいに悩んだ事はないんですか？」

「それは！」

「深刻になつても始まらないもの」

「それはっ!!」

「あるがままを認める自由さ。いわゆる観自在心つてやつ。鬼とつきあっていくにはしなやかさが大切なよ」

言葉だけ聞いていると、悟りを開いた、とでも言わんばかりだけど。本人を見ていると無神経との差は紙一重な気がする。

「それはあつっつ!!!」

篤史兄さんはなぜか次第に甲高い声になつていき、

「やかましい」

さおりさんの捻りの入った掌打に吹っ飛ばされた。

「姉貴い、もうだめだあ！」

適当。ノリ。棚上げ。それはそれ、これはこれ。

だからこんな人達になるんだな。

「少年は気づいていた。

「きつとみんな騙されてたんだね」

そして、彼はたやすく推理してのける。

宇宙人達は仲間の罪の減免と引き替えに逃亡した犯罪者の追跡を要求され、互いに相手を逃亡者と勘違いするような命令を与えられて地球へと送り込まれ、つぶし合いを演じることを期待されていたのであろうことを。

そんなのはもうどうでもいいことだ。と、二組のチカリカは、少年に判決を迫る。

「二人とも千佳穂、二人とも理佳穂だよ。僕には区別がつかないし、区別をつける意味もないと思う」

口々に苦情を言う四人に、少年はひょうひょうとしたもの。

「君たちはそれぞれ別々の存在なんだから。双子が四つ子になつただけでしょう？ どっちがどっちのコピーなんて、些細な話だ

本日放送のチカリカ5最終回。
仮面をとつた二人の敵は、なんとチカリカそつくりだった。
彼女たちは宇宙人に救われた本物の千佳穂と理佳穂を名乗り、

4／15 金曜日

4／16 木曜日

と篤史兄さんは苦笑する。

「身につまされるよなあ」

「いや、つまされはしませんが

「……Bパート行くか」

後半のパートでは、千佳穂と理佳穂は双子の小学生で家業はホ

ームセンターであること。エイリアン同士の戦闘に巻き込まれて重傷を負つたが、彼らと同化する事で命を取り留めたこと。地球

に逃げ込んだエイリアンの逃亡犯罪者達を追跡し、倒し尽くす使命を受け継いだという説明がなされていた。

ここらへんの設定 자체はわりにありふれたものだが、中身といえば前述の通りであり……。

その後昼も結香さんのサンドイッチですし、夕方までぶつ通

しで全二十四話マラソンとあいなつたのだが。肉体的に精神的な疲労が大きい。子供向けにこんな痛々しい作品を作ってしま

う人たちはどういう脳みそをしてるんだろう。

「明日の午後はチカリカ5いくぞ。もうすぐ最終回なんだから、新学期前に一気に放送まで追いつくからな」

「うわあ。

「覚悟しときます」

「ああ、確かに結構覚悟いる。俺も一人じやちょっと見る気になれん」

いつも由香さんと一緒に見てるわけね。

「……ごちそうさまです」

「ごちそうさまついでに晩飯も食つてけよ」

「食べてつてね」

二人は死にかけていた千佳穂や理佳穂の意識をコピーして人間の真似をしている宇宙人に過ぎないと断じた。

自分が本当に千佳穂や理佳穂なのか、それとも自己の存在に悩んで戦いに集中できない二人。しかし、その恐怖心はもう二人のチカリカにも伝染する。

どちらかの記憶が間違っている。あるいは、どちらもコピーに過ぎないかも知れない。

四人は一端休戦することとし、まずは真実を突き止めること。

そして、近くに住む幼なじみの男の子に自分たちの正体を明かし、これまでの経緯を語つて判定を委ねる。

「やつぱりあれは千佳穂と理佳穂だったのか」

少年は気づいていた。

「少年は氣づいていた。

「きつとみんな騙されてたんだね」

そして、彼はたやすく推理してのける。

宇宙人達は仲間の罪の減免と引き替えに逃亡した犯罪者の追跡を要求され、互いに相手を逃亡者と勘違いするような命令を与えていたのであろうことを。

そんなのはもうどうでもいいことだ。と、二組のチカリカは、少年に判決を迫る。

「二人とも千佳穂、二人とも理佳穂だよ。僕には区別がつかないし、区別をつける意味もないと思う」

口々に苦情を言う四人に、少年はひょうひょうとしたもの。

「君たちはそれぞれ別々の存在なんだから。双子が四つ子になつただけでしょう？ どっちがどっちのコピーなんて、些細な話だ

出来事の通りであり……。

その後昼も結香さんのサンドイッチですし、夕方までぶつ通しで全二十四話マラソンとあいなつたのだが。肉体的に精神的な疲労が大きい。子供向けにこんな痛々しい作品を作ってしま

う人たちはどういう脳みそをしてるんだろう。

「明日の午後はチカリカ5いくぞ。もうすぐ最終回なんだから、新学期前に一気に放送まで追いつくからな」

「うわあ。

「覚悟しときます」

「ああ、確かに結構覚悟いる。俺も一人じやちょっと見る気になれん」

いつも由香さんと一緒に見てるわけね。

「……ごちそうさまです」

「ごちそうさまついでに晩飯も食つてけよ」

「食べてつてね」

そこで、口数が少なくおとなしそうに見える撫菜が意外とアクティブな事に驚かされる。単純な腕力では鈴菜に一步譲るが、読みの正確さや動きの精密さで言えば上回つてゐるかもしれない。ことに、このボーリングという競技は撫菜向けだったようで、第一ゲームは姉妹揃つて二百点台後半をマークしていた。遠近感

をつかみがたい片目のハンデを考えると、撫葉はほぼバーフェクトに近い。あの時は二人がここまで運動できるようになるなんて夢にも思わなかつたな、と感慨にふけつていると、歓声に意識を引き戻された。

「うおー」「すっぴー」

双子の美少女がえらいパワーと精度でばかんばかんとストライクを連発しているのだから、ギャラリーが集まること集まること。「可愛いー。持つて帰りたーい」

若い女性にも大人気な様子。もう少し年上の、たとえば結香さんや、宮藤姉妹あたりなら嫉妬の対象になるんだろうけど。

「眼帯、眼帯少女ハアハア」

そこの大学生風。聞こえるようにハアハアしないでほしい。なんか危ない。

「うーん、俺はあのぼーっとした背の高い娘が好みだなー」

ああ、どうせそういうオチでしょうともよ。

しかしこう連日遊んでばかりじや全然荷物整理が進まない。楽しくないとは言わないけど、ちょっと心配かも。

午後からは篤史兄さんのところで現在放送中の続編であるチカラカ5の鑑賞会。

前作のラストで逃亡エイリアンは滅びているのだが、今度の敵は仮面の御同類。

しかも、前作の敵であつたエイリアン達は悪名を擦り付けられ追放された者達であつたらしく、追跡者達もそうと知らず任務に就いていたらしいとか示唆されている。

「これ、どのへんがファイブなんですか？ 仲間が三人増えるとか？」

当然の疑問を口に出してみた。

「そういう意見が大半だったが、最終回まであと少しの本放送でも増えてないからな」

確かに。

今までやらかしきた事を考えると、僕に予想が付く程度の展開ですむとは思えない。

「チカリカは二人で完成してる。それを崩しても薄まつてピントがボケるだけだ。もし増員があるとするなら新キャラクターとあわせて関連グッズを増やしたいスポーツサーからの圧力だろうが、実際ウケてるんだから妥協する必要はないだろう。これまで無理を通し続けてきたんだから、変な物を作るぐらい打ち切りを選ぶだらうな」

嬉々として語る篤史兄さん。

でも個人的には業界側の事情から物語を先読みするってのは風情がない行為だと思ってしまう。このへんオタクと一般人の違いなのだろか。

「そういえば」

「うん？」

「今朝七瀬姉妹と遊びに行つたとき、何となく思つたんですね」

「いやあ、さおりさんに敵う気はしないから。自制してよ、えと、美紀ちゃん？」

「詩紀でいいわ。そんなの姉さんが言つてただけだから」

「了解。でも美紀ちゃんって名前も可愛いと思うけどね」

「……たまに呼んでもいい」

みなが一齊に手を合わせた。

「…………ごちそうさまでした」

「うつ！」

からかわれるの嫌がるくせに燃料投下しちゃうとこ、詩紀ちゃん結構迂闊だよね。

「ナナはそう言うけど、意外といい勝負になりそうな気はしてるわ」

意外にも、さおりさんはそんな事を言い出す。

「七夏君の鬼の名『九州珠口』はマルチリンガルを意味するそよ。『巻舌』の放つ言葉さえ呪言となるなら、天の国々のあらゆる言葉に通じた者が一流の術師でない筈がないでしよう」

そうなんだ。

無我夢中でそんなものを喚んでたのか、僕は。

「しかも五ヶ瀬、七夏にFive sevenN。そんな言葉遊びでさえ呪的回路をなして增幅効果を發揮するものなのよ。古来の儀式が多分に語呂合わせの要素を含んでいるように。そういうわけだから、五七五七の短歌が七夏君の呪文に適しているのは説明するまでもないわね」

なんだそりや。マンガですか。
「出来過ぎですね」

願いを叶える珠坂の女神に望まれたヒーローなんだから、そり

だ。

しかもめんどくさい。

「私に手間かけたくないなら、あんたらが暴走しなければすむこと。心も体もしっかり鍛えて、ゆるがない自信を身につけなさい」

揺るがない自信ねえ。この人が言うと説得力ある。

「あの、一つだけ聞いていいですか？」

「オウケイ」

「篤史兄さん？」

はそんなものはないかもしない、という気持ちの悪い話だった。

「彼女は並列多連精魂って呼んでたけれど、要は複数の魂が一つの肉体と連携している状態。詩紀ちゃんはいわば二連精魂ね。ちなみに私はあえてセカンドコアを区別する必要があるときには、樞の名代としての彼女を詩紀ちゃん、人としての彼女を美紀ちゃんって呼んでる」

篤史さんが上手いことまとめてくれた。しかし理屈はさておいても。

「何故に『みのり』ですか？」

「そこはそれ、お約束だから。まあ、漢字は『美しい』をあててるつもりだけね。鬼が入ってるのもどうかと思うでしょ」

「うわ」

「そりや冗談にならんわな」

篤史兄さんと十悟さんだけが頷いてるところをみると、どうやらなんかまたマニアックなことを言っているようです。

「じゃあ、樞なんて鬼が憑いたせいでの、デュアルコアになっちゃったんですか？」

とすれば、元凶はその鬼なわけけど。

「むしろ逆でしよう。斗流の始祖は双子の巫女だったそうよ。そうでなきや、いくら相手が休眠状態とはいえるの身で九頭竜なんて降せるはずもない。斗流の歴史上、樞を使ったのはこれまで始祖だけだったんだから、二つの魂は条件であつて結果じゃないと思うわよ」

「逆よ逆」

予想外の方向からの声。

「七瀬姉妹の方がオリジナルだもの」

振り向くと、ボブカットにファッショングラス、パンツスーツのお姉さんが腕組みして仁王立ちしていた。

これは新川さおりさん。篤史兄さんや詩紀嬢の従姉に当たる人。ハーフだそしだが見た目はまるきり日本人で、詩紀嬢の方が遙かに外国人ぽい容姿だった。

いつの間に襖を開けて入ってきたのが全然分からなかつた。が、それを考へても無駄だと言うことはよく分かっている。なにせ相手はさおりさんなのだ。年に一度と会わなくとも、この人の規格外っぷりは痛感している。

「や、ナナちゃん。おひさ」

「ウインク。この辺は帰国子女っぽい。」「お久しぶりです。それはともかく、今聞き捨てならない事を」「感動の再会をさらっと流したわね。はい、これ」「うおっと」

さおりさんはちょっと不満げ。

「何を？」

篤史兄さんはリモコンで再生を一時停止すると、こちらに向き直つた。膝の上に結香さんが乗つてなければ、真剣に話を聞く体制に見えなくもない。

「いや、そんな面白ない話じゃないんですけど。ただ、撫菜と鉢菜ってなんかチカリカっぽいなあって。髪型とか、イメージとか。りかぼーの網膜投影ディスプレイ（スカ●タームみたいやつ）と撫菜の眼帯とかかかりますよね」

渡されたでかい紙袋の中身は教科書類だった。さおりさんがいかにも軽々持つたので重さを読み違い、あやうく足の上に落としかけた。

「さおり姉、勝手に入つてくるなよ」

「私は管理人よ」

「話がどんどん逸れていく。」「いや、管理人でもまずいだろ」「うーん、管理人さんって言えばすごい美人の未亡人がお約束だが。ほれナナ、差し入れ」

こちちは重ねた紙箱。中身は10インチのピザ三枚だった。

「わざわざすいません、ジュウ兄さん」

入つてくるやいかみ合わない事を言い出した、ひょろりと背の高いこちちは陸奥十悟さん。さおりさんと同じ歳で、彼女が日本にいる間は影のように付き添つてはお目付役をつとめていた人だ。温厚そうに見えるがこれで意外とノリノリで、結構一緒になつて暴走していたので人選としては微妙なのかもしれない。

この二人、今では揃つて紫城高等部の教師の職にあるとのこと。五号室に五ヶ瀬が入つていよいよどこぞのアパート化してきたしな

「いやそれ、かなり古いから」

古い特撮を歌つた人の台詞とは思えない。

「十悟、私が美人じゃないって言つてる?」「未亡人じやないと言つたんだ。別に他意はない」「そんなに未亡人が良ければ、籍入れてすぐに葬式挙げてあげましょうか?」

と、さおりさんは腰を落として蝶螂拳の構えをとつてみせる。

と、さおりさんは言う。

「おそらくね。それを考へると、天才的才能を秘めた六つ子とか

八つ子、みたいななら、鬼どころか名のある『外側の神』でも降ろせるか、もしれないとか思つたりもするけどね」

それがどんなものかは知らないが、どれほど危険なことかは想像がつく。

「まあ、実際にそんなの居たら即排除よ。人類全体の命運に影響しかねないから」

さおりさんは冗談めかして言うが、仲間であつても危険すぎるなら排除する、とそら宣言したようなものだ。

皆同じように感じたのだろう。しばし会話がとぎれるが、

「まあなんだ。さおり姉に目をつけられないよう気をつけないといけないわけだ。詩紀の中の人も大変だな」

「中の人なんかいない」

ふい。

新川兄妹の掛け合いで、空気がちょっと和んだ。篤史兄さんはこういうフォローもできる。かき回す方が多いけど。

「それにもしもの時はナナが守つてくれるわ。ナナは私にぞっこんだもの」

ああ、つまり今は美紀ちゃんの方か。

そんなに恥ずかしがるなら言わなきやいいのに。

詩紀ちゃんの時だと、そういう事言いたいとは思わないわけかな。

初さんが挙手して発言。

「おそらくね。それを考へると、天才的才能を秘めた六つ子とか

八つ子、みたいのなら、鬼どころか名のある『外側の神』でも降ろせるか、もしれないとか思つたりもするけどね」

それがどんなものかは知らないが、どれほど危険なことかは想像がつく。

「まあ、実際にそんなの居たら即排除よ。人類全体の命運に影響しかねないから」

さおりさんは冗談めかして言うが、仲間であつても危険すぎるなら排除する、とそら宣言したようなものだ。

皆同じように感じたのだろう。しばし会話がとぎれるが、

「まあなんだ。さおり姉に目をつけられないよう気をつけないといけないわけだ。詩紀の中の人も大変だな」

「中の人なんかいない」

ふい。

新川兄妹の掛け合いで、空気がちょっと和んだ。篤史兄さんはこういうフォローもできる。かき回す方が多いけど。

「それにもしもの時はナナが守つてくれるわ。ナナは私にぞっこんだもの」

ああ、つまり今は美紀ちゃんの方か。

そんなに恥ずかしがるなら言わなきやいいのに。

詩紀ちゃんの時だと、そういう事言いたいとは思わないわけかな。

渡されたでかい紙袋の中身は教科書類だった。さおりさんがいかにも軽々持つたので重さを読み違い、あやうく足の上に落としかけた。

「さおり姉、勝手に入つてくるなよ」

「私は管理人よ」

「話がどんどん逸れていく。」「いや、管理人でもまずいだろ」「うーん、管理人さんって言えばすごい美人の未亡人がお約束だが。ほれナナ、差し入れ」

こちちは重ねた紙箱。中身は10インチのピザ三枚だった。

「わざわざすいません、ジュウ兄さん」

入つてくるやいかみ合わない事を言い出した、ひょろりと背の高いこちちは陸奥十悟さん。さおりさんと同じ歳で、彼女が

日本にいる間は影のように付き添つてはお目付役をつとめていた人だ。温厚そうに見えるがこれで意外とノリノリで、結構一緒に

なつて暴走していたので人選としては微妙なのかもしれない。

この二人、今では揃つて紫城高等部の教師の職にあるのこと。

五号室に五ヶ瀬が入つていよいよどこぞのアパート化してきたしな

「いやそれ、かなり古いから」

古い特撮を歌つた人の台詞とは思えない。

「十悟、私が美人じゃないって言つてる?」

「未亡人じやないと言つたんだ。別に他意はない」「そんなに未亡人が良ければ、籍入れてすぐに葬式挙げてあげましょうか?」

と、さおりさんは腰を落として蝶螂拳の構えをとつてみせる。

「謹んで遠慮させていただきます」
ジュウ兄さんでなくとも引くよなあ。

「これ、美人でキボウジンで管理人見習いみたいもん」
今度は、篤史兄さんが結香さんを指さして訳の分からぬことを言い出す。流れからすると何かの冗談なのだろうが。

「うわ」

ジュウ兄さんが引きつった笑みを浮かべる一方、さおりさんは膝を打つて笑う。

「あはは、そりやいいわ」

「お上手だね、篤史ちゃん」

「だろ?」

「……だから誰が上手いこと言えと」

上手い、のだろうか。僕にはいまいち意味が分からぬ。凄い美人になる希望があるってことかな?

一部にはあまりウケなかつたようだが。

「深入りするな。俺にも聞くな」

解説希望で視線を送つてると、ジュウ兄さんに釘を刺されてしまつた。

「了解」

ずっと年上の十悟さんはあの頃は僕らとは少し距離を置いていたものだが、今になってみれば僕らをいつも見守つてくれたと思うし、彼の忠告に逆らつてもあまり愉快な事にはならなかつた。気にならないと言えば嘘だが、今回もそれに従う事にしよう。

「話戻していいですか? さおりさん」

「ああ、七瀬姉妹の話ね」

こともなげに、言った。

「モデルなのよ」
「はい?」

「だから、鈴菜が千佳穂、撫菜が理佳穂のモデル」「はあ?」
篤史兄さんも首をかしげている。

「飲み込み悪いわね、あなたたち」
不満そうな口調とは裏腹に、さおりさんの表情はしてやつたりといった様子で。

「亀丸監督、友達だし」

こんなところに黒幕がいました。

かくして、ずいぶん人口密度の高いチカリカ鑑賞会になつてしまつた。

しかも教師二人が後ろで立ち見状態。

「僕、抜けましょうか?」

「ナナちゃんが抜けでどうするの?」

しかも監督のブレーンによる生コメントアリーフキ。

「見た目と口だけのお調子者で、大学時代にはモックタートルとか呼ばれてたのよ。プロデューサーの前で吹きまくつたら企画が通つちまつたどうしよう、って泣きついてきたから、思いつきを話してやつたつてわけ」

「アメリカ帰りで医師免許持つてるとか聞いてたが、まさかそんなところでつながつてるとか」

「コアなファンだけあって、篤史兄さんのショックは半端でなさそうだ。」

らね。それこそ列島まるまる消しにかかる勢いで」

実際に見た感想じゃ、あのまま放つておいたら勢いだけじゃなくて本当に消しかねなかつた氣がする。

もちろん僕らごと。

「へえ、あの感じだと絶対混ざつて思つてたんだけどな。

演技かよ。ひでえ妹だな。ぐつ!」

篤史兄さんの両脇腹に宮藤姉妹の肘が入る。

「あら、申し訳ございません。ほんの事故です」

「失礼いたしました」

とか言いながらぐりぐりねじ込んでし。

このお姉さん達、やっぱり怖っ。

それでも結香さん、相棒のピンチに気づいてないみたいだ

なあ(笑)

「だいたい詩紀、いつも無愛想なくせにナナ相手の時だけ態度変わりすぎだったよな」

さらに足まで踏まれているのに痛みをこらえながら突っ込む根性は立派だけど、何の意味があるんだろうか。

「相手や状況によつて態度を変えるのは当たり前です。兄さんは空気読めなさすぎです」

詩紀ちゃんの仮想鬼モードは、今や篤史兄さん相手にもとけてしまつてゐる。

そもそも援護射撃に入ろう。赤面する彼女は可愛いけど、ちょっと可愛そうになつてきた。

「読み過ぎだつたんだよね、詩紀ちゃんは」

「大きな力を統べるには、仮借も斟酌も後悔も必要ないばかりか害になるものよ。でもそうした態度を取るために心を殺し続けて

いれば、人格の改変にも繋がるわ。結果としてあたかも本来の持ち主のようになるのは当然でしょうね」

ナイス弁護です、さおりさん。

「ただ詩紀ちゃんの場合は、素の自分を鬼とは別に保てる要因があつたから、七夏君相手には本来の性格を出すことができたのよ」

「また遠回しな言い方して。どういう意味だよ、そりや」

と、十悟さんが急かす。

「そういうのに詳しい知りあいに詩紀を診てもらつたことがあるんだだけね。私と同じ見立てだつたわ。詩紀ちゃんは特殊な多重人格なのよ」

またややこしいことを言い出した。

「つまり、私は病気だということ?」

「病気とは違うわ。いわゆる解離性同一性障害との差異は、記憶に途絶や混乱がなく、お互いがそれぞれの存在を認識しあつていふつこと。一人で複数の役を演じるのではなくて、別々の役者がシーンごとに交代しつつ同じ役を演じるような状態を想像してもらうと近いかな」

「わかるようなわからないような。なんでそんな奇つ怪な事になるんだ」

「わたし、わかりません」

結香さん、あきらめるの早いな。考へる事は篤史さんに任せきつてゐる感じ。

「脳単独での思考は偶然に支配されるけど、意思を持った魂が関与する事で初めて方向性が与えられる、って話ですね」

自分の意思で選んで行動していると思いつこんでいるだけで、実

ばたん。

案の定。ドアが開き、七瀬姉妹が姿をあらわす。

「こんにちは。おはようからおやすみまで、ナナちゃんの暮らしを見つめ続けるリンリンです」

それはストーカーといいます、鈴菜さん。

「この目ではつきりと」

右目を指さしてみせる撫菜。黃金色の虹彩と縦長の瞳孔は、明らかに人のものじゃない。

「……でも酔った」

想像するに左右の視力に差がありすぎるんだろうな。

詩紀ちゃんはすでに僕から飛び離れている。

「今のは、そう、感謝の気持ちを表現しただけ。別に他意はないわ」

そう来たか！

「ナナが私をどう思ってようと、私の方からは何も言つてはいな

いから」

可愛いなあこの人。

ぞろぞろ。

二人に統いて、満足げな篤史兄さん。にこにこ笑顔の結香さんが屋上に上がってくる。

申し訳なさそうな宮藤姉妹。

にやにや笑いの十悟さん。

最後に出てきたさおりさんの表情を見たとき、突っ込まずにはいられなかった。

「近くにいたんなら手かしてくださいよ！」

「愛しい七夏君の気持ちを試したくて、あわよくば自分のために

「じっかしナナよ、詩紀が正気だつてよく分かったな」

初さん達はレベル十個ぐらい一気に上がったんじやないかな。初さん達はレベル十個ぐらい一気に上がったんじやないかな。ファンファーレ鳴りっぱな感じで。十悟さんに肩を叩かれた。

「初さん達のアレをみてたら気づけたんですよ。力の一端を借りただけでああなんだから、本物の鬼の頭領が顕現して、個人レベルの生死や怪我程度ですむはずがないでしょ？」

「さすが七夏くん。いい勘してる。確かに樞は休眠中。もしあれが起きてたら詩紀ちゃんをどうこうする程度じゃんでないわね。何かできるとしたら、『北落師門』を暴走させるぐらいしかし

「あいつ、雰囲気を盛り上げて引っ張つてく能力はあるからね。ネタさえ与えてやればいい仕事するだろうってのは分かつてたわ」

「つまり、事実上はこいつの作品でことだよ」

あまり嬉しくなさそうなジュウ兄さん。

「つてことは、もしかして敵方の二人もモデルいる？」

「いるけど今は秘密」

「やっぱり」

「じきナナちゃんも出てくるから楽しみにしてなさい」

「うわあ」

「何よその顔」

どう扱われてるのかだいたい検討つくから。

にがつたりと食らいついてきて、それを消化・再構成できているのが凄い」

渡された薄い冊子はいわゆる同人誌だろう。

生き生きとしたちかぼーの一枚絵は鋭く繊細な描線で表現され、それだけでも非凡な画才を示していた。表紙の端にはデフォルメされた竜のマスコットキャラクターと、スタジオヒナ press. の文字が記されている。

「でも、中学生が理解できて褒められる子供向けアニメつて一体」

「あの娘は特別。詩紀ちゃんと同じ」

「うわ、中学生でも分からぬの前提ですか……詩紀嬢と同じ？」

「え、そうなん？」

意外そうに、篤史兄さん。そして十悟兄さんもまた、意外なほど真剣な目でさおりさんを見た。

「俺も初耳だぞ。あんなん他にもいるってのか？」

「厳密には違うけどね。詩紀ちゃんは『集めて』『届けられる』けど、彼女は相棒に望まれて『そこにいる』んだから」

「お前さんは、まあたはぐらかすようなことを」

「ジュウ兄さんはため息をつき、

篤史兄さんの表情も懷疑的になる。

それに応えるように、さおりさんは何故か上機嫌に微笑んだ。

「ご先祖が珠坂という結界と七つの一族の血と北斗の鬼の力をそろえてようやく不完全になしえたっていうのに、個人の意思の力だけでちょいちょいと世界を書き換えてしまえるようなバケモノってのがいるってこと。そういうのが集まつてくるのも、ご先祖が描いた青写真には含まれていたのかもしれないけど」

いつも冷静沈着なさおりさんの口から、すらすらと電波チックな言葉が紡ぎ出される。

突然のらしからぬ奇行に、二人のお兄さん達はさぞや引いてるかと思いつ。

「……ここで言うか？ よりによつてナナに？」

「あーあ、俺も知らなかつた秘中の秘までぶっちゃけちまつて」

意外にも、困惑はあつても否定はなかつた。

「はぐらかすなつて言つたのはあんたでしょうに」

あくまでも得意げなさおりさんは悪びれた様子はない。

「態度の一貫しない奴だな。遠ざけておきたいのか引っ張り込みたいのかどっちだよ」

「外部からの干渉を避けただけ。決めるのは七夏君だからね。私はそれを尊重して判断材料だけ提供するわ」

細かいことはよくわからないが、ここにいる僕以外の人たちは、どうやら本気でそれを信じているらしいという事だけはわかった。

「それこそ生死に関わる話だし。何も知らずに死にたくないでしょ？」

七夏君

と物騒な台詞を宣わつた。

知つても死にたくありません。

その後も続いたさおりさんの電波話によれば、

珠坂は『神』の、正確には『救世主』の能力を模した街なのだ

そうだ。

人の魂ごときがなせる事はたかがしれている。自己の脳内にお

と見なされたであろう事は想像に難くない。

まずつた。

とりあえず銃など抜いてみる。

小型拳銃二丁。武器はこれだけ。

これが本物のFire seeZなら魚人の鱗を貫通できるかもしけないが、プラスチック弾しか撃てないモデルガンでは、目つぶしをくらわすのが関の山だろう（ボラみたいなまぶたがあつたらアウトだ）。

しかし、彼らが銃を知っているなら、手にしているだけで牽制ぐらいにはなるかもしれない。

詩紀ちゃんは僕に抱きついたま、身をもつてかばうようにしてくれている。

「喚んでおいて殺すなんて、これは本当に私の罪ね。でもナナを失うわけにはいかないから」

「え？」

「ナナは知つてゐるはずよ、『珠口』の使い方」

詩紀ちゃんの言葉によって引き出されるように、浮かんだ歌は

柿本人麻呂。

「大君は神にしませば天雲の」

前に一発。左右に二発ずつ。

ける量子論的確率に偏りを生じさせる事で、魂の望む方向性を思考・行動に反映させる程度だ。

しかし、『救世主』は人々の信仰を集めハブとして働くことで魂を群体化して一つの回路となし、より強力に世界へと干渉するため、個人に比べて遙かに広範に、強引に、偶然の偏りを生じさせる事ができる。

その『救世主』を人工的に作りだそうと考えた者達があり、僕ら斗十家の祖となつた。

ある斎王と北面の侍の一派は、信仰の核となる存在とそれを守る存在達を用意し、日本の要とすべく靈的に適した優れた土地に町を興し、術式を敷いた。

という事なのだが……

またなんと電波な。

「現在の宗家は詩紀ちゃんよ。表向きの仕事は私が肩代わりしているけど、眞の支配者は彼女」

その言葉が本当なら、詩紀嬢に頼めば何でも願いが叶うとでもいうのだろうか。

『救世主』ってことだから、要是キリストの奇跡みたいのだろう。もしや、オザキ歌つたらガラスが割れたとかいうのもそれか？

確かに、昔から彼女が出した話題が直後に現実になつた例は枚挙にいとまがない。

いやいや、そりやいくら何でもこじつけすぎだらう。偶然だよ偶然。

でもさおりさんは、『偶然を偏らせる』って言つたよな。

起ころのが偶然でも起こりうる内容ばかりじゃあ、彼女が関係

してゐるなんて証明しようがないんじや。

そして肩越しに後ろに一発。

弾で六芒星を描く。

「雷の上にいほらせるかも」

顔を赤らめた彼女は初めて見る。

あの無愛想だった詩紀ちゃんが、心の枷を外したことでこんなに愛らしく笑う事ができるようになつたのだから。

身体張つて頑張つてよかつたと思えた。

あたりは焼き魚とオゾン臭が入り交じつたような臭いに包まれ

ており、篤史兄さんの衝の時もこんなだつたんだろうが、この際

どうでもいい。こうしてだきしめてると詩紀ちゃんはいい匂いがするし。

「ひゅーひゅー！ ナナちゃん、しのりん、おしゃわせに！」

熱烈告白

携帯の回線開きっぱなしだったOTL

このネタで一生からかわれ続けそうだ。

あれ？ 今、肉声も一緒に聞こえてこなかつた？

さすがに結香さんだけは売約済みだけど

「はぐらかさないで！」

「人と価値観の違う鬼は、人とともに生きていけない。あなたに鬼が愛せて？ 運命をかき回しては大切な人を何人も奪い傷つけておいて、涼しい顔でいられるような生き物を、ナナは愛せるというの？」

何かがおかしかった。

僕はさっきから何をしてる？

誰に必死で話しかけてるんだ？

相手は非情な鬼の頭領、樞だつてのに。詩紀ちゃんの意思なんてなくなってる筈なのに。

僕はどうして、詩紀ちゃんに対するように話してるのか。

……

ああ、そうか。

僕にはとうに分かってたんだ。

「愛せないよ。そんなものを好きになるわけない」

「なら……」

それ以上、自己否定の言葉を話させたくはなかった。

「だから、僕がこんなに好きになつた相手が鬼の筈がない！」

「！」

「本物の鬼なら、なんと思われようと意に介さないだろ。僕の気

持ちにそんなにこだわる君は人なんだ。自分を樞と思いこんでる

だけの詩紀さんだ」

「……」

「こっちに来るんだ」

「そんのはナナの勝手な思いこみで理屈をこねてるだけ。何の

証拠にもならないわ
ふう。強情な人だな。

「証拠はそちらの中にあるんだから僕が証明する必要なんて無い。だから素直に認めればいいんだ。君は意味も分からず誰かの望みに動かされただけなのに、叶えてしまつた悪意の結果を自分での罪として背負ってきたんだろう？ 悪意の主が良心の呵責から免れるのと引き替えにね。自分が鬼に支配されているって信じる事で、心の安定を保とうとしてもおかしくないよ」

「ナナは本当に残酷ね。それが好きな相手に言う言葉？ 自分を

極悪非道の悪人だと認める、罪の意識におののきながら生きろなんて？」

「悪人？ そこがまず間違い」

彼女が怪訝そうな表情を浮かべた。

「詩紀さんに罪はないよ。能力をこえた責任を押しつけられたんだから、自分の意思で正しい選択も操作もできるわけないでしょう。バスの運転席に座らされた赤ん坊に事故の罪を問えると思う？」

「それじゃ、ナナは私を許してくれるっていうの？」

初めて見せた、泣き笑いのような表情。

「むしろ気に病ませて悪かったと思ってる。きっと撫菜や鈴菜も、同じだと思うよ」

両手を開き、呼びかける。

「だから来い！ 詩紀ちゃん！」

どすん。

次の瞬間、僕は大切な人の心地よい重さを胸に抱き留めていた。

たとえば詩紀嬢に頼んで宝くじ十回連続で一等当たったとして、それが奇跡の証拠になるか？

「おいおい、ナナのやつ悩みこんじまつたぞ」

「さおりが話をややこしくするからだ。せめてもう少し落ち着いてからにすれば」

「ここまで完璧に隠し通してきた挙げ句、証拠も無しに信じられる話じゃないだろ」

「篤史の言うとおりだ」

男性陣二人の突っ込みに、さおりさんはこともなげに言った。

「実演しよか？」

「そいつはカンペーン」

間髪を置かず、期せずして答えがハモる。

「論より証拠って言うわよ」

具体的に何をするのか分からないが（指をコキコキ鳴らしているあたりがそこはかとなく気になる）、さおりさんはその実演とやらをやりたくて仕方ないらしい。

篤史・ジュウ兄さんがそれを歓迎していないのは言うまでもなく。

実演とやらは見たい。でも危ないのは困る。そして先輩方の様子を引くまでもなく、とても危険そうな雰囲気が。

妙な風に緊迫した雰囲気を破つたのは、のんびりほっこりした声だった。

「実演もいいんですけど

篤史兄さんの膝の上で目を糸みたいにして大きなおせんべいをかじっていた結香さんは、のんきな口調で提案した。

「今日はもう遅いからお開きにしたほうがよくないですか？ よ

「電波で」

「なに？ 疑問なら明日にして。今日はもう飽きちゃつたから」

飽きたつて。

「そうじやなくて。電波話に振り回されて、結局荷物整理できなかつたじゃないですか！」

「言う言う」

「大丈夫じゃないのー？ ねえ結香ちゃん」「ええ、そう言うこともあらうかと」

結香さんが人差し指を立てて見せた。

「荷物整理なら初さん終さんにお願いしておいたから」

「はい？」

「午前のうちに合鍵預けておいたから、もうとっくに終わってると思うよ」

「え、えええええっ！」

すぐさま五号室に向かったが時すでに遅く。

宮藤姉妹はまさに撤収の真っ最中だった。

初 「七夏さま、お疲れ様です」

終 「早速で申し訳ありませんが、作業内容をご確認いただけませんでしょうか」

初 「至らぬところなどございましたらお叱りは甘んじて」

相変わらずのばか丁寧さと、おそろいのなぜかメイド服については突っ込まないでおくとして。

居間を占拠していた段ボールの山は綺麗に消え去り、殺風景な部屋は完璧な居住空間に姿を変えていた。

この人ら仕事できすぎ！

つていうか、どうやつて動かしたのブラウン管アナログハイビジョン（お隣のAVマニアな兄ちゃんのお下がり）をもらつたものだつたり）。

初 「書物・記録メディア類は作者・作品ごとに分類しておきました」

「うん。ありがとう」

『手を離せなくなつたんでしょう？ それも予想通りよ。きっと目的は達したのだから現時点じゃ上出来だわ』

さおりさんの言葉には咎めるような調子はない。

『でもこれで、野放しの『北落師門』の危険さはよく分かつたでしょう？ あなたたちが別々の初と終である事こそが暴走抑止の要だから、しつかり自分に自信を持つようにな』

『はい、宗家代理』

『肝に銘じます』

『はあ。なんとか、終わってくれたみたいだ』

制服の上着の下のホルスターに触れる。

こんな頼りないモデルガンに頼るような羽目にならずによかつた。十悟さんのように便利な鬼を降ろせるわけでもないのだから。

結局、さおりさん達は最初から僕を戦わせるつもりなどなかつたのだろう。

何も知らない僕に、斗流の全貌を特等席で見せるため。名前だけの仕事をくれたってわけだ。

『僕らとしては助かったんだけど。これじゃああの半魚人達にしつみればただの特攻、無駄死にもいいところだよ』

誰も怪我らしい怪我は負つてなさそうだ。返り血や臓物のにおいが取れるまでは時間が掛かりそうだけど。

『鬼の君は、これを見ても何とも感じないんだろうね。くるる』

『そう言つて振り向いた時。

彼女の背後に数体の魚人が迫っているのが見えた。

別働隊！？

気が利くなあ。さすがに。終 「ある種の娯楽メディアに関しては特に慎重に扱い、簡単には目につかないようにカモフラージュ性も考慮しました。分類はジャンルと出演者ごとで実用性を重視しております」
「……」
もともと丁寧な話し方の二人なのだが、一語一語をはつきりとくぎつてことさらゆっくり噛んで含めるような口調に、ただならぬ雰囲気を感じた。
ある種？

ある種で。

血の気が引く。
お隣さんの餞別。あの段ボールって、もしかして。

初 「シリーズの抜けやタマゾンのお薦め商品もリストアップ済みです。内訳はこちらにまとめてございますが、必要なら読み上げましようか？」

二人とも態度がほとんど変わらないんですが。
「い、いえ、そこまでしてもらうわけには」

終 「ご心配には及びません。七夏様のご趣味については心の内にとどめ、決して口外いたしませんのでご安心を」

この人らデリカシーな過ぎ！

てか、これ、もしかしても嫌がらせ？

初 「ただ、老婆心ながら一言だけ言わせていただくと、お楽しみは想像の中だけにしておいていただきませんと、不名誉な罪状で手が後ろに回りかねません」

「そ、それはもう、十分に理解しております」

終 「そうですね、自制の如何によっては、七瀬のお嬢様方にも十

『手を離せなくなつたんでしょう？ それも予想通りよ。きっと

さおりさんの言葉には咎めるような調子はない。

『でもこれで、野放しの『北落師門』の危険さはよく分かつたで

しょう？ あなたたちが別々の初と終である事こそが暴走抑止の

要だから、しつかり自分に自信を持つようにな』

『はい、宗家代理』

『肝に銘じます』

『はあ。なんとか、終わってくれたみたいだ』

制服の上着の下のホルスターに触れる。

こんな頼りないモデルガンに頼るような羽目にならずによかつた。十悟さんのように便利な鬼を降ろせるわけでもないのだから。

結局、さおりさん達は最初から僕を戦わせるつもりなどなかつたのだろう。

何も知らない僕に、斗流の全貌を特等席で見せるため。名前だけの仕事をくれたってわけだ。

『僕らとしては助かったんだけど。これじゃああの半魚人達にしつみればただの特攻、無駄死にもいいところだよ』

誰も怪我らしい怪我は負つてなさそうだ。返り血や臓物のにおいが取れるまでは時間が掛かりそうだけど。

『鬼の君は、これを見ても何とも感じないんだろうね。くるる』

『そう言つて振り向いた時。

彼女の背後に数体の魚人が迫っているのが見えた。

別働隊！？

るだろう。

「ナナ」

背後から声をかけられた。

「こんな時間に何をしているの？」

それはこちらの言葉です。

と言い返したかったのだが。

振り向いた途端眼前に飛び込んできた光景に魅入られてしまい、声が出来なかつた。

全方位型ソフトクロスフィルタ常備ですかこの人は。

朝日を浴びてキラキラと輝く銀髪が、可愛いとか綺麗とか通り越して、もう神々しいとしか言いようがない。相変わらずの仏頂面さえ、神々しさに一役買っているように思える。

言わずとした、詩紀嬢であった。

「あ、ええと」

「私は起きたいときに起きて、食べたいときに食べて、寝たいとき寝るの」

質問に先回りするように、適切な答えが返ってきた。高校生として正しい答えではないところが何とも。

女神様じみた容姿に相応しい答えでないのは言うまでもないが、これでうまいこと気が抜けた。

「あ、あはは。置いてかれちゃって」

「兄さん達を基準にしていては遅刻してしまわ。毎日全力ダッシュで競争だもの」

結香さん、坂ばっかりの2キロ弱を篤史兄さんについていけるのか。

その光景はちょっと想像しがたい。まさか篤史兄さんまで全力

この辺も含めてモデルなわけね。

撫菜が弾丸五発を撃ちきった直後。

マガジン交換の隙をカバーするかのように、ジュウ兄さんが進み出た。

すぱぱぱぱぱぱ。

気の抜ける音とともに、敵最前列めがけてBB弾がまき散らされる。

むろんそんなもので魚人どもにダメージが与えられる筈がないのだが、しかし彼らはなぜか、数歩と歩かないうちに次々と地に突っ伏していく。

新たな魚人がそれを踏み越えていっては弾をくらい、面白いぐらいでにばたばたと、折り重なるつて倒れる。

最初は催眠ガスでも詰めてあつたかとも思つたが、ふと先ほどの漢詩が脳裏によみがえってきて、ピンと来た。なるほど。

「『巻舌』。十悟さんの得意よ」

「要するに舌先三寸の鬼なんだね、実にジュウ兄さんらしいな春眠暁を覚えず。

完徹に近かつたはずなのに、僕の眠気の方は吹き飛んでる。普通この状況では寝られない。

プラスチック弾を媒介にして古代の詩人の言霊をぶつけられた結果として、彼らは戦闘の緊張感すら打ち消すほどの強烈な睡魔危険性については説明は不要だろう。

『牀前看月光 疑是地上霜 拳頭望山月 低頭忠故郷』

という事はないと思うが、結香さんは本当に中身変わつてない感じだな。

「さあ、行くわよ」

そう宣言した詩紀嬢は無造作に僕の手首をつかむと、そのしなやかな指からは想像もつかない力でぐいぐいと引っ張り始めた。

「うわーとと」

「私が最終ラインだから、離れないようになさい。初日から生徒指導の世話になりたくなければ」

相変わらず無愛想だが、遅刻しないように気を遣つてくれているようだ。

「ええと、もしかして……待つてくれたんだ? ありがとう」

「別にあなたを待つたわけではないから。偶然一緒になつただけ、勘違いしないで」

「へ?」

顔を赤らめてのあり得ない発言。おおよそ詩紀嬢らしからぬ態度。

これっていわゆるツンデレ系? (篤史兄さんの薰陶によりここ数日でえらい詳しくなりましたよ、ええ)

とか思つたりもしたけれど。

「……とでも言えば満足かしら」

と、一瞬で元の無愛想に戻つてしまい、先ほどまでの可愛しさは微塵もない。

ギャグか?

いや、ギャグなんだろなあ。彼女なりの。

とにかくとつもなくレアなものを見てしまつたのは確かなので、なんとなく併んでしまつた。

ジュウ兄さんは今度は李白を吟ずる。
すぱぱぱぱぱ。

弾を食らつた魚人はめいめい勝手に振り向いて、全体の動きに逆方向の流れ同士がぶつかりあって陣形をさらに崩す。

それだけでなく連携の微妙な魚人達であるというのに、撫菜の狙撃で現場指揮官を次々と倒されている状態では混乱からの回復は難しい。比較的統制のとれた一部についても鈴菜達がきつかり押しとどめており、今や魚人達の進軍は停止していた。

『よし、最後尾が上陸したそうだ。川まで一直線! 初・終、やつちまえ!』

ジュウ兄さんの発破。

玄関口に並んで立つた宮藤姉妹はうなづきあうと、例の長手袋を脱ぎ去つた。

二人は向かい合つてダンスのような体勢で組み合い、校舎の方に向けて無いはずの手をのばし、手の形をした光り輝く何かをつなぎあう。

『はるか北の門にて永劫の時経てなお死ぬことなきものよ』

おごそかに、すずやかに。紡ぎ出される呪文が綺麗なハーモニーをなす。

聞いたことのない言葉だといふのに、その意味ははつきりと伝わつてくる。

絡み合つた手の周囲に無数のまばゆい輝きが生み出されていく。

『おっと、ここはやばい。逃げるぞゆつか』

ともに後衛をつとめる撫菜はといえば、膝撃ちと寝撃ちの間の
ような姿勢で、大型ケースに半ば身体を預けるようにして構えて
いる。

ケースの中身はやっぱり銃だったようだけど、あの寸詰まりな
フォルムとばかりかいブレークと太い銃身は確か……お隣さんが
言つてたやつだ。そう。

X M 1 0 9 ペイロードライフル。

また、なんというか。

対物用重狙撃銃とちびっこい撫菜との組み合わせとは、アンバ
ランスにも程がある。

『ごー』

発砲。

一直線をなして十数体の魚人が倒れ、その背後の堀に穴が穿た
れ、堀の向こうで爆発が起ころ。

あれって、徹甲榴弾？

？

「実銃!?」

なんで？

いや、実銃で正しいのか。

むしろおかしいのはジュウ兄さんの方じやないか。
我ながら、怒濤の非常識展開に、まともな神経が麻痺してきて
いるようだつた。

『?』

撫菜はしばし首をかしげていたが、

『しまつた』

それにしても、あんな表情ができるとは。
見事な演技力だけど、それなら普段もうちよつと愛想が良くして
もよさそなもの。

これで近つきがたい感じさえ払拭されれば、さぞや人気が出る
だらうに。

そう忠告しようと思ったが、やめておいた。モテモテの彼女が
想像しがたいというものもあるが。そういう気分にはなれなかつた。

しかし、慣れているのだろうが実に悠々と歩いているのだ。
表情が乏しいこともあるが、急いでいる感が全く感じられない。
ちょっと心配になつてきて、先行しようとしてみたら、手首に
激痛が走つた。

「イタつ!？」

思わず立ち止まり、彼女の隣に戻ると嘘のように痛みがなくな
る。

あんまり力を入れているようには見えないが、詩紀嬢につかま
れた手首は曲げもひねりも利かないようになつてしまつて
いた。

これじや前に出ることも下がることもできない。
てか、気づかないうちに関節極められて連行されていますよ。
ああ、こういうやり方、確かにさおりさんの従姉妹だ。血のつ
ながりがなくともそつくり。

「あー、詩紀様だ」

首をひねつてみると、同じ焦げ茶のブレザーブの女生徒。

そう言ってひょいと眼帯をはずす。
そして今度は、右目で照準をあわせ、
『ごー』

先ほどに数倍する魚人が列をなして倒れていく。そして正門前
通りのはるか彼方で、一回り大きな体躯の（おそらく指揮官クラ
スの）魚人がザクロのようく碎けたのが見えた。

『うん』

撫菜が満足げに頷く。

銃声のたび、一体の大型魚人と、射線上数十体の魚人達が戦列
から取り除かれる。

本来生き物相手に使うような銃ではないから（事実上の携帯用
半自動砲だし）、無茶苦茶な破壊力には納得できる。

しかし、撫菜程度の体格であんな大物の反動に振り回されてい
ないのはどういうわけだ。

さらに奇怪なのは、射手である撫菜からは見えていないはずの
相手を、視線を遮る多数の敵こしに狙撃してゐるということ。
つまりは。

「あれも、そなうなんだ？」

「『弧矢』だそうよ。つまり弓矢ね」

撫菜の失われた右目は、飛び道具を司るその鬼によつて肩代わ
りされ、狙撃に特化した透視・千里眼を發揮するようになつてい
るのだろう。とすれば、障害物の向こうの敵を倒しうるペイロード
ライフルは、彼女の能力を最大限に生かせる武器だと言つてい
い。

しかし鈴菜といふ撫菜といふ、容姿と戦い方のアンバランスさ
が實にチカリカ的。今更ながらにそう感じてしまう。

「いそげおソメ！ もうちよつと！」
さら後に声をかけている。

「ま、待つて！ はあはあ、待つてつたらー、うつきー！」

三十秒後。二人は僕らとほぼ並び、速度を落としていた。

「はあはあ、間に合つたよ。はあはあ」

「もう、おソメが寝坊するからあ」

その後も、同じような様子で、何人かが合流してきただ。

ネクタイの色からすると、皆二年生・三年生のようだ。

「なるほど」

自称のみならず、詩紀嬢は多くの学生達に最終ラインとして認
知されているらしい。

しかし、合流したとは言つても一団にはならず、僕らとは少し
距離を置いて固まつてゐる。

ひそひそひそ。

古い推理小説じやあるまいし。砒素がどうしたと言いたくなつ
てくる。

「声を潜めて聞こえているわ。言いたいことははつきり口にし
たら？」

強い口調ではなかつたが、詩紀嬢は良く通る声で誰相手ともな
くそう口にした。

数秒間の沈黙の後。

「お、お似合いですよ。詩紀さま」

「ほんと、宝塚みたーいですつて」

おソメとうつきーと呼ばれていた女生徒二人が言う。

う、そんな僕はどうすればよいのでしょうか。

それをきっかけに、他の生徒達も次々と発言をはじめた。

「珍しいですね、新川さんにお連れがいるの」

「見かけない顔だけど、転校生?」

「そちら、噂の婚約者さんですよね」

「はい?」

何ですか、それは?

婚約者? そんなのいるの?

いや、篤史兄さんにはいるのだから、詩紀嬢にいておかしくな

い。でも噂ぐらい聞きそなうもの。

あ、これが噂か。

いやいや、十家の内輪で誰も知らないはずがないと思うんだが。

「そのようね」

混乱する僕とは対照的に、詩紀嬢はこともなげで。

おーっ。と歓声が沸き上がる。続いて拍手。

「お幸せに!」

「そちらこそ」

数々の祝福の声にそな返す彼女の表情は相変わらず能面じみて

いたが、少しだけ頬が赤くも見えた。

「本当に間に合っちゃったよ」

詩紀嬢のベースにあわせた結果、時刻は完全にオーバー。

昇降口を上がった直後に始業式のため講堂へと移動する群れに

合流できた。

なんでも、各教室では黒板に講堂への集合時刻だけ書いてあつ

たらしい。

前衛の四人が堀を離れて後衛の近くまで下がってきた事で抵抗

はなくなつたはずだが、先ほどの電撃に対する警戒があるのだろうか。

門から入り込んだ魚人達は、隊列を組み横一列の前線を形成して、あたりを警戒しつゝくりと歩み寄ってきていた。

『皆様、お見事でした』

『完璧な停滞戦術です』

『戦術はともかく、生臭いの何のつて。魚屋のゴミバケツに頭か

ら突っ込んだみたいだ』

『どうぞ』

『お、サンキュー』

そこに、初さんがバスタオルを手渡す。準備がいいというか、さすが篤史兄さん。冗談をとばす余裕がある。

『鈴菜様、こちらに』

なんたる放任主義だろう。

「ナナは同じクラスだから。私と一緒にぐれた振りをしていろ

ば教師が案内してくれるわ」

なるほど、今日は荷物らしい荷物がないのでこういう芸当も可能なわけだ。

ほどなく、

「新川さん、2-Cはそっちょ」

女の先生に声をかけられた。

美人だけど可愛さの方がまさる容姿といい、ほんわり癒し系の

雰囲気といい、十年かそこら後の結香さんが、きっとこんな感じに違いない。

もしかして親戚かもしれないな。

「ありがとうございます、野口教諭」

「ほら、君も。五ヶ瀬君だったわね。ちゃんと新川さんについて

いって」

「はい」

「慣れてても迷っちゃうこともあるんだもの。転入生じゃ当たり前よね」

なんかとっても自己弁護的に聞こえるんですが。

こうして、僕らを含めた最終登校グループは教室への移動時間を節約できた事になる。

まるでお話のようなご都合主義だ、と思った。

式典での退屈な挨拶やごく短い伝達の後、僕らはそれぞれの教室へと向かった。

『むぐぐ』

終さんに頭と顔をぬぐわれながら、鈴菜は双子の姉に無言で親指を立てて見せる。

『おつかれリンリン』

『攻撃再開まで三十秒つてところね。十分ひきつけて、あとはまあ各自で上手いことやって』

そんなおおざつぱな指示を出すさおりさんに、誰も疑問を差し挟まない。無駄だと分かっているからだろう。

しかし半分非実体だった結香さんはともかく、普通に格闘戦をしながら返り血も浴びずにけろつとしているさおりさんがつくづく恐ろしい。

『さて、俺も年上らしく少しはいいところ見せておかないと』

ジュウ兄さんは不敵に笑いつつ、映画でよく見る機関銃、M60を手に取った。

『春眠不覚曉 処処聞啼鳥』

孟浩然なんか吟じつつ、迫り来る来る魚人の群れを前に悠々と

マガジンとバッテリーを込めていた。なんて違和感。

『夜來風雨聲 花落知多少』

つて、あれもモデルガンか。

この状況で役に立つとは到底思えないんだけれど、誰も突っ込もうとしないところを見ると、あれはあれで何か弾に仕掛けとか

があるのかも知れない。

接着剤とか、目つぶしとか、そういうやつだ。

なんか急にせこくなつてきたなあ。そういう微妙なところが十悟さんらしい。

あれはきっと、篤史兄さんに教えてもらった“ちかぼー”的バーカー”と同じような理屈なんだろう。不確定な武器は常に最適な武器に変わりうるし、不確定な構えからは常に最適な攻撃を繰り出せるということ。

結香さんは鬼使いなのかそれとも鬼憑きなのかは知らないけど。そんなものに頼つて自分を不安定にするなんて想像するだけ気持ち悪い。樞の言うのが本當なら、篤史兄さんあたりがちゃんと姿を覚えていてくれるのを当てるにしているのかもしれないが、よっぽど相方を信頼していないとそうそうできる事じゃないだろう。

ほんと、いいコンビだと思う。

さて、さおりさんはといえば、時折屏を超えてくる魚人の始末に駆け回っているのだが。

「ふうん、姉さんは何も降ろしてないのね」

篤史兄さんが刀使つてさえ倒しきれてないバケモノどもを手刀や蹴りで一撃必殺。

鈴菜や結香さんの魔術じみた戦いと比べても、ある意味むしろこっちの方が余計に非常識に感じてしまう。

ほんと、なんであんな真似が可能なんだろか？

『リンリンふっかーつ！』

門では最初に張り切りすぎてへたつていた鈴菜が再加入。ごく短いサイクルでのローテーションが成立し始めた。

信じがたいことに、たった四人である群れを押し戻しはじめている。

後衛のみんなが何ができるのかは知らないけど、ここで一気に全員攻撃にでれば魚人達を潰走させられないだろか。

それをさおりさんに伝えようとした時、さずしん。

甘かった。

『気づかれたかな。そろそろ前線を下げましようか』

狭い門は一齊には通れず、しかも少数で真っ向からぶつかるしかない。個々に屏を越えれば各個撃破される。

これまで引っかかっててくれた彼らが、それに気づいて戦法を変更してきた。要するに屏がなければいいのだから。

魚人達は一齊に体当たりをかけることで屏を押し倒しにかかつってきたのだ。

さずしん。

「いけない！ 埼から離れて！」

もう数回の打撃で屏が倒されるだろう、そうすればいかに篤史兄さん達が強くとも、瀑布のような魚人の群れに巻き込まれ、押流されてしまうだろう。

『どいてる鈴菜、俺がやる！』

『うつひやあ、待避つ！』

篤史兄さんが地面に拳を打ち込んだのが見えた。

次の瞬間、引き倒された門扉を、屏を雷光が駆けめぐる。

おかしな色の煙があたりを覆い、蛙の断末魔のような魚人の悲

担任はなんとジュウ兄さんだった。当たりと言つていいだろう。

何しろお隣の2-Bはさおりさんだそうだから。悪い人じやないんだけど、きっといろいろ大変だろう。主に精神的に。

まずはお約束の自己紹介となり、

「新川詩紀。あとは何を言つても蛇足ね」

ジュウ兄さんを含む全員が一齊に頷いた。

さすが、よく分かってる。

「皆さん初めまして。五ヶ瀬七夏、転入生です。得意科目は国語

一般。苦手は芸術一般。あと男です、念のため」

別にギャグのつもりはなかつたのだが、最後のフレーズでクラスがどつと沸いた。

そしてその直後の、「知ってる。今噂の、詩紀様の幼なじみで許嫁だよね」との言葉で、教室中上を下への大騒ぎに。

一体どこからそんな話が出てきたかわからないが、僕が珠坂に来てから数日というのにこの状態。

しかも詩紀嬢が否定せずに放置するから、僕がなんと言おうと恥ずかしがっているだけと解釈されてしまい、もう完全に既成事実扱いだった。

尋問モードで聞まれている最中、その詩紀嬢が僕の耳元に口を寄せてささやいた。

「詩紀さん。お願いですから余計に騒ぎを大きくするような真似をしないでください。放課後、北棟の屋上で。くれぐれもつけられないようになさい」

「話があるわ。放課後、北棟の屋上で。くれぐれもつけられないよ」

おかげでジュウ兄さんの手を借りても、全員撒くのにたっぷり

一時間かかってしまった。

屋上とは聞いていたけれど。

まさか給水塔の上になんぞ立つてるとは思いませんでした。

これが新川家なんだな、と改めて篤史兄さんやさおりさんとの共通点を感じてしまう。

「引っ越してしまったナナにはこれまで機会がなかつたから。だから、ここできつちり説明しておくことにするわ」

詩紀嬢はいつになく饑舌で、感情的に感じられた。

「まずは、ごめんなさい」

彼女はいきなり深々と、これ以上はないぐらい深々と腰を折った。

「いや、何のこと。いいから頭を上げてよ」

唐突すぎてわけがわからない。

「十年前のこと、ナナには何の責任もないし、とらわれるべきでもない。それだけは知つていて」

あの事故のこと、しかないうだろう。

なら明らかに僕の責任じゃないか。

七瀬姉妹の父親にドライブのコースを委ねられたとき。二人と

その母親が海回りを推したのに対し、ただ一人山越えを宣言し主張貫いて、事故現場へと導いたのは僕だった。

「あなたにベンベン・リンリンを傷つけさせたのは私。二人の両親が亡くなつたのも、あなたが言葉を失つたのも、みんな私の」「わけわかんないよ、君の言うこと」

僕は詩紀嬢の言葉を遮った。
弁護してくれたのは嬉しいけど、僕の逃げを肯定するような言葉をこれ以上聞くに堪えなかった。

「道を決めたのは僕だ。だから僕が悪い。それでどうして君が出てくるのさ」

彼女に罪をかぶせて何になる？ それでは罪を償えるどころか、罪悪感が薄れる事さえない。

「説明するにはちょっと長い話になるわ。ナナらしからず興奮しているけれど、落ち着いて聞けるかしら？」

早速釘を刺された。

彼女は真剣に見える。納得させる説明ができる、と彼女は考えているのだろう。

ならば。

「聞くよ」

詩紀嬢は頷いてみせた。

「私、『樞』もそうだけれど、末位に近い宮藤の『師門』は、斗流の一部には衝撃だったようね。斗流全体としては望むべくもない奇跡だけれど、我が一族の子には何故に血が出ないのか、と思う人々が居ても不思議ではないわ」

「……ええと？ まったく、全然、これっぽっちも意味が分からぬのですが」

新川は電波一族でしょうか？

「初さん終さんの長手袋は何か知っているかしら？」

突然話の方向が変わった。

「確かに、火傷か何かの痕があるとか」

「ナナにはそう説明されてるのね」

ういう仕事にはうつてつけということね」

ただ冷静に分析する樞に、ちょっとといらつと来る。

「あんたのお仲間同士がああして殺し合っててるのに、よくもそんな」

「私にそういう感覚は無いと言つたはずだけれど」

つい忘れてしまい、どうしてもヒト相手のように会話してしまう。

なまじ詩紀嬢の姿をしているから。

やられててもやられて仲間の死体を踏み越えて突き進んでくる魚人の群れに、さすがの鈴菜もじわじわと押され始めていた。

『リンリンつかれた。交代希望』
『よし、任せろ』

鈴菜に代わって、篤史兄さんが前に出る。

同時に襲いかかられる数を制限して、ローテーションで休息をとりつつ敵を押しとどめる。これができるように、校門を絞り込みに使ったのだろう。

魚人の爪をかわし、あるいは刀で弾き。斬撃をたたき込む。

さすが篤史兄さんは剣術体術ともに半端ない。鈴菜のような一撃必殺問答無用ではないが、巧みに攻撃を回避しながら、最小限の斬撃で確実に魚人を無力化していく。

が、たった一人自分の身を守りながらでは、あれだけの群れに對する攻撃力としては到底十分とは言えない。門を維持しきれず、次第に押し込まれてくる。いかに腕が立っても一人ではとらえきれない魚人が、脇からすり抜けて門内に入り込みはじめる。

「実際に違うと？」
詩紀嬢は頷く。

「何もないのよ」

「え？」
「無いの。一人はもともと繋がって生まれてきて、初さんの左手、終さんの右手になる部分は最初から足りなかつたのだそよ」

それは、初めて聞いた。

でも、僕らの前で手袋を脱いた事がないのも頷ける。

「じゃあ、あれは義手なんだ」

嘘みたいに精巧な。

近頃では神經や筋肉の電位を読み取つて動く電動の義手があるという話は聞いたことがある。

実際、二人の手の動きは実際になめらかで生活に困つている様子はなく、ただ手袋をはめているだけにしか見えない。

「そうね、ある一面ではそう言つてもいいものかもしないけれど、本質は別だわ」

詩紀嬢の肯定は歯切れが悪い。

「斗流の優れた術者は自らの身体に鬼を降ろしてその能力を使用する事ができる。さおり姉さんが『揺』を喚んで鬼身に変じるようにな」

そしてやっぱりすぐ電波方向に。

また『鬼』だ。

「でも宮藤姉妹は例外。二人は手の形をとつた『師門』の一部と常に繋がっている。あれは身体欠損部を介した専属契約のようなもの。さおり姉さんが状況によつて『揺』のかわりに『機』を降ろすように自由にはいかないけれど、結びつきはずつと強く制御

かに連れ、なます切りに刻まれた巨体がばたばたと倒れる。

篤史兄さんの背後に立つた結香さんの髪が、ゆらゆらとゆれていた、

髪だけじゃない。全身がゆらゆらと不安定に歪んで見える。

『篤史ちゃん、一人で無理しなくていいよ』

『ナイス、それでこそゆつか！ 愛してるぞ！』

『えへへ。あ、ほらそっち』

今度は、何が起きたのか、見えた。

結香さんの髪の幾房かが急激に伸びて蛇のよう魚人に飛びかかり、網と化してとらえ、刃と化して斬りつけ、あるいは鉤爪となつて引き裂く。

引き倒し、貫き、斬り裂く機能を備えた、射程数メートルの全方位攻撃。

このシチュエーションで敵を押しとどめるには最適だ。

確かに『権』は変幻の鬼だけれど、形態保持を外部からの観測に仮託する事で、不確定化の必要以上の波及を防ぎつつ、動的な最適化を可能としたわけね。面白いわ

樞はやはり完全に他人事つて態度だ。

ケモノ魚を彷彿させる。

心臓がぱくんぱくんと暴れ、血の流れる音が両耳からざあざあと響いてくる。

あのいかにも固そうな鱗に刀なんて通じるんだろうか。
篤史兄さんやさおりさんはああ言うが、少なくとも僕の目には無策にしか見えない。

達人のさおりさんはともかくとして、結香さんや鈴菜が武器らしい武器も持たずにそんな連中の群れと対峙しているのだ。愛らしい顔が一瞬で食いちぎられ、頭を失った胴体がどうと倒れて魚人の群れの中に消えていく姿が容易く想像できてしまう。

距離を詰めてくる魚人どもを見ていると、ペたり、ペたりとう足音まで聞こえてくるよう感じられる。

自分のところまではまだまだ距離があるというのに。一步一小歩、鈴菜達に迫る様子を見ているだけでも気絶してしまいそうだ。

「なんで、なんで逃げないの!?」

ついに先頭の魚人の水かきのある手が門扉にかかり、そして容易く引きちぎった。

たちまち十体にあまる魚人が敷地内に入り込む。

「逃げてよっ！ 鈴菜っ！」

『ここはリンリンにおまかせだよ、お兄ちゃん！』

真正面に立っていた鈴菜は右腕をぐるぐる振り回しながら魚人達の前へと駆け出し、

ぱぐしゃつ。

木刀で割られた西瓜のように頭が碎けた。

ただし、先頭の魚人の頭の方がだ。

ちっこい拳の、いかにも素人じみた大振りパンチが、大物マグ

ロなみの頭蓋を完膚無きまでに粉碎したのだ。
筋骨隆々の大男が、大鉈か斧でも殴りつけたような破壊力。
あまりにもあまりな光景に、僕の思考と同じく、後続の魚人達の足も止まる。

『おまえはもう、死んでいるう♪』

頭の無くなつた魚男の死体をびしつと指さして精一杯の低い声で脳天氣に宣言する鈴菜は、相変わらずのちびっ子で。

『そんなんありかよ！』

『七瀬鈴菜、ジャンジャンバリバリいっきまーす！』

鈴菜は群れの中に飛び込み、暴れに暴れ始めた。

『あたたたたたたたたた！』

型なんてない。映画館から出てきた子供がカンフーの真似をして手足を振り回しているのと太差ないというのに。当たるを幸い魚人をなぎ倒していく。

当然攻撃を試みる魚人もある。だが、鉤爪でかすめただけでも、しがけた魚人の方の腕が弾け飛ぶのだ。それこそ突進するダンブカーに、いや、高速回転するスクリューにでも殴りかかったかのよう。

「な、何なの、あれ？」

『さおり姉さんは『斧鉄』って呼んでたわ』

そう言つたのは詩紀嬢、いや、『樞』か。

斧鉄。つまり、斧とまさかり。そういう名前を与えられた鬼なのだろう。

二人が回復した事を喜んでばかりいたけれど、『血が出た』ってのは鬼の力が使えるって事でもあるんだ。

『斧鉄』は武器であると同時に討伐の権限を意味するから。こ

さ

「その鬼の話が真実として、あの事故と何が関係あるっていうの因が加わったことで、不完全ながら『師門』さえコントロールできているのよ」

「あ、えーと

話はさらにいかがわしい方向に向かう一方だ。

しかし、よく知る幼なじみ達の言葉を簡単に切り捨ててはならない、と感情だけでなく理性のどこかが訴えている。

昨日からの一連の電波話が真実であるかを見極めるなら、彼女たちが前提として語っている内容が事実であると確認することだ。

事情をよく説明して初さん達に手袋を取つてもらえれば。大変失礼とは思うけど、彼女たちなら間違ついたら謝ればすませてもらえるんじやないか。

いや。思い出せ。

昨日さおりさんは「実演」しようと言つていたじゃないか。

僕がこの結論に達することを予想して、前もって証拠を見せておこうとしていたという事か。

しかし、詩紀嬢の言葉を鵜呑みにするなら、さおりさんは鬼に変身して暴れてみようとしていた、という事になるのではないか。
篤史兄さんやジュウ兄さんが必死で止めるわけだ。

「あはは、は」

どうしてこうも理屈が通るんだろう。

こんな陽気の中だといふのに、どこか薄ら寒い。

「信じられないけれど、理解はできなくもない、という顔ね」
おおせの通りです。

でも。

『血が出ていない』者が、本来なら縁遠い鬼と縁を結ぶためには、強引に鬼の下ろしどころを作れば良いのではないかということ。例えるなら身体を媒介にした魂の接ぎ木ね』

「つまり」

自分が口にできない事を、冷静な彼女に言わせる僕は卑怯者だろう。

「身体の一部を欠く事で、鬼を呼び込み一体とする」

「でも」

あの日。

幼い鈴菜はただ瞬きする以外はぴくりとも動かず。
右目を失つた撫菜はただ奇声をあげて笑い続けるのみだった。
頭部に傷を負つて身体の自由を失つた鈴菜、片目と理性を失つ

た撫菜。

その後二人が、鬼と呼ばれる何らかの超自然的な存在に『憑かれる』ことで健康を取り戻したとすれば。あの回復ぶりも納得できる。

「でも、あの娘達が自分で自分を傷つけたわけじゃない」

「その通りよ。それは別の誰かの望み」

不快な話だった。

「例え他人がそれを狙ったとして、僕があの道を選ぶのを誰が予測できたって言うのさ。警察もあの落石に不審な点は無いって断言してた」

「そうね。でもここは珠坂だから」

そう言う詩紀嬢は託宣を下す御子のように見えた。

「彼らにだって自分たちの手を汚すなんて考えはなかつたし、口に出すこともなく、ただ心の中で想像するだったのよ。もしも、もしもある娘らあたりが大きな怪我をして、よしんばその拍子に『血が出て』くれるなら、我が一族も安泰となるだろうにとね。つまり彼らにも罪はないのよ」

「なら、単なる偶然だよ」

起こったのが偶然であつたとしても、望んだのが当然なら罪がない筈がない。

それほどに一族の榮達を願うなら、自分の目をつぶすべきだつた。一か八か命懸けの賭を親戚の小さな子供に押しつけようなんて望むような連中がまともであるはずがない。

「ああ、ナナってつくづくマゾヒストなのね。ここまで言わせようなんて」

そう言つてうつむいた詩紀嬢の口元が、わずかにつり上がつた。

変わらない景色。天井。

ジュウ兄さんが取つたのは釣り竿ケース。

「あと、ほら、ナナ」

「おっと」

放つてよこしたケースを開けると、黒光りする鉄塊が二つ。

どつかで見覚えのある小型の自動拳銃だ。

うわあ。

バッグ・ケース類の中身が想像できるんですけど。

「なんていふか、想像より安っぽい、ですね」

取り上げてみると異様に軽い。

「もともと生徒から取り上げたやつよ。ナナが使うのにちょうどいいと思って持つてきた。ガスも弾も十分あるから、持つてきなさい」

「ほれ、ホルスター」

「……」

あほくさ。

大規模サバイバルゲーム大会ですか。

「攻撃開始は17時前後と予知されている。16時には配置を完了しろ。また、本作戦は以後、クリケット作戦と呼称する。なお、バナナはおやつにはカウントしない。携帯電話は充電してグルーングモードにしておけ。以上だ」

つくづく、認識が甘かったようです。
詩紀嬢とともに屋上に陣取つた僕は、双眼鏡をのぞきながら携
帶に怒鳴つていた。
「何ですか、何なんですか、あれはあ！」

顔を上げた彼女の顔は常日頃の能面じみたそれではなかつた。

一分の隙もないアルカイックスマイル。

「私は北斗の頭『樞』であり、珠坂の『紀』として偶然を司る白銀珠比女命。その私が彼らの願いを聞き届けたのだから。自

らの意思で何も選択していないナナをしてあの出来事に責任があるなんて、甚だしい思い上がりでしかないのよ」

ああ。

これは人の域を超越し、人の感情を捨て去つたものだ。

まだまだ理解が足りなかつた。

ここまで聞いてもたとえ話だつた。物語だつた。他人事だつた。

「それから。私の事は天候か何かぐらいに思つておきなさい。人間新川詩紀としての立場上、ナナが気に病むから頭は下げてみせたけれど。私にナナ達の言う善惡の感覺はわからない。そのところを良く理解して。さもなくばきっとまた無駄に悩むことになるから」

さおりさんの話、先ほどからの話。それらすべてが真実だと、やつと実感を持つて納得できた。

血が強すぎれば、特定の鬼との縁が強すぎれば、どうなるか。者がどうなるか。

信仰の核としての役割を与えられ、鬼を降ろしつばなしにした者がどうなるか。

さおりさんが言うように魂が脳の判断に干渉するのなら。鬼の魂に支配された新川詩紀嬢の思考は既にヒトのそれではない。きつとこれが、鬼、なんだ。

指示棒でペしペしと掌を叩きながら、さおりさんが言つた。

「十悟？」

「おう」

ジュウ兄さんは、ホワイトボードに貼られた珠坂市内の地図にマークできゅいきゅい音を立て書き込んでいく。

近くの川に凸マーク。そこからひかれた矢印は、長い長い上り坂を一直線に駆け上る。

矢印の先はここ。紫城高等部。

「ええと、あの」

説明を求める困惑のつぶやきは無視された。

「誰か予知った？いや、遡上を確認したのか？相当規模が大きそうだな」

さおりさん

の言葉に、さおりさんは頷く。

「敵予想進路はこの通り。不発弾発見の名目で緊急の避難命令が発令され、斜線の範囲が無人となる予定だ」

敵言つた。敵言いましたよこの人。

で、何が来るって？

「我々の担当区域は最終防衛ライン。優先順位は要人の安全確保、ついで敵戦力殲滅、それから諸君らの安全、最後に被害局限だ」

それってつまり、あたりは気にせず死んでもがんばれ、って意味ですか？

ジュウ兄さんが続ける。

「幸いここは丘の上。視線の通る高いビルや他の丘陵も確保されるし、マスコミも完全にシャットアウトされるから、基本的に遠慮は不要だ。派手にいけ」

宮藤姉妹が自分の胸を指さし、顔を見合わせた。

さえた目に天井がさえる。背筋が凍る。

同じ建物の中にあんなモノが居る。眠れるわけがない。

あんな能力には抵抗しようがない。でも、例え無駄だと分かっていても無防備な状態をさせるわけがない。

先人達。斗流十家（ああ、最初は七家か）なんて集団の創始者達。彼らは自分たちが何を生み出したか分かっているんだろうか。

さおりさんの話を思い返してみる。

要するに、神と同じ力をヒトの意思で制御しようとした、って事になるんだろうけど。

そのために、よりもよって、本来斗流が対抗すべき敵である鬼の力なんのを使つた。

例え鬼が意思らしい意思を示さなかつたとしても。ヒトに理解できない意思を持っているかもしだいとは、考えなかつたんだろうか。

そんな無茶をやろうとした彼らも、とうに鬼に憑かれていたのかもしれない。

4/8 金曜日

「今日は篤史さん達と一緒に登校しますからね。逃がしませんよ」

珍しく強い口調で宣言した僕に、篤史兄さん達は困惑気味だった。

「なに？」せっかく氣を使ってやつたってのに」

どういうわけか婚約者扱いされてしまつているから、そういう態度に出ても分からなくもないのだが。あれが実は『くるる』と

「あー初終、お前らは適度に加減しろ。さおりもな配置は以下の通り。私とリンリン、それから篤史ちゃんと結香ちゃんが前衛担当。宮藤姉妹、十悟とベンベンが後衛だ」

「見敵必殺、見敵必殺！」

鉢巻はノリノリ。可愛らしい女子中生が連呼する台詞じやありません、それ。

「で、僕は何をやれば」

「近衛兵。ゴールキーパー。人間の盾」

さおりさんが列挙した中では、最後のが一番本質に近い気がする。なんとなく。

「何を守れと？」

激しく嫌な予感。

「それはもう、言わずもがなよね」

「やつぱり」

「七夏君が責任持つて連れてきなさい」

どうせそんなことだらうと。

そこに、ジュウ兄さんがいろいろのつた台車を押してきた。

「ほい」

篤史兄さんにゴルフバッグを渡す。

「これは撫菜の分か」

キヤスターのついたケース。楽器の輸送につかわれるようなやつだ。

大きさから想定するとチョロか何かが入つていそだが。

ただ、ペリカンケースにペンギンのステッカーはある意味ミス

マッチだと思う。

「これは俺の」

「まさか？」

篤史兄さんは突然真剣な表情になり、

「詩紀に厭きて、俺の魅力に気づいたのか。はあ、俺つて罪作り」

「とつちやだめ！」篤史ちゃんは私の！」

結香さんに威嚇されてしましました。

「取りません」

「とか言って、油断させようとしてない？」

「ないない。ありますんつて」

ううん、今日の結香さんはより一層子供っぽい気が。

「ぐるるるー」

まだ警戒されている様子。せいぜいチワワ程度の迫力しかないけど。

そして今度は背後から忍び寄る気配。

「じゃ私と行こう！」

（以下同文）

左右から飛びついてきた七瀬姉妹を、身を沈めて紙一重で回避成功。

「うちつ！」

「まるで別人」

空中衝突した二人が恨めしそうな顔を向けてくる。

「もしかしなくとも？」

「あのねえ。僕が中学行ってどうするの。すぐ道分かれちやうんじゃないの？」

